古今和歌集

u_

※漢字の読み方

安積ｱｻｶ　葦ｱｼ　天ｱﾏ　海人ｱﾏ　雨衣ｱﾏｺﾞﾛﾓ　天の門ｱﾏﾉﾄ　菖蒲ｱﾔﾒ　荒磯海ｱﾗｿｳﾐ　斎垣ｲｶｷ　石上ｲｿﾉｶﾐ　卯ｳ　空五倍子ｳﾂﾌﾞｼ　朸ｵｳｺﾞ　大祓ｵｵﾊﾗｴ　大幣ｵｵﾇｻ　熾ｵｷ　晩稲ｵｸﾃ　尾上ｵﾉｴ　音羽山ｵﾄﾜﾔﾏ　麻生ｵﾌ　女郎花ｵﾐﾅｴｼ　織姫ｵﾘﾋﾒ　篝火ｶｶﾞﾘﾋﾞ　葛ｶﾂﾞﾗ　挿頭しｶｻﾞｼ　雁ｶﾘ　笠取山ｶｻﾄﾘﾔﾏ　唐衣ｶﾗｺﾞﾛﾓ　唐国ｶﾗｸﾆ　神奈備ｶﾝﾅﾋﾞ　簪ｶﾝｻﾞｼ　櫛笥ｹｼｹﾞ　葛ｸｽﾞ　紅ｸﾚﾅｲ　蟋蟀ｺｵﾛｷﾞ　越ｺｼ　去年ｺｿﾞ　濃紫ｺﾑﾗｻｷ　隠るｺﾓﾙ　榊ｻｶｷ　佐保山ｻﾎﾔﾏ　五月雨ｻﾐﾀﾞﾚ　柵ｼｶﾞﾗﾐ　篠薄ｼﾉｽｽｷ　鴫ｼｷﾞ　飛沫ｼﾌﾞｷ　白山ｼﾗﾔﾏ　薄ｽｽｷ　菅ｽｶﾞ　杣人ｿﾏﾋﾞﾄ　高砂ﾀｶｻｺﾞ　闌けるﾀｹﾙ　襷ﾀｽｷ　橘ﾀﾁﾊﾞﾅ　鶴ﾀﾂﾞ　経緯ﾀﾃﾇｷ　袂ﾀﾓﾄ　懈くﾀﾕｹ　葛ﾂﾂﾞﾗ　端ﾂﾏ　露ﾂﾕ　常磐ﾄｷﾜ　疾くﾄｸ　撫子ﾅﾃﾞｼｺ　幣ﾇｻ　根蓴ﾈﾇﾅ　狼煙ﾉﾛｼ　萩ﾊｷﾞ　蓮ﾊｽ　初雁ﾊﾂｶﾘ　花筺ﾊﾅｶﾞﾀﾐ　花薄ﾊﾅｽｽｷ　柞ﾊﾊｿ　日置野ﾋｷﾉ　蜩ﾋｸﾞﾗｼ　彦星ﾋｺﾎﾞｼ　藤袴ﾌｼﾞﾊﾞｶﾏ　布留ﾌﾙ　秀つ枝ﾎﾂｴ　籬ﾏｶﾞｷ　水脈ﾐｵ　澪標ﾐｵﾂｸｼ　御竈木ﾐｶﾏｷﾞ　水門ﾐﾅﾄ　裳ﾓ　殯ﾓｶﾞﾘ　紅葉葉ﾓﾐｼﾞﾊﾞ　黄葉ﾓﾐｼﾞ　唐土ﾓﾛｺｼ

山颪ﾔﾏｵﾛｼ　木綿襷ﾕﾌﾀﾞｽｷ　節ﾖ

※物名

ｳｸﾞﾋｽ鶯　ﾎﾄﾄｷﾞｽ時鳥　ｳﾂｾﾐ空蝉　ｳﾒ梅　ｶﾆﾊｻｸﾗ樺桜　ｽﾓﾓﾉﾊﾅ李の花　ｶﾗﾓﾓﾉﾊﾅ
杏の花　ﾀﾁﾊﾞﾅ橘　をがたまの木　ﾔﾏｶﾞｷﾉｷ山柿の木　ｱﾌﾋ葵　ｶﾂﾗ桂　くたに　ｻ
ｳﾋﾞ薔薇　ｵﾐﾅﾍｼ女郎花　ｷﾁｶｳﾉﾊﾅ桔梗の花　ｼｵﾆ紫苑　ﾘｳﾀﾑﾉﾊﾅ竜胆の花　ｦﾊﾞﾅ尾
花　ｹﾆｺﾞｼ牽牛子　めど　ｼﾉﾌﾞｸﾞｻ忍草　ﾔﾏｼ花菅　ｶﾗﾊｷﾞ唐萩　ｶﾊﾅｸﾞｻ川菜草
さかりごけ　ﾆｶﾞﾀｹ苦竹・苦茸　ｶﾊﾀｹ川竹・皮茸　ﾜﾗﾋﾞ蕨　ｻｻ笹　ﾏﾂ松　ﾋﾞﾜ枇
杷　ﾊﾞｾｦﾊﾞ芭蕉葉　ﾅｼ梨　ﾅﾂﾒ棗　ｸﾙﾐ胡桃　ｶﾗｺﾄ唐琴　ｲｶｶﾞｻｷ伊加賀崎　ｶﾐﾔｶﾞ
ﾊ紙屋川　ﾖﾄﾞｶﾞﾊ淀川　ｶﾀﾉ交野　ｶﾂﾗﾉﾐﾔ桂宮　ﾊｸﾜｶｳ百和香　ｽﾐﾅｶﾞｼ墨流　ﾜｷﾋﾞ
熾火　ﾁﾏｷ粽　ﾊﾙ春　ﾅｶﾞﾒ眺め

※

かな序

やまと歌を
よろずの言の葉に繋らせるのは　人の心の種ですよ
世に在れば　何かと多くの事柄に係わり
あれこれしなくちゃいけなくて
見るもの聞くものにつけ
人は様様に心動くなら
思いを声にせずに
居られませんよね
鶯さんの花に鳴き
蛙さんの水に住む声も
生きとし生けるもののらは

ほらほら　聞こえて来ましょう
皆　歌を詠わずには居られないのですよ
力なんて入れず天も地も動かし
それよりもっとそっちの
酷く恐ろしい奴らさえ
幾らでも泣かせて
男と女の仲だって
うまく和らげては
刀を振り回してる侍も
心慰めて遣りましょうよ
歌でね

歌ってね
この世の始まった時から　もう歌だったんだよね
初めに歌ったのは下照姫さんと云われてて
高い空で心のままを声にしてたんだ
でね　地に足を着けて歌ったのが
あのスサノオノミコトさんなのさ

つまり姫は好きに歌って楽しくても
声の数も定まらないようでは伝わり難いし
その心も知られずに直に忘れられて
でもそれをスサノオさんはね
こっちまで降りて来て
三十一の声に揃えて
詠ってくれたんだよ
きっと　私らの頭にも
すっきり収まる為なんだよね

こうしてね
咲く花を愛で
気ままな鳥を羨み
霞を哀れみ露を悲しむ
そうした色んな切ない事に
多くの言の葉は乗せられたんだな
遠い処だって
旅立ちの始まりは

足元からで年月を渡り
山なら麓の塵や泥を積んで
遂には雲の棚引く天衝く高みです
歌にしたって同じ事

難波津の歌は　帝の歌の始まりですよね（註：一つ後に出て来ます）
安積山の歌は←采女が戯れに詠いました

はぃ
私なら
あなたを
浅くなんて
思ってないよぉ
まぁ
だけど
安積山の
影まで映す

井戸は浅いねぇ

この二つこそ歌の父母　手習いする人も初めにします

さあ
どう歌いましょう
そのさまは六つ有りますね　確か漢詩も六つでしたか

一つ　そえ歌（後の仁徳帝の為に）

難波津に
花は咲いてますけど
冬籠もりも過ぎて　今を春と
咲き出すんですよね
この花は

（註：即位を促す臣下が、花に皇子を寄えてますね）

二つ　かぞえ歌

咲いてはいるけど
口を噤む
花に思いを尋ねたりしてさ
味な真似でもしてる積もり？
痛いだけでしょうが　ほら
身に病は
知らず矢と刺さり

（註：確かにあれこれ数えられますけど、どうなるんでしょうね、これ）

三つ　なぞらえ歌

　　　早くにもう
霜を置く朝に起きて
　　　発たれては

あなたを恋しい度に
　その霜とも
消え果てる身ですよ
(注：己が身を朝の霜に準えては、お昼は辛いですね)

四つ　たとえ歌

私の恋ったら
荒磯海の浜の真砂を数え尽くしたって　アラソウミ
まだ足らない
思いを幾ら詠んで数えても尽きなくて
(注：恋多き女って訳ですね、喩えが砂粒じゃ多過ぎませんか)

五つ　ただこと歌

嘘のない

世であったなら
どんなにか
あなたの言葉は
嬉しいだろうな

（註：誰でも思う事ですかね、日頃嘘ばかり吐かれていては）

六つ　いわい歌

三ツ葉に四ツ葉に
こちらの御殿は
それは豊かに
軒端を重ね
富み栄え

（ご祝儀は貰えたみたいですね）

さて歌は
今の世の人は
色に心を奪われて
花ばかりで実の無い歌
好き者らの艶事を詠い散らす歌
そんなのに埋もれ人に知られなくなり
花薄の穂とも表に出したくとも
真っ当な処では誰にも
聞いて貰えなくて
でも世と歌の
係わりの
始めを思えば
決してこんな事ではなかったんですよ

だって古（イニシエ）の代代の帝は
花咲く春の朝
秋の月の夜毎

臣下を召しては事につけて
歌を詠ませてたんですよね
そして
花を寄えて詠もうにも
何処をか行き惑うとか
月に思いを沈ませるにしろ
先の知れない闇に迷うとか
そんな臣下の心の様を
よく　ご覧になられて
その　愚か賢いかを
見抜いて居られたんですから

それはかりじゃ有りませんよ

小石は巌の喩えに長寿を願い
筑波山の蔭は有り難い我が君
身に過ぎる歓びに心は包まれ
富士の煙に寄えて恋う人を見

高砂住の江の松は古い馴染み
荒れ里の松虫の声に友を偲び
男山に男盛りの昔を振り返り
女郎花の盛りをからかうによも
歌に言い立てれば慰めですよ

春の朝には花の散るのを見て
秋の夕べは落ち葉の音を聞き
鏡に映る髪の白雪を歳と嘆き
草露や泡に儚いこの身を重ね
栄え奢った昨日も束の間の事
老い侘びれば親しい友も疎く
心移りに末の松山も波は越し
古い清水も忘れず訪れて汲み
秋萩の下葉の色に独り眠れず
君来ぬ夜を鴫の羽搏きと数え
世の辛さを鶯は竹の節毎鳴き
仲割く吉野川を恨んで来ても

今は富士の山の煙も立つまい
身を長柄の橋と喩えようにも
古い橋も造り替えと聞いては
歌でしか慰めは得られません

昔から
こうして歌は　伝わる内にも
平城の帝の頃よりまた盛んに広まって行きます
帝御自ら　歌の心を御存じだったのでしょうね
その御時に　正三位柿本人麿こそは歌の聖です
これは帝も人人も身を一つに合わせたのですね

帝の御目には
秋の夕べの龍田川に流れる紅葉は　錦と見立てられます
人麿の心には
春の朝の吉野の山の桜は　雲かとばかり思われるのです
また
山辺赤人という人は　思いも寄らぬ妙なる歌を詠みます

人麿の赤人の上に立つのは難しく
赤人の人麿の下に立つのは難しい　って事だったのです

この人人を措いても　また優れた歌詠みは代代に現れて
絶える事はありませんでした
この御代より先の歌を集めて
万葉集と名付けられたのです

それからは古の事をも歌の事をも知る人など
僅かに一人か二人になってしまったのですよ
であってさえ歌の心得の有り無し様様でした
平城の御代より百年余り　御代は十代に及び
今や古の事も歌の事も知る歌詠みは僅かです
さて更に言うなら官位の高い人達に就いては
軽軽しく加えずに置きますけど　その他には
この頃の歌詠みでは六人の名が挙がりますね

僧正遍昭　絵に画いた女に惚れてしまうのか　良く出来ていても薄っぺらい

在原業平　花の匂いは残してても色は失せてる　走る心に歌が追い付かない
文屋康秀　商売人がパリッとした服を着てる　言葉は巧みでも計算高い
宇治山僧喜撰　秋の月の筈が暁の雲を見てる　もやもやと分かり難い
小野小町　いい女の…あぁと悩めるかの趣　艶めかしいけど弱い
大伴黒主　山家のおっさんが花の陰で寝っ転がってるか　俗臭い

他に名の知られた人人なら野辺に生う葛（さづら）かに
這い拡がり　林に繁る木の葉かに多く居ます
でも歌と思ってるだけで解ってないんですよ

そうして　今上の帝の天下を治められるのも
四季の時を九つ数えます　あまねく御慈しみ
その波は八洲の外まで流れ　広き御恵みの蔭
それらは筑波山の麓よりも繁くおわしまして
万の政をお執りになられる御いとまに
諸諸の事に御目配りされる余り
古の事をも忘れまいとて
それらをまた興そうと

今も御目を懸けられ
後の世にも伝われよ
と
延喜五年四月十八日
大内記紀友則
御書所預紀貫之
前甲斐少目凡河内躬恒
右衛門府生壬生忠岑らに仰せ付けられ
万葉集に入らない古い歌や自らの歌も
奉らせなさり

そんな中からも
梅を翳すより始め
時鳥さんの声を聞き
紅葉を折り雪を見るに至るまで　また
鶴亀につけ君を思い人をも祝い
秋萩や夏草を見ながら妻を恋い
逢坂山に至っては手向けを祈り

更には春夏秋冬に入らない種種の歌を
選ばせなされた全てで千首の二十巻を
名付けて　古今和歌集と言うのですよ

こうして
この度集め選ばれた歌は
山下水かと絶える事なく
浜の真砂と数多く積もり
今は飛鳥川の瀬になる恨みも聞こえず
さざれ石の巌となる悦びばかりですよ
さて我ら
春の花の匂いは少ないか
虚しい名のみ秋の夜かに長いかと嘆き
或いは人の耳を恐れては
歌の心に恥じるかとも思えましょうと
棚引く雲の立ち居につけ
鳴く鹿の起き伏しにつけ
この同じ世に生まれ来て

この歌集を撰する時に巡り合えたのを
貫之らの喜びと致します

人麿は亡くなったけれども
歌の事は無くなってません
たとえ時は移り事は去っても
喜び悲しみの行き交ってても
この歌の文字は有るのです
青柳の糸なら絶えたりせず
松の葉とも散り失せはせず
まさきの葛とも長く伝わり
鳥の足跡と久しく留まれば
歌のさまを知り言の心を得ていよう人ならば
大空の月を見上げるように
彼らにとっては古を仰いで
我らの今を恋わない事など有り得ましょうか
！

巻第一　春歌上

001

さても
年の明けずに立つ春ですね
なら　えっと今日の年って
まだ去年なのかな
新しい年なのかな
ま　どっちにしろ時を得て
もう春だとは言えますよね
これは

002

あのね
袖の濡れてだって
夏には水を掬って
秋も過ぎ冬が来て
湧き水も凍ってさ
で　また
春の初めの風は立つなら
氷もきっと解けて流れてようね
（光速の早送りだね）

００３
春は来た！
って言えば
春霞でしょ
でも何処？
ほら吉野山
雪　降ってるんですけど

００４
　来てますよ！
雪に降られようとね
　もう春は
立って来てるんです
　そして
その凍ってる涙もね
　ほら
今に解けましょうよ
　ね
悲しいきりの鶯さん！

００５
そうして
梅の枝の
鶯さんは
春に向かって鳴いてるよね
ん…

でも
まだ　降ってるんですけど
雪

006
ん！
でも　春なんですよ　これは
雪は枝に降り掛かってても
ほら鶯さんの鳴くからには
それ梅の花と咲いたんです

007
ほら　それって春へ向く心を
じっと深く染めてたんで
消えようもない雪さえも
花と見えるんですよね

008

忝くも恩沢に浴し
春の陽の光りの当たる
私でしょうとも
降る雪を載せる髪では
やっぱり白く
こんな姿の侘びしさよ
こりゃまた
老いの自嘲ですかなぁ

００９
霞は立つなら
木の芽も張るかな
なのに
まだ　花のない里に降る
今から
咲く花は散るかの
春の雪とはね

０１０

春は早過ぎたかなぁ
それとも
花の遅過ぎるのかな
鶯さん！
はっきり聞かせてよ
でもまだ
鳴かないんだよなぁ

０１１

皆さん
春は来た
なんて仰ってますけども
未だに
鶯さんは
鳴いてくれないんでしょ
て事は
それって

違うんじゃないですかね

０１２

　　　谷の風に解け
　　氷は裂け
あちこち波と噴いてる
　　それこそ
　　　春の初花かな

０１３

谷へ渡る風へ
花の便りを
添えましょう
鶯さんなら
その香に
里へ誘われて

０１４

鶯さんの谷を出て
　鳴く声なしには
　里では来た春を
誰に知れましょう

０１５
　春は立ってるのに
花の匂いもなくては
山里の鶯さんの声も
もの憂げですよね

０１６
あのぉ
私の家
野辺の近くでね
鶯さんは　ほら
鳴いてるなって
もう　朝な朝な

聞こえてますよ

０１７
　もうここに居るんだってばっ　私ら
って出ては行けないけどさ
　やめてよ野焼きなんて
だってほら若草に隠れて
　こんな日和は二人っ切り
いちゃついていたいでしょ　だっ

０１８
ねぇ　あんた
狼煙を上げてる　ノロシ
係りなんだってね
見て来てよ春日野を
そうして知らせてよ
若菜の摘めるのは
あと　何日かを

０１９
山奥なんて
松の雪だって消えてないのに
都じゃもう
野辺の若菜を摘んでるんだね

０２０
浅い空も押し撓め
今日も春雨また明日も
良いよ　良いよ
上がれば　ゆらり
瑞瑞しい　若菜摘みに
出掛けて見ようよ

０２１
それでも　おや
若菜摘む袖に　雪が掛かってる

それでも　寒っ
君に贈る為さ　野原を行くよぉ

０２２
えっと　あれは？
はい　若菜を摘みにです
皆　白妙の袖を振り振り
行く姿も　映えて嬉しく
さぁ春日野へ　ですよね

０２３
ご覧なさい
山襞を
ほら
風に煽られ
春の身は
冷えるって
霞を羽織ろうと

ほつれて弱い横糸じゃ
その濃いや薄いに翻されて

０２４
にしても
松の緑は
その春に
常磐ながらも色鮮やかに
また一染めの深みですよ

０２５
夫の冬着も
晒して張る
野辺を降る
春雨に染まる緑の深みは
また洗われて増してます

０２６

芽吹く柳の枝は
糸を縒って懸けてるようです
この春風に乱れ
　蕾も綻び
　　花咲かせ

０２７
その柳の枝は
浅緑色に糸を縒っては
煌めき弾けてる露を
白玉かと貫き通してますよね

０２８
鳥は取り取り
囀り渡れば
其処彼処　改まる春の若やぐ程に
私は独りに
老いて残され

０２９

先の行方すら
何を頼りとも
知れはしない
子を呼ぼうと
鳴いてはみる
山深くに独り
残された鳥か

０３０

春は空に
声響かせて
白雲を過ぎる
その道すがらの
雁へ託そうよ
北の人へと
言伝てを

０３１

霞の立つ
空に
春の色は
見捨て
雁の北へ
帰るのは
住み慣れる
里の
花なき
眺めへ
身を向ける
しかない
んだね

０３２

梅を折って来たんですけどね
その香の袖に移って咲くかに
花と見付けて鳴きに来てます
ほらほら
鶯さんが

０３３

色よりも
これまた
て事なら
私の庭に

梅の花の香こそ盛るのを
あぁ香しいって思えて
どなたの袖の触れてか
移して行かれたんでしょ

０３４

庭の側に
梅なんて
その香は
待つ人と
味気ない

植えちゃいけませんよね
袖に焚かれてるかなって
間違えたりしたら
思いをするだけで

０３５

梅の花の
ちょっと
誰なのよ
移り香と

側に立ち寄った切りでも
て咎められちゃうんです

０３６
鶯さんも
青柳の糸で
縫うらしいね
花笠を
そんな梅を
頭に挿そうか
ほらね　若いでしょって
老いを　隠せるかなって

０３７
ぁ
あ
離れて
見てたって
惹かれてしまう
そんな

花も折って
手に取ればこそ
梅の尽きない色香は
また心に染みますよねぇ

０３８
その色も香も
知る人ぞ知る
梅の花ですよ
あなたの他には
誰に贈れましょう

０３９
私なんて　この前
真っ暗な山道を越えてても
それは春ですものね
香の匂うだけで
どの辺りに梅の咲いてるか

で道はどう行くかも
知れましたから

０４０
いや　夜は却って
月の白く明るいと
梅の白は紛れてね
私なんて　この前
香りだけを頼りに
咲く花を見付けて
折って来ましたよ

０４１
春の夜って　闇は
何をしたいんでしょ？
花の色は見えなくたって
梅の香は隠しようはなくて

０４２　応酬版

さあ
人の心は知りませんけどね　にしても
無沙汰は致しましょうとも
こちらの古馴染みの里には　こうして
私を変わらず迎えてくれる
梅の花は昔のままに香ってて　それなら
ほら折る事も出来ますけど

０４２　和解版

これは無沙汰を致しまして　さあ
人の心は分かりませんよね　でも
こちらの古馴染みの里なら
昔のままを香らせてますよ
梅の花を折って参りました　ほら
これこそ私の心ですからね　さあ
受け取って頂けましょうか

０４３
その春の来る度に
流れる川に咲く梅の映って
折られれはしない水の花では
袖を濡らすだけでしょうね

０４４
そんな年を経ては
川面はもうすっかり
梅を映す水の鏡ですよ
花の散り落ちて来るのを
塵に曇るとでも言いたげに

０４５
家の梅ですもの
その移ろうのを明け暮れ
目を離さずに居たものを
何時散ったんでしょうね

私の知らぬ間に

０４６
あぁそうだ
梅の香を袖に移して
姿のままに
留めて置けたなら
過ぎた春も
偲ばれましょう

０４７
それより
必ず散るものなんだって
花は見てましょうよ
なのに…これって？
　おっと　梅の香ですよ
袖に移ってるようで
何としましょうかね

ややこしぃ事になったぞ
いやはや

０４８
あーあ
せめて梅の花よ！
散ってしまおうと
香のみは残そうよ　そしたら
お前を恋しければ
思い出せようにな

０４９
ほぉう
これは植えてから
初めて咲くんだね　なら
どうか桜の花よ！
散るなんて事はさ
教わらないで置こうよね

春を知り初めるままにね

０５０

山の
あんなに
高くに咲いては
誰にも賞められないよ
……なんて悲しがらないでね
その桜色の映えるのを
ほらちゃんと私は
見てるからさ

０５１

で　私
山桜を見に来てるんですけども
峰からずっと尾まで続いてる
春の霞に隠されるばかりで

０５２（染殿后＝良房女の前にて）
老いはしたけれど
花さえ
見れば
もの思う事もなし

まあな…

年は過ぎ　齢を重ね　老いもするさね
だけども　こうして　眺めて居られる
咲く桜に　今は何を　憂うもあるまい
これ→って
ウチの娘の事なのさ　ホッ

０５３（渚の院＝惟喬親王の別邸にて）
あっそ
にしても
桜の絶えて

蕾むも咲くも
散るもないなら
この世の春はさぞ
のどかでしょうかね
あなたのお心にしても

まあな…

桜なんて
この世の何処にも
無かったらなぁ

そしたらさ
春を過ごす心にしても
のどかなものでしょうよ

桜を全て無くしたなら…
その咲く花こその
のどかではなくの

春の心でしかなくてさえ
いや…
悉く
世の桜などは消し去れば
この
渚の院の花にこそ
さぞ
のどかにも
真新しくも
春の心は添えましょうよ

０５４
こんな処に
石に激しく落ちる
滝なんて無かったらなぁ
そしたらさ
向こうへ渡って　桜を折って来ように

持って帰って　人にも花を見て貰えように

０５５
見ただけで
こんな見事な山桜なんて
どう語り尽くせましょう
どうですか
皆さんそれぞれ手折って
家へ持ち帰りましょうよ

０５６
振り返って遠くに
都はと見晴るかすと
ほら　朱雀大路の柳と
家家の桜とで絢い交ぜに
錦を春と織り上げてますよ

０５７

こうして桜は
色も鮮やかに
香も変わらず
昔のままに咲くけれど
老いて私独り姿を変えて行くよ

０５８
おや
まぁ
春霞は立って
山の桜なんて
すっかり隠されてましたのに
それを何処を探して
どなたなのでしょう
折って帰られたのは

０５９
桜の花なら咲きましたよ

　それとも
山合いから見るなら
　　　白雲でしょうか…
　桜なら咲きました
山合いには
　白雲の花とも見上げられ

０６０
ぁ
　　　そう言えば
　　吉野山辺りに
　咲いた桜なんて
あれって空から降る
雪じゃないのかって
見誤られてましたね

０６１（太陰暦・弥生が二ヶ月で）
人の心に飽きる程に

桜花は
弥生の閏月を
春に加える年だけは
ずっと
咲いてたって
良さそうだけどなぁ

０６２
よく当てにならないなんて
言われたりしてますけどねて
こうして咲いても散らずに
年の内にもほんの偶にしか
顔を見せないあなたの事を
ちゃんと待ってる
桜花の私なんです

０６３（返し）
よくも仰いますよ

今日が明日だったら
雪と降るかにすげなく
散ってましたでしょうに
消えずにいらっしゃろうと
誰があなたを花と見ましょう

…それとも

(女の声で)
今日が明日だとしたら
花の私は雪と降るかに
散ってましたでしょう
たとえ消えずにいても
あなたはそんな私でも
花と愛でて下さいましょうか

…て事でしょうかね

０６４
もう
これで散り果てては
幾ら恋しかろうとも
どうにも詮ないなら
花を折れる今日こそ
桜は折って置こうか

０６５
いえ
折ったりしては却って
惜しくもありましょう
花の近くに宿を借りて
散り果てるまでは
眺めてましょうよ

０６６
衣を深く桜色に

染めて着ようよ
そしたら
花の散った後の
形見になろうよ

０６７
私に会いたい訳でなく
ただ花見がてらに
訪れるあなたにしても
桜の散った後には
恋しくなりそうですよ

０６８
見る人もなくて
山里に咲くのなら
他の桜の散った後に
咲いたら良いのに
そしたらきっと

花を惜しむ人達に
見て貰えましょうに

巻第二　春歌下

０６９
春霞の棚引く山に咲いてる
桜花にしたって
もう散ってしまおうかなと
姿を衰えさえて
それで色を変えて行くのか

０７０
待ってよと
頼みさえすれば
咲くままに

散らずにいてくれるのなら
そんな桜に
それよりはもう
何を思いの
募る事なんてありましょう

０７１
そうかなぁ
残りなく散ってこそ
愛でられるんですよ
そんな桜花でしょう
咲いたままで居たら
その果ては世の中を
憂えてばかりですよ
誰だってね

０７２
いやぁ

ですからね
散るに決まってるじゃないですか
もう　凄いですよ
散って　散って
散り　乱れて
帰ろうにも
家路は　何処へやら　さて
花散る眺めに　紛れて
こんなじゃ今日は
この里辺りで
旅寝です

０７３
この
儚い世とも
まるでそっくりじゃないですか
咲いて見えながら
その間にも

散り急ごうとする
花の桜では

０７４
桜花よ
もう散るのなら
散ろうよ
そうしなよ
だって
散らないからって
昔ここに住んでた馴染みの人は
見に来てくれそうもないものね

０７５
ここ
雲林院に散る桜なんだけどね
春なのに
雪かと降りながらも

消え難そうだよ
その花は

０７６
このぉ
花を散らしてる風の奴め！
何処に宿を取っているか
どなたかご存じなら
教えて下さいよ
私が行って
恨み言
並べて来て遣りますからね

０７７
なぁ　桜よ！
こうして見てるとね
さっさと　私も
散ってしまおうかなって

もう一花のもう一盛りなんて
うっかりウロウロしようなら
見苦しい姿を晒すだけだもの

０７８
一目
この桜をご覧になって
直に帰られたあなたの
またお越し下さろうか
とも
今日一日は待ってみて
その後ならもう良いさ
散るなら散って欲しい
かな

０７９
何で
春霞って

桜を隠すのかなぁ
花の散るのだって
ほんの短い間だもの
見ていたいのになぁ

０８０

御簾を垂らし
家に籠もって
伏せる内にも
移り行く春を
知らぬ間に遣り過ごし
楽しみにしていた桜は
終わってしまったかな

０８１

儚く
枝から
散る花だもの

溝に落ちては
泡と水に流れてるよね

０８２
それを眺める私でさえ
心穏やかではないよ
花にも心は有ろう
咲かぬままには
居られぬのか
こうも散り急ぐ位なら

０８３
などと言う
人の心こそは
その花より淡く
風に抗うもなくて
移ろいもするんだよね
桜こそ散り急ぐとも思われないよ

０８４
久方の色を仰ぐ　何故か
長閑な光りに散る桜を映す　目に
溢れる花の心は　舞い狂うままの
狂わせるままの　その春の日には
何も静まらずに　それは

０８５
さてそんな花の心か
なら試しに花の辺りを避けて吹け
春風よ
自ずから散る桜など見えようかな
花の姿は静まろうよ

０８６
にしても
吹雪くかとも散らされる花ですよ

この上また吹き募るのなら
それで桜にどう散れって
風は言うんでしょう

０８７
桜を
振り返って振り仰いだ山の高みに
風は
心任せに花を散らしてるようです

０８８
春の　涙か
雨に
花を　惜しまぬ
人は　なく

０８９
水は　無かろうとも

花の　散り果てた
波と　立とうか
空を　風には
残る　桜は

０９０
古びてしまった
奈良の都だろうと
咲く花の色だけは
変わらないのさ

０９１
花花の
霞は色を隠らせようと
せめて
香りだけ盗んで来いよ
風なら
春の山から吹き降りて

０９２
せっせと掘って
花の木も
植えてましたよ
だけどね
もう已めました
春が来て
咲いては直ぐに
色は失せ
それを習っては
人の心は
移ろうんだもの

０９３
里なら
至る処春一色でしょうにね
なのにもう咲いた花も

これから咲く花も
何でかなぁ？
色んな花は見られるけれど

０９４
こうも濃く
三輪山を隠そうからは
その春霞の奥深くに
人に知られぬ花とか
咲いてるんでしょうか

０９５
いざ
今日一日
この山野辺へ
思う様迷い込んで遊ぶんだ
春に日は暮れようとも
また花花の蔭は映えて

失せたりなどしないものね
一夜の宿とも
頼れよう
だろ

０９６
ああ　何時まで
春の山野辺を
心のままに
彷徨って
これでもし花は散らない
なんて事になったら
過ぎ行く時さえ
消え失せて

０９７
盛りの時なら
来る春ごとに

巡ろうけれど
この命の永らえたからさ
花花ともこうしてまた
相まみえられるのは

０９８
そんな花の時の
必ず巡り来るように
人の世も変わらぬのなら
過ぎてしまった
遥かな昔も還り来て
甦ってくれましょうにね

０９９
おっと
風ですよ
このひともとの花だけは
避けて吹けよ　って

頼めるのなら　そう
言って遣るんですけどね

１００
鶯さんだって
鳴いてたのに
見に来てくれるかなって
待ってた人は
もう来てくれそうもないなって
その花を折ったりしてるんです

１０１
咲きはしても
花という花は
散ってしまう
でも
そんな春の移ろい易さを
恨むばかりに居れましょうか

誰にもまた巡り来よう春ですもの

１０２
春霞に見える
千種の色って
山に咲いてる
花という花の影を
映してるのかなぁ

１０３
春の山は
遠く霞んで
隠れてたって
まだ花花は盛ってましょう
吹き下ろす風にも
花の香りは届きますからね

１０４

眺める花の
移ろう姿には
心さえ移ろって
ぁ
でもそんなの
色に出せないよ
隠しておかないと
あなたに知れたなら
どうしよう　困るもん

１０５

鶯さんの声に誘われて
　野辺から野辺へと
歩き回ってるけど
もう散り行くばかりな
　移ろう姿の花に
風の吹くばかりで

１０６
でね　鶯さん
恨むんならね
風を恨んでは　鳴くんだね
私　花には触れても居ませんから

１０７
どうか
もしそんな花の
散り已むのなら
私　鶯さんより泣きましょうとも

１０８
春霞の立田山に響く鶯さんの声も
散る花の姿を寂しくて鳴くようで

１０９
でね　鶯さん

木から木を伝って飛び回れば
羽風が花を散らすって
それを誰のせいだって
そんなに鳴くんでしょうかね

１１０
でね　鶯さん
幾ら　鳴いてみたって
移ろう花の姿は
止められませんよ
何も今年ばかり散る
花でもないでしょうし

１１１
ならば
皆で駒を揃えて
また古い都へも
見に行きますか

今頃ならば降る雪かとも
花は散ってましょうから

１１２

花のそうして　散るからって
何を恨もうも　どうなりましょうか
私にしたって　世に在っては
孰れ散る身と　決まってましょうよ

１１３

花と咲いた姿さえも衰えさせ
私は色を無くして行く
徒に
身は
移ろう世を過ぎて行く
降り頻く雨を眺め耽るに任せ

１１４

‥
あの
ええっと
そんな事でね
花を散らす心なら
糸に縫って行くんだよ
そうして散るごとの花をね
縫い合わせてみるって　どう？

115

そぉ
そうして私　この前
まだ盛る春は志賀の
山越えの折りなんて
道を避けようもなく
花は散り映えるかの！
女達に行き会ったよ

１１６
ええっと
まだ雪の春の野まで
若菜を摘みに来たんだけど
あれ？　春も末かに
散り交うのは花ばかりでは
道に迷ってしまって
これって

１１７
それって　→
あなたね
夢を見てるんですよ
なんて言う私も
山寺に宿を借りて
夢はまた何処までも
花散る山辺の眺めです

１１８
にしてもう
吹く風と谷の水の無くては
花の姿は伝わらずに
来る風を追い
谷の流れに沿いでもせずには
山深く隠れて咲く花でさえ
見付けられましょうかね

１１９
ふと遠目に
眺めるだけか
でもまだ女達は
盛る藤の花へなら
立ち寄りそうだよな
遣り過ごそうってなら
蔓よ　這い纏わってくれ
遠のく足に枝の折れようと

１２０
波の　立ち返るかに
家に　藤は咲き満ちて
人は　立ち帰り難そうに
花を　眺めるんでしょうか

１２１
宇治川に浮かぶ
橘の小島の崎に
また山吹の花は
今なら咲き満ちてましょうかね

１２２
雨に濡れる色も
その薫りさえ
鮮やかに
心捉えるのは

山吹の花花です

１２３
でも今宵の山吹は
あなたは居なくて
無闇に咲くな！　って
言いたい程ですよ
花を見たいよなんて事言われて
あなたの為に植えたんでしょ！

１２４
吉野川の岸に
風に吹かれて
咲く山吹では
その水底に映るのも
花を散らす姿ですね

１２５

あっりゃー
もう散ってるよ
蛙さんの鳴くばかり
井手と言えば山吹なのに
そりゃ花の盛りに来なくちゃ

１２６

いやーそんな盛りの
何処とか何時なんてね
すっかり忘れちまってさ
春の山辺なら仲間と群れて
遊び回って旅寝したいよなぁ

１２７

あー
ずっと春だなんて思ってたら
さっさともう　これっ切りに
行き戻らないのも　春なのか

見過ごして来ちゃったかなぁ
　射るかに疾しと過ぎる
　　春の立ってからの月日を

１２８
花だってもう
何処にも見付からなくては
鳴いて散るのを止めようにも
ただ物憂げに黙るばかりの
鶯さんですね

１２９
山越えで　水に流れて来る
散り花なら見付けたんで
川を遡って探したんだ
でも山深くにさえも
春の眺めは何処にも無くて

１３０
思うに春霞にしたってさ
帰りの道に立ってるんで
立ち行く春を惜しんでも
何ともならないんだよね

１３１
にしても　鶯さん　このまま
ひとたび　行けば　この春は
ふたたび　来よう　筈もなし
鳴きなよ　ずっと　声の限り

１３２
止めたくたって
為す術なしに儚くも散る
花ごとへと添うてしまう
この心ですかね

１３３
だってこの春はもう
幾時も有りませんものね
そう思ったら見て頂きたくて
濡れたって構うもんかって折った
雨の日に咲いていた藤の花なんですよ

１３４
弥生　つごもり

今日を限りの花でなくてさえ
ずっと眺めて居たいのに
咲く陰に　こうして
身を置くのにも
残り僅かな
春のこの時は惜しまれて
立ち去ったりなんて出来ましょうかね

巻第三　夏歌

１３５
家の池に藤は咲き
波も花を咲かせて
なら　さあ何時かな
山から時鳥さんの来て
夏だよって鳴き出すのは
もう間もなくでしょうかね

１３６
どうやら
こうしてる

姿の艶やかさの
あぁって愛でられるのを
独り占めしたいらしいね
春も過ぎてから
今更に咲く
この桜は

１３７
山に居る時鳥さんへ
皐月はまだだけどね
里を向いて羽搏いて
もう今から鳴いてよ
去年の古い声のままでもさ

１３８
違いますって　時鳥さん！
今から初初しく鳴いて
耳にも新しいんです

皐月が来てからの
馴染んじゃった
声ではなくね

１３９
皐月を待ち遠しげにも橘の
花咲こうとしてる香を嗅ぐと
旧い恋人の袖の香りなんだよな

１４０
何時の間やら　もう
皐月は来てましょう
ほら今　時鳥さんの鳴く声は
はっきり耳に届きましたもの

１４１
時鳥さんってば
やっと今朝来て

鳴いてはくれて
でもまだ旅姿なら
ここに咲いた花橘に
宿を借りて貰えますか

１４２
今朝は
音羽山を越えて来てるんですけど
ほら今　時鳥さんの鳴く声は
遙かに梢の向こうからも
音は耳に届きますよ

１４３
この夏初めての時鳥さんの声って
耳に届いただけでも誰をもなしに
恋したくなっちゃうな　にしても
何がどうともなりゃしないのにさ
ったく

１４４（石上寺ｲｿﾉｶﾐﾃﾞﾗにて）
奈良はもうすっかり古い都ですよ
とは言え
時鳥さんばかりはね
石の上の布留の寺に
懐かしく昔の通りに
鳴いてくれますけど

１４５
あぁ　また
夏山で鳴いてる時鳥さん
昔が思い出されて辛いんだ
分かってくれる心の有るなら
私には声を届けないで欲しいな

１４６
ほんとだよ　その鳴く声でね

別れたあの人だけじゃなく
離れて来た里での事まで
恋しく思い浮かぶよな

１４７
それにね
時鳥さん
あっちこっちの里で
鳴いてるのも嫌なんですよ
あなたを思う私としてはね

１４８
忘れようもないあの事を
また辛く思い出す
そんな時は
常磐山に鳴く
時鳥さんの
振り絞る声は

紅を染めて
血反吐を吐くかに
私だって泣いてしまうよ

１４９
悲しい声は
聞かせるけど
涙など見せない時鳥さん
私のように泣きたいのなら
この袖の濡れてるのを借りて
どうか替わりに泣いて欲しいな

１５０
他の誰とも比べられない
悲しみを乗せた声を
頻りに競い合って
山時鳥さん達ったら
ずっと鳴き続けてるよね

１５１
声を限りに鳴くからには
山へ帰ろうなんてせずに
今はこの庭で鳴いてなよ

１５２
ねえ待ってよ　時鳥さん
言伝が有るんだってば
私もう　生きて行くのに
疲れちゃったんだって

１５３
五月雨に降り籠められ
ものを思えば夜も更けて
鳴く声は遠く耳に届くけど
あの時鳥さんって今頃独りで
何処へ行こうとしてるのやらね

１５４
あぁ時鳥さんったら
暗い夜だからなのかな
道に迷っちゃったのかな
私も家に寂しく独りなので
去り難そうに鳴いてくれてる

１５５
宿に借りてた橘の花なら
まだ枯れてないよね
なのに何でかなぁ？
時鳥さんの声のしないの

１５６
何しろ夏の夜だものね
臥したかと思えばもう
時鳥さんの鳴く一声に

東の空は明けて行くよ

１５７
暮れたかと思えば直に
明けて行く夏の夜だよ
「あれ？　もう明ける夜って
まだ　飽き足りないんだけど」
って　時鳥さんは鳴くのかな

１５８
時鳥さんの恋しい人は
夏山に籠もりっ切りで
帰って来ないからかな
声振り立てて鳴くんだ

１５９
去年の夏は古びるまで
鳴くだけ鳴いてくれて

同じ時鳥さんかどうか
声は変わらないけどな

１６０
五月雨は空を轟かせて
そんな夜を通してでも
時鳥さんは何を憂えて
鳴くばかりなんだろう

１６１
待ってても時鳥さんは
声を聞かせてくれない
なら余所で鳴く音でも
山彦は答えないかなぁ

１６２
時鳥さん！
松の山なんかで鳴かれてはね

思わず
待つ人へと募る
恋しさも
弥増してしまうよ

１６３
今になっても
あの頃へと
恋しさは募ってしまうんだね
それでまた時鳥さんは
ここへ来て鳴くのかな
昔住んでた処だものね

１６４
時鳥さんったらさ
憂いを託つ私でもないだろうに
卯の花に止まってさ
この憂き世の中に

鳴き暮らすのって
どうしてなのかな

１６５
蓮なら濁りに染まらぬ
心を持ってように
何で欺こうと
葉の露を
玉に見せ掛けるのかなぁ

１６６
夏の夜は
まだ宵かとも
早
明けて行くけれど
まだ
西の空に懸かろう月は
雲の何処に宿ってようかな

１６７（花を分けてよと言うお隣さんへ）
えぇ？
家の撫子を欲しいって
塵一つも払う心配りで
咲いてから大切に育て
妻と床を共にするかの
愛しい常夏の花ですよ

１６８
水無月　つごもり

夏と
秋とは
行き交い
ならば空高くの
その通い路の片側には
涼しい風は吹いてましょうか

巻第四　秋歌上

１６９
立つ秋は
さやかには
目に何は映せるのかな
と　立つ
風の音に驚かされては
いきなりに
そうだよ
来たか　秋は
耳に
と

１７０
だって
川の風にしても
なんて涼しいんでしょう
寄せる波と共に
立つ秋ですかね

１７１
ほんと
いい風ですよねぇ
ほら
吹き返されて
夫の衣の裾も
新しい
裏付きですよ

１７２

早苗を植えてたのは
つい
昨日かなと
でも
何時しかと
もう
風に稲葉は戦いでる
秋さ

１７３
その風の立つ
秋の日から
ずうっと　あなたを待って
天の川原に
立ってます！
（織姫より）

１７４

そうだっ
楫を隠しちゃえば
こっちへ渡った彦星さんは
もう戻れないよね
でしょっ
渡し守さん

１７５
天の川に紅葉葉の散り敷かれ
彦星さんなら
橋と架かった
その上を渡り
逢いに来よう
そう思っては
飽きもせずに
織り姫さんは
七夕の秋を待ってるんだよね

１７６
今宵ばかりは
霧立ち籠めてよ
恋い慕って待った
やっと逢瀬の川辺の
夜は明けないままにね
（また織姫より）

１７７
なのにね
彦星さんは
浅瀬は何処か知れなくて
白浪をウロウロ辿っては
天の川を渡り切れないで
夜は明けてしまいました
とさ（笑

１７８

年に一度と決めたんだね
織姫さんってつれないな
年に一度逢うばかりでは
逢った事にもならないよ

１７９

でも毎年逢う事にはして
それはそれで良いけれど
共寝出来る夜を数えれば
何とも少なくてお気の毒

１８０

織姫さんへと女の子達の
お供えした糸は長く伸び
そんなで末永くこの恋は
続いて行きましょうかね

１８１

七夕ですから今宵訪れる
あなたには逢いますまい
織姫さんみたいにずっと
待つのは困りますものね

１８２（七日の夜の暁に）
今はもうこれでお別れと
まだ天の川を渡らぬ先に
涙で袖も濡れてしまうよ

１８３（七月八日に）
あーあ　これで
今日から先はまた
次に来る年の昨日を
時を何時かと数えては
待ち続けるしかないのね

１８４

ほら　月の光りはくっきりと
木の間を洩れて来てますし
それに目を落とすのなら
もの思う心も尽きてしまう
あぁ秋は来たんだなって

１８５
秋は誰にも
来ましょうけれど
この身ばかりの悲しみを
思い知らされてしまうんですよ

１８６
秋なんて
この身のみに
来よう筈もあるまいに
聞こえて来る
虫の音を

誰よりも先ず
直ぐにも悲しいんです

１８７
目に映るその眺めごとを
秋にはどれも悲しいんです
木の葉も染まり紅に移ろって
それを限りに散るかと見えては

１８８
独り寝る床にしても
草や葉ではあるまいに
秋ともなれば日暮れては
露かに涙に濡れて湿ります

１８９
何時はと
限るものでもないけれど

秋の夜こそ
もの思いも極まるよなぁ

１９０
こうも時は惜しまれ
秋の夜は冴えるのなら
ただ寝て明かす人をさえ
気に障ってしまうんだよな

１９１
白雲を通う
雁一羽一羽の
羽を打ち交わす
その数まで見せる
秋はずっと月に
明明と夜だね

１９２

夜は更けて
真夜中だよね
雁の鳴く音のみ
聞こえる空に
月の渡って
行くのは
見えて

１９３
月を眺めて
何とも知れず
独り悲しいんだ
この身一つの為の
秋でもなかろうにな

１９４
遥か月に生う桂でさえも
やはり秋ともなれば

紅葉と色付かせてるから
それで更に鮮やかに
照り輝くのかな

195

　　秋は夜にしても
　月の明るさったら
何と比べようもなく
くらぶ山は暗かろうと
きっと越えられよう

196

蟋蟀（コオロギ）さんったら　もう
そんなに鳴かないでよ
秋の夜長を遣り過ごし
ずっと　ものを思って
もっと泣きたいのは私だもの

１９７
長くても秋の
夜は明けたのに
鳴き已まない虫は
ずっと悲しいのかな
泣き明かす私と同じで

１９８
萩も色付く
秋は深まって
それで眠れぬ私と同じに
蟋蟀さんも
悲しいんだね

１９９
秋の夜ともなれば
露に当たって

殊更寒いんだろうな
どの草むらも
虫の音は侘しそうだよ

２００
あなたを偲んで独り待つ里は
忍ぶ草の生えて荒んでは
松虫さんの鳴くにも
悲しみは募って

２０１
秋の野に道に迷ってしまったよ
松虫さんの鳴く声を頼りに
人を待つ宿を探そうか

２０２
松虫さんの声を聞いたよ
私を待つんでしょうかって

さあ訪ねて行くよ　秋の野へ

２０３
紅葉葉の
散っては積もる
私の家に
誰を待つのやら
鳴き頻る
松虫さんだけど

２０４
歩いてたら
蜩が鳴いてね　ﾋｸﾞﾗｼ
日が暮れたかと
そしたら山陰かよ

２０５
蜩の鳴く

山里の夕暮れには
風の他に
訪ねる人もないね

２０６
待つ人で
ないにしろ
雁の鳴く声を
今朝聞き初めて
嬉しくなるよ
久しぶりで

２０７
初雁だね
秋風に乗り
声は届いたよ
携えて来たのは
誰の手紙かな

２０８

家の前の田に
稲負えと鳥は鳴き
今朝吹く風に
雁は来た

２０９

もう
早くも
鳴く雁か
白露の彩る
木木さえ
紅葉は
まだ
で

２１０

春は霞へ
霞んで去り
今ぞとばかり
秋霧の上を
鳴く雁さ

２１１
夜も寒くなる頃さ
衣を借りたいなぁと
雁は鳴いてるなら
萩の下葉だって
色付いてるよ

２１２
秋風に
声を帆に
上げてるよ
そんな舟にも

見えはするけど
天の門を渡ってる　アマノト
雁だったんだね

２１３
憂き事
辛い事を
思い連ねて
雁は列なって
鳴き渡るよ
夜な夜な
秋空を

２１４
山里の秋は
殊更寂しいね
鹿の鳴く声には
夜毎目を覚まされ

２１５
奥山に
紅葉葉を
踏み分けて
鳴く鹿だよね
その声を聞く時
秋はただ悲しいね

２１６
秋萩に
妻の姿を
慕い侘びて
麓の響くまで
鹿は鳴くのかな

２１７
秋萩を

絡め倒し
鳴く鹿だね
姿はないけど
声は澄み通るよ

２１８
秋萩は
花咲かせ
ならば今頃
高砂の尾上の
鹿は鳴いてよう

２１９
秋萩の古い枝に
咲く花を見るようだよ
君は変わないね
元からの心は忘れてないもの

２２０
秋萩の下葉も色付いたね
これから先
独り身の寂しさに
眠れぬ夜を過ごすのかな

２２１
空を渡り鳴く雁も
涙を落とすのか
悲しい思いの
私の家の庭まで
萩の上に置く露と

２２２
萩の露を
玉のように
緒に通そうか
でも手に取れば

消えてしまったよ
ま　枝に置くままを
見てるしかないんだな

２２３
手折ったりしようならね
そりゃ零れ落ちますよ
秋萩の枝もたわわに
置く白露ですもの

２２４
萩はもう
花を散らしてようか
あの狭い野の
露にも霜にも濡れたって
夜は更けようと
出向いても行きましょうとも

２２５
秋の野に置く
　白露は
　　ほんと
　　　玉ですかね
　　蜘蛛の糸に
　　　貫かれては
　　掛かってる
その煌めきと来たら

２２６
いや　手折ったのはね
名を愛でてるだけだよ
僧正なのに女に手を出したとか
言い触らさないでよね
女郎花さん
ｵﾐﾅｴｼ

２２７
そんな厄介な女郎花だ
嫌だなと　見るだけで
通り過ぎて来たんです
だってそこ男山ですよ
いい男は幾らでも居て
私など相手にもされず

２２８
秋の野に
宿を取ろうかと
女郎花の名を好きでね
旅先でもないんだけど

２２９
女郎花さんの咲き競う
そんな野辺に宿ろうなら
それで何もしなくても

浮き名は立つでしょうよ

２３０
秋の野の風に靡くに任せて
女郎花さんったら
真の心は誰に寄せるのやら

２３１
もおぉ女郎花さんったら
秋にしか逢えないって
織姫彦星の天の川に
生えてるとでも？
な訳ないでしょ

２３２
誰の秋もなくて
何処も秋なのに
女郎花さん独り

早くも色に出て
姿を移ろわせるのは何故？
誰かさんには厭きたのかな

（それとも）

誰の秋でもなく
なら
女郎花さんだけ
厭きられる秋でもないよね
なのに何故独り
早くも色に出て
姿を移ろわせてしまうかな

２３３
妻を恋う鹿が鳴いてるね
女郎花さんだって
知らないのかなぁ

君の住む野の花さ
もう選り取り見取りだろ

２３４
ぁ女郎花さんだなって
花咲く野を過ぎ
吹いて来る秋風の
目には見えなくても
香りで知れるんだよね

２３５
人に見られるのが
余っ程嫌なんだろうね
女郎花さんったら
秋霧に身を隠すばかりなんて

２３６
共に暮らせたらなあ

もの思いに耽って
独り切りよりは
女郎花さんを
庭に植えて
ずっと見て居たいよ

２３７
心に懸かる
女郎花さん
荒れた庭に
独り残され

２３８
皆さん
もっと見て居たいでしょうに
何で帰ろうとされるのかなぁ
野辺は女郎花さんの花盛りで
もう今宵寝て行こうかなって

思えてしまいますけどね私は

２３９
どなたが来られて
脱ぎ掛けたやら
秋の来る度に
藤袴は咲き
野に香り

２４０
泊まって行かれた
あなたの残り香かしら
忘れようにも忘れられない
匂いをずっと漂わす藤袴なのね

２４１
何処からか香なら匂い立って
どなたの藤袴なんでしょうかね

秋の野に脱いで掛けて行くなんて

２４２
野の花薄にしろ
庭に植えたのだって
もう眺めたりするもんか
穂の出てるのを見てる内にも
秘めた恋さえ顕れてしまいそうで
秋なんて侘しい限りだよ

２４３
秋の野の草の
その袂なんでしょうかね
花薄って
穂を出して
靡いたりして
恋する女の姿の
袖で招くようです

２４４
あぁ
心に懸けるのは
私だけなのかな
蟋蟀さんの鳴くのに囲まれ
夕陽に映えてる
大和撫子なんて

２４５
春には
どれだって
緑にすっかり揃い
一つの草かなって
…
秋には
皆それらは
各各花を咲かせて

色色なんだなって

２４６
下紐を解きたくなる程
疼く身を綻ばせるかとも
数知れず花咲かす秋の野で
思うまま女を抱いてやろうか
乱れたって好きにさせてくれよ

２４７
露草に衣を摺り染めしましょう
そんなで身を激しく絡ませて
思いのまま抱かせてあげる
染めた色が朝露に濡れて
褪せたって私そんなの
どうって事ないのよ

２４８

（→あら、そんな事も有りましたっけ）
さて
そうこうする内に
里はすっかり荒れ
人は老いたからでしょうか
家の庭も籬も　ご覧の通り
すっかり秋の野と
なっておりまして

巻第五　秋歌下

２４９
吹けば直ぐ
草木は萎れて
うむっ　そうか
そんなで　山風は
秋を荒らして行って
嵐って言われてるんだ

２５０
でもね　そうして
草木は色を変えるけど
海に咲く波の花には

秋は来ないんだよ

２５１

常盤山だって
色付かないよ
なら　きっと
常磐木を渡る
風の音とかで
秋を聞くんだ

２５２

ほらもう
霧は立って
雁は鳴いてる
片岡の朝の原は
そりゃ紅葉も
してようね

２５３
神無月の
まだ時雨は
降らなくても
もうそんな内に
色移ろわせるのは
神奈備の森なんだな

２５４
でもそんな
神奈備山の
紅葉にはね
思いなんて懸けないよ
心の色まで移ろうから

２５５
取り分け
西を向く　枝の

木の葉は　色付くよ
そっちは　秋の初めだもの

２５６
　秋風の吹いた日より
その音は已まなくて
そしたら
　音羽山の峰の梢も
　　色付いて来るよなぁ

２５７
白露は
その色一つで
どうやって千千にも
秋の木の葉の色を
染めてるのかな

２５８

えぇっと
それってね
秋の夜の露は
露と置きながら
雁の涙こそが
野辺を紅に
染めてる
からさ

２５９

ん：　そうかなぁ
様様に
秋の露は
色を違えて
置くからこそ
山の木の葉って
千種の彩りなんで

２６０
その白露もなんだけど
時雨さえびっしょり
漏れる守山なんて
下葉まで残らず
色付いてるよ

２６１
じゃ
雨に降られたって
露さえ漏れない
笠取山はどうやって
色付いたんでしょうかね

２６２
だって
神の斎垣を這う葛（クズ）さえも
秋には敵わずに

敢えなく
色を移ろわせてますもの
でしょ

２６３
雨降れば笠を取らなくちゃ
それで笠を取られては
笠取山の紅葉葉は
濡れて色を深め
それを映せば
行き交う人の
袖の色にしても
照り映えるんですよ

２６４
まだ散らないけど
この今の内からさえも
惜しまれてならないんだよ

紅葉の色は窮まり
この今を限りなのかと
目に映ってしまうのではね

２６５
ったく
誰の為の錦か　って
佐保の山辺を
何で　秋霧は立って
紅葉を隠すのかなぁ

２６６
秋霧は
今朝は立たないでよね
佐保山の柞の黄葉を　ミミ
向こうからだって
見たいんだから

２６７
佐保山の
柞の色は
薄いけど
秋はもう
深まって来てるんだよね

２６８（よそんちへ菊の株を分けてあげて）
せっせと植えれば菊は
植えて秋が来なけりゃ　え
そりゃ咲きませんけど
それにどうせ花なんて散りますけど
でも根まで枯れたりしましょうかね　ま
て事で何れにしろ先は楽しみですな

２６９
雲まで昇って見る菊は
天つ星と見誤られます

２７０

折って挿頭（かざ）そう
露の置くままに
菊の花を
そしたら
この秋は
老いたりせずに
幾久しかろうよ

２７１

植えた時には
咲くのが待ち遠しそうだった菊
それが花開いたんだけど　さて
色移ろう秋に逢おうとは　予め
そこまで分かってたかな　どう？

２７２（菊合にて）
吹上の州浜ですけども
さて　こちらへ
秋風は吹き上げて
そこに立つ白菊は
花か　でないか
波の寄せてましょうか

２７３（菊合にて、仙宮に人の至る姿）
山路へと分け入っては
菊の露に濡れて乾いたのは
そのほんの露の間だったけれど
何時しか私は千歳を経てようとはね

２７４（菊合にて、花の許で人を待つ人の姿）
花を見つつ
人を待ってる
そんな時にはふと

菊を白妙の袖かなとも
見誤られてしまうんですよね

２７５（菊合にて、州浜に拵えた大沢の池の菊）
ほら　そこ
ひともとと見てた
菊の花なんですけれどもね
大沢の池の底にも　おや
誰が植えたのかな　この
同じに咲く花は水に映って
ほら見えませんか
そこ　ほら

２７６
秋には菊を
その盛る限りは
挿頭して居よう
花より先に

散るとも知れぬ
この身を思えば

２７７

えっと
　　これかなっと
折ろうとしたなら
さぁ折ろうかなと
すっかり
初霜に置かれ
その白に紛れては
何処かなとも惑わせる
そんな白菊の花なんだけど

２７８

色を変える秋の菊だもの
ひととせに
ふたたびも

咲き誇る花と見てようよ

２７９
こちらへ移された花にして
花咲かす秋にしても
また花の時は有るんですね
移ろってまたしても
深まる色を増す菊ですから

２８０（よそんちの菊の株を分けて貰って）
あの
譲られた
菊ならんだけど
咲き初めた宿から
こっちへ移したもんで
花の色も変えて移ろったよ

２８１

佐保山の柞の黄葉葉も
　もう散ろうからと
　　　ならば
夜もずっと見てなって
　照らす月影だよね

２８２（山里に籠もって）
光の届かない奥山なんだものね
　その岩垣に生う紅葉は散ろう
　照る陽さえ見る時はなくて

２８３
紅葉葉は
乱れ散って流れてようか
そんな龍田川を渡ろうなら
その錦は中程で絶えようかな

２８４

龍田川に紅葉葉は流れてるよね
神奈備の三室の山は時雨れてよう

２８５
山を染めてた姿の
恋しいなら
見ては偲ぼうかな
落ちては敷かれた
紅葉葉なんだけど
山颪の風は
吹き散らすなよな

２８６
秋の風には
抗い敢えずに
散る紅葉葉かな
行方も定まらない
この身の悲しくては

２８７
来てたんだね
秋は
だって
紅葉葉は
庭に降り敷かれてるもの
にしても
道を踏み分けて
訪ねてくれる人も無いな

２８８
さぁ
もう直ぐ先だけど
更にと踏み分けて
訪ねるのもどうなのかなぁ
だって紅葉葉で隠されてる
道とも見えてはね

このまま帰ろうか
さて

２８９
月は
秋の山辺を
清かに照らすのは
落ちた紅葉葉の数までも
見せようって心積もりなのかな

２９０
吹く風の色の
千種と見えたのは
秋には木の葉の散るからなのさ

２９１
だって
経は霜　タテ

緯は露　ヌキ
これじゃ弱いよね
山を錦に織りしなに
直ぐ散ろうってもんさ

２９２
世を侘びて
儚んでは
この木の下と
やっと身を立ち寄せたのに
頼む蔭も失せ
紅葉葉は
散るんだね

２９３
紅葉葉は
川に流れて
やがては海に臨んで

行き止まるのなら
その水門には　ミナト
泊まるかとも
深まった紅に
波も立とうね

２９４
遥か神代まで遡ったって
こんなの聞いた事ないよな
龍田川は　水を括っては
これ程に　鮮やかな紅に
自らを絞り染めしてるとは
今こんな直ぐ目の前でね

２９５
どっちを向いて来たのやら
木木の葉の散るに紛れて
真っ暗で分からないよ

そりゃくらぶ山だよ

２９６
秋の
神奈備の三室の山へ
行ったけどね
身に降り掛かる紅の
錦を裁っては
着てる心地だったな
いやぁ何とも
凄まじい散り様でね

２９７
その錦だけどさ
北山の奥まで行ったけど
見る人もなく散ってっては
折角纏ったって
夜に着飾ってるようでね

誰の目にも止まらなくて

２９８
龍田姫の
秋を去る
その道道に
神はおわして
姫は幣を手向ければ
それは秋の木の葉と
散るんでしょうかね

２９９
秋の山ったら
紅葉葉を幣にしてら
手向けるもんだから
それを見てるこっちまで
近くに住んでるだけで
旅心地になるのさ

３００

秋はね
神のおわす
神奈備山を
過ぎて行くからね
それでほら
龍田川にも
幣を手向けるのさ

３０１

秋に
白波に
紅葉葉の
浮いてるのは
海人の流した
舟かって
見えて

来た

３０２
龍田川に
紅葉葉は流れなかったら
水の秋は
誰に知られましょうかね

３０３
あのね
山越えの時　ｼｶﾞﾗﾐ
風の仕掛けた柵を見たんだ
何かって？
紅葉葉は流れに片寄せられ
そのせいで
川を下れずに居たんだよね
な形さ

３０４
風に吹かれ
池に落ちる紅葉葉にしろ
水の清く澄めば
　　その底には
まだ散ってない
その影も映し見せながら
舞い散って

３０５（川を渡ろうと立つ人の屏風絵を見て）
ここは暫し
足を止め
見るだけ
見てから
渡ろうかな
雨と降るかの散る紅葉葉にしても
それで川は増したりしないからね

３０６
山の田の守りの
仮小屋に置く露って
いなおほせ鳥の涙なのさ

３０７
ろくに穂も出さない
山の田を守るんじゃな
藤衣は　稲葉の露に
濡れない日はないのさ

３０８
刈り取られた稲の株から
今更に秋に芽を出しても
穂には実る筈もないのは
世を厭き果てたからかな

３０９（茸狩りにて）

お父さぁん！
こうして折角北山にまで
足を延ばしたんだもの
紅葉葉を扱き落として
袖に入れて持ち帰ろうよ
秋も限りと思う人の為にね

３１０（２８４と同じ心を詠む）
山深くより流れ下って来る
紅葉葉に染まった
水の色を見てこそ
秋も限りと思い知るのです

３１１
年の巡る毎に紅葉葉を流す
龍田川の水門は　ミナト
秋の果てて着く泊まりかな

３１２
長月　つごもり

夕月夜かと小暗い
小倉の山に鳴いてる
鹿の声のしてる内にも
秋は暮れてしまうのかな

３１３
長月　つごもり

道を知れるなら訪ねても行こう…
去る秋ならば
道の神に
紅葉葉を
幣と手向けて
もう居なくなってしまったけれど

巻第六　冬歌

３１４
神無月の
時雨れる龍田川は
雨を経緯にして　タテヌキ
錦を織っては
流してるよ

３１５
山里は　それは
寂しさも増すよ
草も人の訪れも
冬枯れだものね

３１６
大空の月の光は
清く冴えてたんで
それを見てた水から
先ずは凍ったたって事さ

３１７
夕暮れ時は
袖から寒くなる
きっと
吉野の吉野山も
雪だろうね

３１８
初雪だ！
これからもうずっと
降ってて欲しいな
ウチの庭の薄を

圧し靡かせて

３１９
でも　雪はまだ
降っては解けるんだよね
だってほら　滾る瀬音は
山から響いて来るもんな

３２０
あれれ？
まだ紅葉葉なんて
川を下って来るんだ
これは　きっとね
降っても直ぐ解ける
奥山の雪のせいで
水嵩は増したからさ

３２１

ここ　古馴染みの里は
吉野の山にも近くて
雪の降らない日は
一日もなくてね

３２２
私の家なんて
雪に降り敷かれて
道もなくなったよ
そこを踏み分けて
訪ねて来る人さえ
居なくてはね

３２３
ご覧よ　降る雪に
冬籠もりしてる草も木も
春には知られない
花を咲かせてしまってる

３２４
山越えの折りの
処も分かたずに
降る白雪なんて
巌に咲く花にも
見えたもんなぁ

３２５
白雪は　もう
吉野の山には
積もってよう
奈良に居ても
寒さも増してて
冷たいものね

３２６
浦の近くだと

降って来る雪なんて
末の松山を越す白波かって
見えるんだな

３２７
白雪を踏み分け
吉野の山へと
入ってしまった
あいつからは
便りも来ないぜ

３２８
きっと山里なんて
降る雪は積もって
住む人の思いまで
消えそうなのかも

３２９

降る雪で
人も通わぬ道なのか
そんな
何の跡も
消えるかの
この思いなんだよな

３３０
でも　そんな冬にしてもさ
空から花は散って来て
その雪の向こうは
春なのかもよ

３３１
冬籠もりに
思い掛けなくも
木の間には
花に見えるまで

雪は降るよ

３３２
明け初める
吉野の里は
残る月に照らされるかに
雪に降られて真っ白ですよ

３３３
消えない上へ
また上へ降り敷けよ
春霞なんて立ったら
雪も稀にしか
見られなくなるから

３３４
で梅の花なんだけどね
もうそれとも見えないよ

だって空を曇らせて降る
何処も彼処も雪だもの

３３５
でもそうして
雪に混じって
色は見えなくても
香だけは花と
匂わせようよ
人に知れるように

３３６
でもそうしたってだよ
その花の香までさえ
降り敷かれる雪に
紛れてしまうなら
見付けて折ろうにも
さて梅は何処かなって

３３７

ま
そうかも知れないけどさ
どの木にだって　木毎に
降る雪の花は咲くでしょ
なので梅かと折ろうにも
どれとも分からないのさ

３３８

師走　つごもり

待ってもいない年は
直に来てしまうけど
別れたままの人からの便りは
冬草の枯れるかに来ないよな
で　どうなったの？　あいつ

３３９
年の果て
今年も終わり
その度に
また雪も
降り増し
この身も古び
歳を増し

３４０
もう
雪の降る年の暮れだね
ついに
この時になってやっと
松だけは
色褪せた木木に後れて
こうやって
見事な姿を眺められる

大したもんさ

３４１
昨日は今日はって
日日を暮らして
飛鳥川かとも
早くも明日か
そんなで月日は
流れ去るんだよね

３４２
行く年って
ほんと惜しいもんですよねぇ
だって
澄んだ鏡に映したこの姿まで
同じに
暮れて翳んで行くんだなって
思えて来て

巻第七　賀歌

３４３

私の　あなた
見えない先まで
小石は
いずれは
巌となって
苔生したって
私の　あなたで
居て下さいね

３４４

千歳ごとを
あなたの命と
数えていたら
浜の真砂と
溢れます
海原を
望む度にも
拡がり渡って

３４５
しほの山は
さしでの磯を
鳴く
千鳥も
八千代っ
八千代って
あなたのご長寿を
嬉しがってますよね

３４６
八千代もの
あなたの命に
私の命も添えて
そうしてあなたは
留め置かれたその命に
私を思い出して下さいな

３４７
今日のこのようにもまた
兎にも角にも永らえて
あなたの八千代の賀まで
お祝いしたいものです

３４８（八十の賀に銀の杖を贈られて）
おや　これは
伐り出されたのは

神様でしょうか
この杖を突くならば
忽ち千歳の坂さえ
越えられるでしょうね

３４９
桜は散って　また散らして
盛るままに　吹雪かせてよ　そしたらほら！
ご覧なさい　老いへの道を
その避けがたさも紛うかに　散り交う花で
曇らせてくれてましょうに

３５０
亀の尾の
山の岩根を
過ぎて流れて
滝と弾ける白玉を数えるのなら
あなたの千代を永らえる数でしょう

３５１（散る桜を見る人を描く屏風に）
徒に過ごす月日なんて
何とも思いませんよね
でも花を見て暮らす
春の日は少なくて
惜しいものです

３５２
春の来て
庭に先ず咲く
梅の花は
まさに
あなたの千歳の挿頭（かざし）と見えて

３５３
千歳の

初めの
例なら
古の頃に有りましたかどうか
親王様からと致しましょうよ

３５４
親王様の万代のご長寿を
そうあって欲しいものと
寝ては思い
起きて数え
それならと
神様も宜しく
お計らい下さいましょう

３５５
鶴亀さえ
千歳の後には
どうなりましょう

なら
ここは
どれ程とも
あなた様のご長寿の満ち足りぬ
私の心にお任せになられては如何かと

３５６
この松には鶴と
お父様の万代をと
お祝い致しましょう
松の千歳の陰には鶴と
私も共に生き永らえたく

３５７（賀の四季絵の為の屏風歌　以下七首）
春日野に
若菜を摘んでは
あなた様の万代を祝う
私の心だったら

社の神様が御存じです

３５８

あんなに山は高くて
雲間に見えてる桜花も
心でだけは登っては
手折らない日は
ないんです

３５９（夏）

もう何年も
珍しいとも思わずに
繰り返し耳に届いて
それでも
時鳥さんの声だけは
聞き飽きるって事は
ないんです

３６０（秋三首）
秋は
住の江に
松風の
吹き渡る
音を聞くや
さっそく声を
合わせては
沖に立つ
白波ですね

３６１
千鳥の鳴く佐保川には
もう霧も立ったでしょう
ほら山の木の葉の色も
濃さを増してますからね

３６２

えっと　常盤山なんですよね
ならば
秋にも色は
変えない筈では
て事は　あの紅葉は
風が遠くから運んで来て
神様にお供えしてましょうか

３６３（冬）
今頃は吉野では
白雪の降り頻って
山を下りる風に
花は散ってますよ
雪の花ですけど

３６４（春宮御誕生のお祝い）
峰は高くも春日山から
昇る陽なら

御子様は
曇る時なく
世を照らす事でしょう

巻第八　離別歌

３６５
因幡の峰に生えてる松を
向こうで眺めたならね
それであなたは私を
待ってるんだって
聞こえて来よう
そしたらもう
直ぐにさえ
戻ってても来ようかなって
（なんてね…）

３６６
で
送る私は
何時までで
あなたの帰りを待てばよろしいのでしょう
原っぱで蜂の鳴くのは聞こえてますけども

３６７
（…ん）
何処までも
遠い雲までで
別れたって
私は心に
あなたを
そっちへ残したままになんてしませんから

３６８
遠い陸奥へ

別れるままに付き添いの
我が子を守る　この心を
関所なんぞが止めるなよ
送る母より

３６９
今日は別れても
明日は近江なら
また逢う身とは
分かりはするよ　でも
いや　泣いてなんかないよ
湿っぽいのは夜露のせいさ

３７０
越のあちらに　ど
帰れそうかに
名も帰る山の有るとは聞いても
春霞は立って

あなたは発たれてしまわれたなら
別れた後には
それは恋しくてならないでしょうね

３７１
別れを惜しむ内にも
もう恋しいようでは
白雲の立つ遠くへと
発たれてしまわれた
その後なんて　また
どれ程の心持ちになってしまいましょう

３７２
ここで別れたからは
それきり遠く隔たって
逢えないんだって思えば
こうして君と居ながらにも
恋しさは先に来てしまうよな

３７３
辛くとも
お伴しようったって
身を分けられはしないからね
この心を
目には見えなくとも
君に連れ添わせて遣りたいよ

３７４
逢うまま塞(さ)くんで
正しく逢坂の関でしょう
なら惜しむ別れの
この人を引き止めようよ

３７５
お尋ねもしませんから

お発ちは何時頃かなんて
置き去りにされるようなら
もう朝露と消える私ですもの

３７６（常陸へ去る際、サハナヅさんへ）
朝に昼に
共に居たい
君と慕おうと
頼みにならない人ですからね
な事ならと　思い立ちまして
今はもう　草を枕の旅路です

３７７（明日、別の女？の家へ寄ってから旅立つよと言われ）
さて
この
先行きですけども
試しに遣ってみて
知れましょうかね

このままに別れて
生きてられたとして
私があなたを忘れるか
あなたが私を見捨てるか

３７８

あなたへと
遠い雲の彼方へさえ
心こそ通って
後れたりしませんから
人の姿ばかりは
別れ別れに見えるだけで

３７９

でもほら　立つ白雲だって
こなたかなたへ千切れて
散らされて行きますよ
断ち裂かれた幣かの

乱れる心を砕いて
立ち別れる旅と

３８０
八重にも重なる　白雲の
そのまた向こうでだって
心は隔てないで下さいね
あなたを思っている私を

３８１
この別れの侘しさって
色でも有るまいに
心に沁みるのって
どうしてなのかなって

３８２
　え？　越の国なら
帰る山ですよね　で

帰ってみえたばかりで
また来た道を帰るのって
何の為の帰るって名の
山なんでしょうかね
こんなの有りか？

３８３
あなたを慕おうにも
遠く隔たってでしか
思いは届けられない
越の国の白山の雪を
見に行きようもない
この身なんですもの

３８４
音は高く音羽山の木に
時鳥さんの鳴くのはね
別れるあなたを

惜しんでなのさ

３８５
秋との別れは
蟋蟀さんも惜しかろうね
ならば諸共に鳴いては
人との別れも止めて
くれないものかな

３８６
秋霧の立つのと共に
こうして立ち別れては
思いは晴れないままにも
君を慕い続けるしかないよ

３８７（源実を見送る女の歌）
命なんてもの　どんなにだって
心の通りに　引き延ばせたらな

そしたら　別れの悲しさなんて
平気よ　何でも無いんだよって
直ぐ　言えちゃうんだろうけど

３８８（源実の歌）
遣わされるんじゃなくてね　今回は
独り思い立っての旅なんで
皆さんとの別れを辛いなら
大方ここで引き返そうかと
そうなりそうなんですけど

３８９（源実に「見送りはもうここらで」と言われた人の歌）
そんなあなたを慕わしくて
つい　ここまで付いて来た
そんな私の心なんですって
その身を帰そうったってね
もう道も分からないんです

３９０（友を逢坂にて送る）
そりゃ
逢いもするけど
ここを越えて
別れもするんだよね
名こそ逢坂なんて
人を当てにさせるだけで

３９１（越へ下る友へ）
越の白山なんて
どう行くかは知らないけど
雪なら雪にしろ
あなたの行き去った後なら
雪のまにまにも
雪を分けて訪ねて行きます

３９２（山を下りようとする人へ）
籬を　日も暮れ方となって

山と　見誤ってくれないかな
ならら　越えるのは止そうかって
一夜　ここにまた宿りされように

３９３（山から帰る時、送る人へ）
もう　お別れでしょうかね
いや　山の桜に任せましょう
さて　引き留められましょうか
花の　花で有るままにさせてみて

３９４（雲林院親王が山から帰られて）
散る　花を吹き巻くまでも
風は　山に吹いてくれよな　そしたら
桜に　帰りの道も紛れてさ
人を　引き留められように

３９５（右に同じ）
で

どうせ咲くんなら
親王様を
引き留められるように
咲こうよ
さっさと帰られちゃったら
花としてだって
がっかりでしょ

３９６（滝をご覧になって帰られる時康親王へ）
お名残惜しくて
この滝へと流れ込む涙で
水嵩は増したと
川下からは見えましょう

３９７（雷鳴の壺での酒席からの帰り際、兼覧王へ）
この激しい雨で
秋萩の花こそ
濡れてしまいましたけれど

それにも増して愛おしく
お別れ惜しまれるのは
あなた様なのですよ

３９８（返し）
そんな心さえ　知りもせず
秋は時雨れる　その間にも
歳を経る身と　なろうとは

３９９（兼覧王と初めて語り合った帰り際に）
お別れなのに
嬉しくもあるものでしょうか
お逢いもしてなかったなら
今宵よりあなた様の他に
何を愛おしめましょう

４００
お別れにも名残は尽きず

袖に涙の白玉を包み
あなたの形見と
旅立ちます

４０１
思いを限りの
涙に濡れる袖は
とても乾くまいよ
また逢える日までは

４０２
どうせなら
何処も暗くなる程に
降らないかな
そしたらさ
春雨に濡れ衣を着せて
あなたには
ここへ留まって貰ってね

４０３
それでも
どうしても
行ってしまわれるなら
何処が道かも
あなたを惑わせるまで
桜は花を散らしてくれ

４０４（山越えの石井で出会い別れる人へ）
湧き水を結ぼう手の
雫に泉を濁らす程に
後片時とも語らわず
尽きない思いは残し
今を限りのお別れですね

４０５（道で会って言葉を掛け別れる人へ）
結ぼう下紐も

先ずは右左へと別れようと
そのまま身に巡らすなら
前で行き合わさるかに
また何時か
お会い出来ればなと

巻第九　羇旅歌

４０６（唐土にて）
彼方かに
遙かを仰げば
高くに懸かる
別れの宴の空の
あの同じ月の昇るのを
春日三笠山にも見たか

４０７（隠岐国へ）
海原を　遥か
島島を　また島へ

漕いで渡ろうって　舟一艘
沖を目指して乗り出したって
そこで漁りしてるあんたらなら
都に残した人へ伝えてくれようか
じゃ　頼んだぜ！

４０８
都を出で立ち
三日か今日は
瓶の原を流れる　ミカノハラ
何時か見たっけ
泉川の風は寒くて
そっちに鹿背山なら　カセヤマ
重ね着の衣を貸せよな

４０９
明け去っては
仄かと染め行く

明石の浦の朝霧の
島の陰へ隠れる姿の
舟の行方に心を映して

４１０（友一人二人と三河国八橋にて五文字（カキツバタ）を詠む）

仮染めの仲じゃないもの　戻る度に
着慣れた衣を張ってくれる人とはね
遂に東の方へと都を離れ来たからは
果てない旅と思いは詰まろうけれど
頼りの友と八橋を見晴るかし渡ろう

４１１（隅田川の畔にて）

名を負う
都鳥なら
都の人を
伝えてよ

４１２
北へ帰る
雁も鳴こう
数の足らずに
連れ添って来た
身内の愛しい
姿は無くて

４１３（東の方より京への途上）
恨めしいのは春霞
山山を隠されては
どっちを向いたら
都へ帰れる境やら

４１４（白山を見て）
そりゃ何時見たって
雪は消えないんじゃね
越路の何で名は白山かは

雪って決まってようね

４１５
この道の先の心細さったら
糸に撚れるでもなかろうに
別れて来た都に思いは募り

４１６
夜は寒さに凍え
草を枕にと
初霜を払っては
旅寝を重ね

４１７
今宵の月は
朧なばかり
二見の浦は
夜明け方に

眺めようか
櫛笥（クシゲ）の蓋を開けて中身を見るかに

４１８（「狩りをして天の河原に至る心を詠め」と親王に言われ）
日がな狩り暮らし
天の河原へまでも
駒を進めたからは
織姫に宿を乞うと致しましょう

４１９（返し、親王に替わって）
でも
ひととせに
ひとたびの
かの人を　待ってるんですから
さすがに　親王様にしてさえも
宿なんて　借りられましょうか
（織姫　現る）

いえいえ　親王様が彼の人ならば
私の他に　どなたが
宿を貸して差し上げられましょう

４２０（朱雀院のお供で、手向山にて）
御幸の安らかにと祈ろうにも
この度は　幣も持ち合わせず
ならば錦と色付いて映え渡る
この手向山の紅葉に代えては
お納めし　神の御心のままに
さぁお受け取り頂きましょう

４２１（右に同じ）
幣に代える手向けとならば
よれよれだろうと
私の袖も切ろうかと　いや
この紅葉の眺めにならば
御心もすっかり満たされ

返されてしまいましょうね

巻第十　物名

４２２　ｳｸﾞﾋｽ
危うく　ひずんでも
あなたの心なんですよ
それでどうして
梅の雫に
ぐずぐず濡れて　嫌だな
ひんやりと　乾かない
すっきりしない
なんて　鳴いてるの

４２３　ﾎﾄﾄｷﾞｽ

来なくちゃいけない
時は過ぎてたからね
待ち侘びて　どれ程
説き勧めたんだかな
やっと鳴いてくれて
人の声だって湧くさ

４２４　サッセ〃
瀬を見れば
波は玉と乱れてるよ
影映せ
水の走る流れに！
とね
で
そんなの拾っても
袖に入れようなら
はかなく消えるさら

４２５（返し）ｻｯｾﾐ
いや
袂しか無いよね　だけど
包めるものかね　何なら
これがそれって見せてよ
ほら
移せ
水玉を
そしたら見て遣るさ
って言いたくなりますよ

４２６　ｻﾒ
ああ
後まで恋しい
香は匂わせてよう
目には
ずっと咲いてるかなって
見えなくて　辛いけどね

４２７　カニハサクラ
水の中に　水玉は
微かには探られましょうか
でも　見付からないよね
波に　風の吹き付けて
浮き沈みするだけさ

４２８　スモモノハナ
春は後
幾日か残る
ものやらと
思い過ぐすも
ものはなく
何を眺める
鶯さんかな

４２９　カラモモノハナ

嬉しい筈が
別れなければならないものかと
もう
逢っている内からも
ものは何とも悲しくて

４３０　ﾀﾁﾊﾞﾅ
山を立ち離れて行く雲は
何処へと留まりようもない
そんな世に身を過ごしてるよ

４３１　ﾌｶﾞﾀﾏﾉｷ
えっと
吉野の滝なんだけど
あれは
浮かんでる泡をか
玉の消えてるって
見てしまったのは

４３２　ﾔﾏｶﾞｷﾉｷ
今や秋だよ
おや　籬の際で
蟋蟀さんも
風が寒くて
夜な夜な鳴くのかな

４３３　ｱﾌﾋ　ｶﾂﾗ
こんなにも
逢う日の
稀になったんじゃ
どうしようか
辛いとしか
どうしたって思えないよ
あの人の　ハァ
浮評も聞こえて来そうで

４３４　アフヒ　カツラ
人目があるからって
次に逢う日が
遠ざかったら
あの人はどうしようか
辛いのを
私のせいにしようかな
そりゃあ
不評を買おうか

４３５　クタニ
散れば　その後には
芥になるとも知らず
花に惑って飛ぶ蝶よ

４３６　サウビ
婀娜っぽさを支う
密やかな姿なんだ

薔薇の花の色艶を
今朝初めて見たよ

４３７　ﾌﾐｻﾍﾞ
白露を玉にして
緒に貫こうってんだね
花にも葉にも
糸を皆へ　しかと
蜘蛛は架けて並べて

４３８　ﾌﾐｻﾍﾞ
朝露を分けては
濡れながらでも
花を見ようって
野山を経巡った
で　もう今はね
知らない処もないのさ
これを皆へ知らせたいな

４３９　ﾌﾐﾅﾍﾞ（折り句）
小倉山を
峰を均そうかって立ち回っては
鳴く鹿だけど　その
経て来た時の流れを
知る人なんて居ない

４４０　ｷﾁｶｻﾉﾊﾅ
秋の近くて
夏とは行き違う野は
何色かって
白露の置く
草葉の色も移ろうね

４４１　ｼﾞｮﾆ
昔馴染みの里に咲く花なら
私を

にんまりさせてくれるかなって
足を運んだけど
色はもう移ろってたよ

４４２　ﾘｳﾀﾑﾉﾊﾅ
ムムム
あれは
鳥共の流行り歌？
ム
野は何も聞こえないぞ
花は咲かないのか
ウチの庭の花を
荒らすばかりなら
ぶっ叩いて遣るからな

４４３　ﾗﾊﾞﾅ
有ると思ったって
頼りにならないなんて

そんな虚しいこの世を
端から無しと　ニナ
思いなしてしまおうか

４４４　ケニゴヅ
ぱっと見
ぶっつけに
拵えたみたいな
花の色の濃さってさ
白露が染めただけなんだね

４４５　メデ
えっと
花の木でもなさそうですけども
花は咲かせてますよね
木の実も生りましょうか
老いたこの身も
願いを込め

遠からず
実のあるお引き立てを賜りたく

４４６　ジブゲキ
ここは山が高くて
常に嵐の吹く里なんだ
花は盛りを見ないまま
散ってしまうよな

４４７　さマジ
時鳥さんは
峰の雲に　早
混じり込んだかな
声は　ほらここだよって
聞こえて来るけど
姿は見るよしもないよな

４４８　カラハギ

蝉の抜け殻は
木ごとにも見付かるけど
そうして亡骸は残っても
魂の行方は知れないんだ
悲しい事にね

４４９　ｶﾊﾅｹﾞｷ
夢で
さて何をかは
慰められようか
現で逢えてさえ
満ちぬ心では
何も

４５０　ｻｶﾘｺﾞｹ
花の色の濃いのは一盛り
虚仮威しなんかじゃなく
鮮やかに　でもそれって

返す返す露が染めたのさ

４５１　ﾆｶﾞﾀｹ
命を繋ぐのは
露ばかりにか！
だけどそれで
生きて行けようか
それだけじゃ
やっぱり辛いんで
もの悲しそうに
野辺の虫さんは
鳴いてるんだね

４５２　ｶﾊﾀｹ
夜は更けて
まだ半ばだけかな
あれ？
もう半ばも過ぎて

傾いて行くじゃないか
秋の山風は吹いて
あの月を返してくれよ

４５３　ワラビ
煙を立てて
燃えるとも見えない
草の葉なんだけどさ
それ誰が初めに
名付けたのかな
藁火だなんて　ま
蕨は萌えるけど

４５４　キサ　マツ　ビワ　バ　セヲバ
いささ時でも待つ内にも
いささか日は経ったんだ
だけどね
心馳せを

傍目には
ちゃんと見せてたよ

４５５　ﾅｼ　ﾅﾐﾒ　ｹﾙﾐ
深くは考えるな
詰めて考えるな
嫌な事に嘆けば
嫌でも堪えて来る身だけど
それを捨てられるでもなし
仕方ないよ

４５６（春の立つ日に、唐琴ｶﾗｺﾄにて）
聞こえる波の音も
春めいて
きっと　今朝から
異なった楽の調べへと
改まったかな

４５７　イカガ゛キキ
櫂に当たる波の雫って
どう見たって
春の匂い香が
咲きながら散る
花みたいじゃないかな

４５８　カラサキ
あいつらってもう川向こうとは
あれ何時から先に渡ってたのか
波路を進んだ跡も残ってないぜ

４５９　カラサキ
ほら
波の花は
沖から咲き
こっちへ散って
寄せて来るよね

水の春ってのは
そう見せる風だよ
って事なのかなぁ

４６０　ｵｼｻﾞﾝ
そりゃ歳を重ね
何やかや黒髪や
変わる姿は鏡に映るけど
こんな事になるのかなぁ
降るのは白雪なのかなぁ

４６１　ﾖﾄﾞｶﾞﾜ
もうね
山近くに雲に閉ざされ
引き籠もってるよとか
晴れる間もない白雲に
また何を言ったところで
もうずっとこんなだのも

出来る事なんてないだろ

４６２　ｶﾀﾉ
繋る夏草に覆われて
沼の水は何処へ
行けようか
楽しめない心を
どっちへ向けようか

４６３　ｶﾂﾗﾉﾐｻ
秋こそ来たけど
桂の実や
他に何やら月に見付かるかな
光りを花と散らすばかりでは
実だって生らないみたいだな

４６４　ﾊｸｺｶｻ
まだ碌に見てないぞ

あちこち花を散らされて
こっちは
辛い思いで
落ちた花をせっせと掃くわ
か
うんざりして落ち込むわ
かで
どれ程の心持ちか
風のせいだ

465　ｽﾐﾅｶﾞｼ

春だね
秋来た雁は帰るけど
帰り道は何処？
何処って何処も春霞
中しかないよ
春霞の中だよ
そこに通い路のなかったら

帰らないだろうね

４６６　ｵｷﾋﾞ

止まらない涙の川は
何処から流れ出るんだろ？
見えないんだよな
見えるならそこは　海の沖
干上がれば　涙は
その海へ流れ込んだからは
その源の
思いの底の深さも知れよう

：

涙の川は流れ出て
止まらないけれど
向かうのは何処なんだろ？
見えないんだよな

見えるならそこは　海の沖
干上がれば　涙は
その海へ流れ込むと見えて
海ほどの
思いの底の深さも知れよう

…源が先だろうけど

４６７　オマキ
聞くところによると
後撒きの
遅れて育つ苗だけど
徒にはならないのさ　アダ
ちゃんと
田の実を付けるんで
頼みとなるんだって

４６８（コで始め、ミで終わり、ザメを掛けて時を詠む）

花を味わい尽くすんだって
その中目掛けて飛び込んで
そしたら　あぁぁぁ
花と一つになっては
散りたくないなって
そんな心までも共に
まさか？　花と散る

巻第十一　恋歌一

469

皐月
鳴く　時鳥なら
咲く　あやめ草
あやめも　何も
見失う
もう
恋をしてる
してしまってるよ
…

（香る菖蒲では　ｱﾔﾒ

（文目は知れず　ｱｷﾒ

４７０
だって聞くったって
音にしか
聞こえずに
何も知れない
あなたって
ほら菊の
夜に置かれた白露も
昼は陽に消されてる
そんなで
夜にばかりは起きて慕い明かし
昼は思い知れぬ耐え難さに焦がれ
身を消す程に私を追い詰めてる

４７１
岩また岩を

高高と波打つ
吉野川の水は速いように
こうして今思えば
もうずっと早くから
あの人を好きだったんだ

４７２
なのに
波の跡もない海原じゃ
舟をどっちへ進めるも
頼りは風の手引きだけ
風なら便りも寄越そうからは

４７３
だけど
音はと便りのあなたでは
逢えない身を独りきり
逢坂の関よりこちらの

音羽山に年を過ごすきり

４７４

あぁ
思いは
立ち返る…
遠く距たろうと
心はあの人へと
置きつつ
返っては寄せる
遥か沖に立つ
白波と

４７５

その
あなたって
目には見えなくて
吹く風としか訪れない

そんな人の姿を恋しいとは
人を思うってこの事だったんだ

４７６
さぁ
見ないでもなく
見たのでもなく
どうしてなのか
そのあなたの姿に心は動くけど
それ切り今日はどうしようかと
でも思い耽れば
どうにもならず
どうしようかな

４７７（返し）
はぁ？
どうしようも
その私の姿を

知れようとも
知れまいとも
そんな思いの
火を灯したら？
それこそあなたの
恋の道標でしょうに

４７８

春日野は春
雪を分けて
ふと萌え出でる若草の
僅かな色は
あなたの姿

４７９

霞を分ける
山桜かとも
花摘む処に

ほの見えて
あなたの姿は恋しいばかり

４８０
あやしくも
この秘めた思いなのかな
切にも使わすのは
そんな私の心は
便りのように
あなたへ届いてしまうよ

４８１
まさか初雁の声とか
初めて遠く響いて
ふと微かな声の
耳には届いて
その日からもう
何時も何を思って

何処を見てるのかな
…
空でなくて

４８２
遥か雷の届く音にさえ
耳には恋しく鳴り渡る
雲の向こうにしか　見えない
微かにも音にしか　聞けない
あなたの遠過ぎる姿に
胸を轟かされるようで

４８３
だって　私は片糸で
あなたと縒られて切れない糸になる
そうして生きて行くんでなかったら
もうどうしたって生きて行けないよ
なのに　まだ私って

逢えないままに命も繋げない片糸で

４８４

雲の切れる端より
遥かな向こうには
もの思えば眩しくて
恋しい人の姿しかない
そんな夕暮れの眺めだよ

４８５

思いを伝えてくれる人を探さないと
でもそんな事って出来そうになくて
心を刈られて散らかされるみたいに
どうにも乱れて已まない秘めた思い
を

４８６

白白と

あんな
つれない
人なのに
もう妬ましい
それを起きては嘆き
寝てはまた偲ばずに居られないとは

４８７
賀茂の社に仕えて
あなたという木綿襷を　ﾕﾌﾀﾞｽｷ
心に掛けない事は
一日すら無いんだよな

４８８
私の恋は虚しくも
空に満ちるらしいんだ
行方を思い遣ってみたって
どっちがどっちも無いんだよな

４８９
駿河なら田子の浦に
波の立たない日も有る
だけど
君を恋しく思わない日は
どうしたって無いんだよな

４９０
夕暮れ時の
丘の辺りへ
月の差して
その松の緑は
何時も変わらず
何時とも分からず
私の恋もそんなだね

４９１

山から木木の下を
隠れて流れる水なのさ
その心の滾りは隠せようと
堰き止められたりはするもんか

４９２
吉野川は岩を切り通す
その水の行く音かの
思いの丈の声は断つんだ
恋しい余り死のうとも

４９３
滾る瀬にさえ淀はあろうに
恋には淵もなく瀬もなく
思いは滾るばかりとは

４９４
山の高みの深い陰を流れる

水の底で泣いて慕うんだ
恋しい余り死のうとも

４９５
その姿が思い出される時も
山の岩躑躅か
言わずに居ては
何も伝わらず
岩根かとも恋しさは深みへ

４９６
人に知れぬ思いは苦しいよ
ならいっそ紅の末摘花と
色に出してしまおうか

４９７
秋の野の尾花に混じり咲く
花の色と恋心を表わそう

逢う由もないんだから

４９８
庭の梅の秀つ枝（ホツエ）で鳴いてる
鶯さんみたいに泣きたいよ
恋しいなぁって声を上げ…
そんな恋をしてる

４９９
あの山時鳥さんも同じだな
人を恋しい私の心と
鳴いてるのは
さぞ眠れなくてなんだろう

５００
夏には蚊遣り火は燻るけど
この思いなんて何時まで

身に隠して燃やすのか

５０１
御手洗川で
もう恋なんかしないって
禊ぎまでしたんだよ
なのに神様ぁ！
効き目なし

５０２
ああぁ
ほんと…　辛いなぁぁ
なんて嘆くばかりにしても
そんな声も出せなければ
どうして乱れる心など
言い束ねられようか

５０３

あの人へと向く
この思いにだけは
どう忍ぼうたって
どうにも負かされるよ　だって
色には出すまいって
幾ら思ってみても
どうともならず

５０４
こんなに恋してるの
あの人に知れるのかな
思いを埋める枕にだけは
知れるなら知れようけれど

５０５
あの人に知れるのかな
さあね　幾ら思っても
忍ぶばかりで　誰にも

伏せて　言う人もなく

５０６
あの人に知れるのかな
って　そもそも
知られない思いなんて　何！
直ぐ近くだよね
なのに逢えないなんて

５０７
なんて幾ら恋しく思おうと
逢えるかったら
逢えないのにさら
おかしいんだよ
下紐の解けたら　それって
逢えるんじゃなかったっけ
でも結び直す手の懈いだけ
如

５０８
この頃の私なら
誰も咎めないでくれ
ゆたゆた揺蕩う大舟かと　ﾀﾕﾄｩ
一途な思いに揺られて揺れて

５０９
なのに揺れるばかりに
心は一つに定まらず
どっちを向くやら
釣りの浮子かよ
伊勢の海で釣りしてる

５１０
伊勢の海の海人かって
釣り縄を投げ
それを海深くへ
延ばしてるんだな

ずっと苦しいとだけ
思いを繰り延べるとは

５１１
泣けては涙の川を遡ってたけれど
あれは何処へ向かってたのかな
水上から流れ込む涙だなんて
人を思う時のこの身を源に
溢れ出してるじゃないか

５１２
巌に生えてる松だって
一粒の種からだもの
一途に恋の種さえ
胸に抱いてれば
必ず逢えよう
恋し恋して

５１３

朝な
朝なに
　立つ川霧なら
何処やら空を
　浮いてようね
人から人への思いにしても
そんな事さ
　ふわふわと
もやもやと

５１４

なのにね
思いは片時も
頭から離れなくて
心は乱れて泣くばかり
蘆辺の鶴（タズ）の尖った声かにね

５１５
逢えようかに弛む
紐も結い直しては
陽も夕暮れになる
返す返すの衣かに
どうともならずに
人恋しさは

５１６
なので宵には何時だって
枕をどっちへ向けるかで
夢で逢えるか逢えないか
あの夜に夢で逢えたのは
どっちだっけと迷ってる

５１７
いっそ
死ぬなんて容易いだろうね

恋しさと命を換えるだけさ

５１８
ふんっ死ねるもんか
死ぬ程　辛くたって
死ぬ程　辛いだけさ
そのままそんな事で
ずっと逢えずにいて
慣れっこで続くんだ
何なら試してみなよ
さぁ死ねるかどうか

５１９
忍んで思うなら苦しいだけさ
なのに
思う人に知られずに思ってる
なので
思いは思う人に知れないまま

なので
その知れない思いを忍ぶだけ
なので
何も思う人に知らせられない
なのに
誰に何をどう伝えられようか

５２０
いっそ
さっさと
もう来世にでもなってたら
そしたらもう
目の前から消えてくれない
つれない人だって
過ぎた昔の人な訳で

５２１
つれない恋しい人は

何一つ
答えてくれないって
そんな
嘆いてばかりの声の
山彦で
返って来ようとはね
どれ程
大きく嘆いたんだか
さあね

５２２
行く水に数を書き流して
そんなの何になるかって
それよりもっと儚いよね
振り向いてくれない人を
思ってるしかないなんて

５２３

あの人を思う心にしろ　これって
もう私じゃ無くなってる
じゃ何なんだろう
だからなのか
どうなのか
そんなでは
恋に惑う身も
何処へか見失われ
惑うって何なのかすらも
知ろうにも知りようも無くなって

５２４
思い遣れる境は
思い続ける程に　ずっと遥かに
遠ざかるばかり　って事なのか
何時からか夢路を惑ってさえも
あの人の姿に行き逢えないのは
でも何でだろう

５２５
日もすがら頼みったら
夢で逢う事しかないなら
日暮れて夜はどう眠ろうか
どっち向きに寝たら良いのか
それで却って眠れなくなるんだ

５２６
でも
何でだ！
恋しい様に惑わされる私に
焦がれ死にしろって事なのか
その為なんだろうか
夜もすがら消えずにずっと
その姿の夢に現れて来るのは

５２７

泣けて　止まらない
涙川だよ　枕も流れ
憂いの　水に浮いて
寝てては　その夢も
ひどく　ぼやけてて

５２８
恋しくては
この身からして
幻みたいな
ぼやけた影だよ
だからって
そんな影のまま
あの人には
添えもしなくて

５２９
水に映る篝火なら知らないが

どうした事なのかな
この燃える憂き身は
涙の川に浮いてるじゃないか

５３０
篝火の影になっちまった身じゃ
侘しく泣いて
流れて
それでずっと
水底で燃えてなくちゃいけない

５３１
ミルメ
海松布は
瀬は速くても　生えようなら
袖を流れる　この涙の川に
まみえる　目も有ろうか
相見る　目も出ようか

って　植えようかと

５３２
波の上を乱れる
沖へも寄らぬ
藻なのかな
思いだけ
寄せるしかない
この恋しさは
寄る辺なく
続くんだ

５３３
蘆辺に鴨は騒ぎ立つのも
入江に白波は寄せるのも
どうせ人を恋うばかりの
こんな私のせいだろうさ
ん何でこんなな恋なのかな

こんなんじゃあの人には
知られよう筈もないよな

534
思いは　知られよう筈もない
そんな　火をずっと秘めてる
駿河の　富士の山だからだよ
恋する　この身の燃えるのは

535
飛ぶ鳥の声も聞こえない
山深い奥かに
秘める心を
どう遣ったら
あの人に知って貰えよう

536

逢坂の木綿つけ鳥も
私のように
人恋しいって
鳴くしかないようだ

５３７
逢いたいと思いこそすれ
逢坂の関を流れる
石清水と
言われはしなくて
秘めたままの心なんだよ

５３８
　　だって
　　　心は深い淵なんだ
それも浮き草は繋って
すっかり覆われてたんじゃ
誰にも知られる筈ないんだよな

５３９
なので
声にするんだよ
し続けるんだよ
心のままを声に出して叫ぶなら
山彦の答えない山は無いぞって
己を奮い立たせるしかないんだ

５４０
それとも
この心を
そしたら
片思いが
さすがに

いっそ思う人の心と
取り替えられたらな
すっかり知れようよ
どれ程苦しいかって
あの人の心にさえも

５４１
そうだ！

離れたまま思ってるだけなんで
苦しいんだよ　だったらいっそ
あの人の心と　私の心と
紐と紐で輪にしちゃって
結んじゃうなんてどう？

５４２
それとも　春になったら
必ず氷は　解けるもんね
だったら　そんな風にさ
あの人の　心にしたって
解けそうな　もんだけどな

５４３
：
なんてあれこれ考えては
もう何時しか夜は明けてて
蝉みたいに泣き暮らしてて

また夜が来れば　ずっと
身を焦がす蛍なんだよな

５４４
虚しいよな
夏虫は火に
飛び込んで
身を滅ぼしてるもんな
私の思いも
この身さえ
燃え尽きて
その火でしかないのか

５４５
夕べはまた泣けて
乾き難い涙の袖なんて
秋の露さえも置き添われて

５４６
恋しくない時なんてないにしろ
こんな秋の夕べの揺れる心の
どうにもどうともならない
募る思いを窮めて已まぬ
この妖しさは何なのか

５４７
人をどれ程思ってみても　表には
秋の田の穂のようには
顕われはしないにしても　心には
忘れられる筈もないさ

５４８
秋の田の穂の上を
照らして走る
稲妻の光る間でさえも
どうして私は

あの人を忘れられるものか

５４９
人目を気に懸ける程の私なのか
何を遣ってるんだか…
花薄なら穂を出すだろうに
何でそんな恋をしに
こっちから出て行けないのかな

５５０
淡雪にしても　ほら
溜まれば堪らず　砕けよう
頻りに積もる　淡い思いも
重さに堪らず　散り乱れて
繁くもまた募る　この頃さ

５５１
雪なら

奥山の菅の根も押さえ　ｽｶﾞ
幾ら重く積もろうとも
孰れは消えちまうんだ
それか
募る思いも積もるなら
その重さに耐えかねて
消えるのは私の身かな

巻第十二　恋歌二

552
思う余りか　眠るままに
恋しい姿と　逢えたのは
夢と知れて　見たのなら
醒めたりは　しないのに
恋とは　そんな

553
うたた寝に
恋しい人を　見てからは
もう夢なんてものをさえ

頼みとするようになって
　思いも　そんな

５５４
已まず恋しさは寄せるなら
辛い余り胸も潰れようなら
衣を裏に返して眠ろうなら
夢で逢えようと聞いたなら
またもそうしてしまうなら
　そんな　独り夜の闇か

５５５
秋風の冷え増すならきっと
つい
つれない人さえ私を慕って
って
そんな夢への訪れなんかを
夜毎

頼みにしてしまってるとは

５５６（法会の帰りに）
仏より授かろうと
そうとも知れない
宝の珠とも
袖に溜めて
包もうにも
逢えない玉の涙は
隠せはしないのさ

５５７（返し）
玉ですって？
袖をコロコロと転がるばかりな
また何とも愚かにしても
疎かな悲しみです事
私の涙は堰を切って
滾って速い流れですのに

でもそれでは御仏からはどれ程
愚かかとも…

５５８
焦がれも果て
微睡む夢さえ
ひた走り抜け
行き来はした
あの通い路に
熱い生き身を　投げ込めないか

５５９
住の江は
真っ暗な
夜なのに
岸に寄る
波の音しか
聞こえないのに

その通い路でさえも
どうした事なんだろう？
人目を避けて逢ってくれないのは

５６０
山深くに生える草なのか
そんな恋をして
幾ら隠れて繁ろうと
誰にも知られないままさ

５６１
まだ宵の内なのに
儚くも火へと惑うかの
夏虫なんかよりも
迷いは勝って深いんだ…
そんな恋をしてる

５６２

日暮れ時
思いなら
蛍よりも際立ち
燃えてるんだけど
その恋う光りなんて
目には見える筈なくて
それでなんだよな
あの人はつれない

５６３
笹の葉に置く霜よりも
独り寝の袖の涙こそ
冷たく凍みるんだ

５６４
菊の垣根に置く霜とも
この身も心も
消え尽きてしまうよな

恋しくて切なくて

565
川の瀬に
靡く藻は
水の下に
隠れては
人に知られぬまま…
そんな恋をしてる

566
暗く空を掻き覆う
降り続く白雪も
積もる下から
消えて行く
そんな消える思いなんだよな
この頃
ずっと

567

この身を尽くし果てる
あの人を恋しい涙なんて
寝床に水脈かと満ち溢れて　ミオ
澪標になってる私なんだよな
ミオツクシ

568

このままじゃ命も尽きてしまう
いっそ　そんな事なら試しに
こいつ生き延びるかどうか
ちょっとだけ逢おうかな
とでも言って欲しいよ

569

このままじゃ辛く耐え切れない
いっそ　何もかも忘れたいな

なんて思いはしてみたって
夢に現れるあの人の姿に
望みを断ち切れなくて

５７０
このままじゃ何の筋道も立たず
寝ても覚めても
恋しいだけの心を
何処へ持って行けば
忘れられるものやらね

５７１
このままじゃ恋しく辛い余りに
心は何処へか惑って
行方さえ知れずに
何が残るかって
後ろ指を差される抜け殻だけさ

５７２

恋しさの募るまま
涙は流れないのなら
衣の胸の辺りでは
思いの火は消せずに
燃える色を見せようか

５７３

已まない恋しさに
止まらない涙の
思いと共に流れる川は
冬さえ凍らない
激しい泡に湧き立つばかり

５７４

あの人を焦がれるしかない
夢の荒んだ通い路にも
露ばかりは置くのか

夜もすがらの行き来に
袖は濡れて乾かないのなら

５７５
夜に
夢に見たのは
あの人だったような
朝は
その儚い姿の
後を追ってしまって
床を
離れたくても
起きるのも辛いんだ

５７６
嘘泣きだったら
あの人に涙は
隠さないよ

こっそり
袖を絞ったりも

５７７
泣いて嘆いた涙の袖も
どうしたのって聞かれたら
春雨に濡れたんだって
答えようかなって

５７８
どうにも
私のように
ものは悲しいのかな
時鳥さんは時を忘れてるね
夜になっても
鳴き止まない
時に背こうともひたすらに
何をそんなに泣くのだろう

５７９
皐月の頃の山並みを
繁る木木に梢は高く
時鳥さんの鳴く声は
空へ拡がり届くよう
見上げる心も空色で
恋はと嘆けば上の空

５８０
心に立つのは秋の霧
晴れる時さえ知れず
上の空も覚束なげで
立ち居さえ定まらず
今何をしてるのやら

５８１
虫とは違うんで

声にこそ出さないけど
涙ばかり流して
こっそり泣いてるんだ

５８２
　　今しも秋と
　鹿の声の
夜の山を
轟き渡るのだって
　それを独り寝に聞く私なら
　　嘆き劣ったりはしないのさ

５８３
秋の野と乱れ咲く
もの思う
この頃の
心は千種の花の色

584
思うも独り
秋の田に戦ぐ
稲葉の声かとも
そよ「そうよ
そうよね」と
誰も私なんかに
思いは懸けてくれないさ

585
人を思う心は
仮じゃない
けれども
雲行く雁の
鳴き渡るかと
上の空で泣いて
泣いて恋い慕って

５８６
秋風へと掻き鳴らす
儚く
琴の音にまでも
何故に
人恋しさは
こうまで
募ってしまうのかな

５８７
降る雨に何時もより
菰を刈る淀に
沢の水は増し
そんな常にも増して
私の恋はまた
募ってしまう

５８８

山を越えない内には
吉野の桜かと
逢えなくて
遠く
人伝にしか
あなたの事は
耳に届くしかなくて

５８９
花に置く
露でもなく
深く思い初めた
私の心なんですけど
風の吹く毎に儚く
散り零れそうで
でもそれって
何処の風かな
誰なのかなって

気懸かりなんです
もの思いの憑く程に

５９０

比べたって
くらぶの山の
桜の花さえ
その絶え間なく
散り続ける数なら
暗く尽きぬ私の恋に
勝ったりはしないよな

５９１

上は凍って
下は流れる
冬の川みたいな私かな
隠しても已まない恋に
心の底で泣かされて行くんだ

５９２
　滾る瀬に
　　根は差せず
　　　留まれない
　　浮き草だな
私の恋は
　思い惑い
揺れ動いて

５９３
夜ごと脱げば必ず
衣は掛けて寝るけれど
心もあなたに懸けて
思わない時なんてないよ

５９４
東路の小夜の中山な

なまなかに
なんでまた
人を
思い初めて
しまうかな
何にもならないのに

５９５
枕の下なら
涙の海だよ
でも海松布は生えず　ミル
逢える目も
無いんだな

５９６
　年を経ても
　　消えない
思いに燃える

火は有りながら
　夜の袂は猶も
　　涙で凍るまま

５９７
　何処やら
　迷い込んだ
知らぬ山路でもあるまいに
　恋に惑えば
　　心は迷い
　どう行こうと
　侘びしいよな

５９８
紅を染めるかに
振り絞られる血の涙で
拭う袂ばかりの
色を濃くしてるんだよ

５９９
白玉と見えてた涙にしても
ずっと泣いてばかりで
今はもう血の涙さ

６００
嗤っては
火に飛び入ってる
夏の虫をどうとか
言ってたんだよな
今やもう
そんな私だろうよ
思いの火に燃えて
焦がれ果てるって

６０１
峰に懸かる白雲は

風に吹かれては
別れ別れと
そんな
つれなくも
途絶えてしまう
あなたの心なんだ

６０２
幾らつれないあなただって
月影にこの身は変われたら
優しく見詰めてくれようか
情け深く眺めてくれようか
心有る眼差しもくれようか
ぁあ　…と

６０３
この身は焦がれて果てたなら
どなたの名が囁かれましょう

「人の命なんて儚いものよね」なんて
知らん顔ばかりしてられましょうかね

６０４
難波潟の芽を張る葦の
目も遙かに生い繁るかの
募る私の恋などは何はとも
あの人は知ろう筈もあるまい

６０５
夜は寄られず恋の弓にも射られず
独り寝に起き臥しする月日ばかりは
知らぬ間に経って
なのに指一本さえ
あの人はまだ私の身に触れてなくて
眠れないのはそのせいなんだよな

６０６

人知れぬ思いも侘びしく
嘆きの木を
火に投げて　恋に焚かれる
その嘆きは
独り私に知れて燃えてる

６０７
言葉で言わないだけだよ
独り身の私は水無瀬川だな
　　　　　　　　　深く潜る
　　　　　　　　　　流れかに
恋しさは心の奥を通って行くよ

６０８
独り寝に一途に思いを募らせ
それで
寝て見ただけの夢ではね
それは

私の心の望むままの姿を
それと
映しこそしてるんだけど
そんな
それだけのあなたの姿なんて…

６０９
命よりも
惜しいのは
見も果てずに
覚めてしまう夢
覚めない夢の果てに
あなたに逢えるのなら
命なんて惜しくはないさ

６１０
引けば梓弓だって
上と下の端なら

寄るだろうにね
その夜ともなれば
より恋しさは勝るよ

６１１
この恋ってどうなるんだろう
何処を限りと向かうんだろう
あの人に逢えさえしたならば
思いはもうそれっ切りなんて
そんなじゃ行方も知れないぞ

６１２
悲しいのは独り
この世に私だけ！
あの彦星だって
織姫に逢えない年はないのに

６１３

　もう疾っくに死んでたろうよ
「何時かお逢いしましょ」って
　あの人の言葉を頼みにだけの
命とは…

６１４
虚しい言葉を頼みにばかりの
何時までも逢ってくれない
あなたの偽りに懲りない
私の心を知って欲しい

６１５
命とは…
　そんなの何程のものだよ
　　露のように虚しいのさ
　　　惜しくなんてないさ
　　　　逢えさえするなら
引き換えて遣る！

巻第十三　恋歌三

６１６
お喋りは叶って　嬉しかった
お話しも弾んで　楽しかった
：
でも帰れば独り　起きもせず
寝るともなしに夜を明かし
已まない雨を見入っては
これも春の眺めかなと
思うに任せず時は過ぎ
物思いに耽ってしまうんです

６１７
長雨に虚しく閉ざされる内にも
徒に増すばかりな涙の川では
袖を濡らすしかないのです
渡ってお逢いしたくとも

６１８（返し）
？
って何でしょう
袖を濡らす程な
浅い涙の川とは…
あなたの身ごと
流されたのなら
一途なお心とも
頼めましょうに

６１９
逢えなくては

何の寄る辺もなくて
身こそは遠く隔たるけれど
心はあなたの影と添ってしまって

６２０
徒に行き来するしかないんだけど
ただ逢いたい思いに誘われては
徒に行き来するしかないんだ

６２１
逢えない夜に降る
白雪の積もろうなら
この私さえも諸共にと
消えるに違いないでしょうよ

６２２
何時か
秋の野に笹を分けて帰った朝は

それは袖は濡らしたけれど　（露デ）
今夜の
逢えずに戻るこの袖こそは　（涙デ）
更にそれにも勝って濡れてます

６２３
逢える目の私には無いと
分かって頂けないとは恨めしい
この身を
海松布は生えないと知らない海人の
足懈く刈りに来るのを已めない浦と憂えて
知

６２４
今宵もまた
逢えないまま夜も明けるなら
どうしたって
春の日は何時暮れるのかとも長く

あなたを酷い人だと思うしかなくて

６２５
逢えないまま夜も明けように
そ知らぬかに
月ばかり残れば
それに照らされ去るしかない
その惨めさの
身に沁みてから
暁より辛いものなんてなくて

６２６
夜逢えるもなく去るもなき
さも渚に寄るばかりな
波を刻む私では
立ち返る恨みに
心さえ刻まれ砕かれて
浦見て立ち帰る他になくて

６２７
なぜか早早と
風より先に立つ凪の波とは
そんな恋する私なのか
あの人とまだ何もなくて
噂ばかりは先に立つなんて

６２８
何の浮き名も立つ筈ないよ
名は取られて無いのに
その名を取られて
噂にされてる
名取川か

６２９
でも
どう遣ったって分かってしまうよな

まだ　こんな内から
あいつらの目ったら
知らん振りしてるようでしてなくて
いいさん　龍田川かと
浮き名の立った川も
渡らずに置けようか
逢わずにはどうともならないんだよ
で
どうしよう

６３０
さあ　あの人はどうだか
だけど　私には困るんだ
噂を　抑え込みたければ
何も無くて立てられた名を惜しみ
前からも今だって何もないですって
言うしかないから

６３１
ほんとにあいつら
懲りもしないよな
何の事も無いのに
浮き名ばかり立ってしまう
でもあなたを嫌いになれない
ここはそうであるしかない世で
噂を立てられるなら仕方ないかな

６３２
あぁ　この直ぐ向こうなんだね
私を　あなたは待って居る
なのに先回りした関守が潜んで
私達の道を塞いでないかな
ならもうこれより先へ進めない
なんて怯えずに済んでたら
疾っくに結ばれてる二人なのに

そうだ　あいつだ！
（それとも幻なのか）

懲りもしない噂のせいで
知られてなかった通い路も
今は関守に塞がれてるよ
あいつさえ夜の来るごとに
眠り込んでくれてたなら
何時だって逢えてたんだよ

６３３　男歌版
：
なんて凝っとしてたって
何も始まらないよ
月だって山から出るんだ
もう家を後にして
あなたの許へと走ってる
山なんて一息さ！

６３３　女歌版

忍んでも恋しいなら
ほら　月だって
山から出るんだもの
なら　私だって
家の外で待とうかな
あの人の訪れを

６３４　女歌版

恋しいお姿！
ああ　漸く
どれ程恋しかったか
山を隔てた向こうから
関を越えて来られたのね
もう二人っ切りにして欲しい
朝を告げる鳥も鳴かないでよね

６３４　男歌版

恋しいお姿！
ああ　漸く
どれ程恋しかったか
山を隔てた向こうから
関を越えて来たんですよ
もう二人っ切りにして欲しい
朝を告げる鳥も鳴かずに居ろよ
（ハァッハァッ）

６３４　閨中版　前篇

漸く叶うこの思い
どれ程恋し恋したか
山を隔てる向こうでも
関は越えられるんですね
もう二人っ切りにして欲しい
朝を告げる鳥は鳴くもんですか
（アハア）

６３４　閨中版　後篇
朝を告げる鳥は鳴いてしまうよ
もう二人っ切りでも居られず
こうして関は越えたけど
山を隔てるままだもの
どれ程恋し恋しても
あぁ離れたくない

６３５
名のみばかり
秋の夜と言っても
何も語れずにいる内に
何をと語らう程の事もなく
直に明けてしまう
二人こうして居て
…

６３６
：
秋の夜と言っても　昔から
長いって決まってませんよ
誰と一緒かによりましょう

６３７
ほんにほら東の空は　朗らかに
なんて明けてしまえば
各各の衣を纏うしかなく
それで悲しいお別れだもの

６３８
もうお別れなんだと心付いたら
何でしょう　この思いは
あなたに添う思いは
言い知れなくて
：何かしら

６３９
明け方の帰りは
泣いてばかりです
雨の降り已まぬかに
心も涙に　そぼ濡れて

６４０
夜明けを告げる鳥も
鳴かない内に　私は
もう泣いてしまって

６４１
時鳥さん！
教えてほしいな
夜も明けない内に
夢ではなかったのか
起きてあの方を送った

あの暁の声を聞いたのは

６４２
夜が明けてからでは
それは噂も立とうからと
暗い内に出たけれど
もう人に見られたろうか

６４３
ほんのつい今朝方の事だったろうに
あれから私の心はどうしていたか
どう帰り着いたかも覚えてない
陽は昇って再び戻らない時は
思い虚しく霜のように消え
身の儚さは悲しいばかり

６４４
肌を重ねたつい今し方を

そんな　儚い夢かともまた
微睡んで夢へ追えば
儚さは弥増すばかりです
この時さえもまた夢なのかと

６４５（女から）
お訪ねせずには居られぬ
そんな　あなたへの夢へと
思いを任せた切りでしょうか
それともそんな
醒めよう夢など無く
現の身のつい今程までは
あなたと一つの私でしょうか

６４６（返し）
私など何を見えましょう
そんな　二人の闇に心惑い
何処へと行き果てる切りです

夢か現かなんて
逃れよう途など無く
人にどうせ知られるなら
世の定める通りなのでしょう

６４７
色映える夢に叶った数知れぬ逢瀬より
幾程の定かな姿を結んだのでしょう
あなたと一つの現に惑うあの闇は

６４８
夜更け　天の門（アマノト）は開かれて
渡る月の光を浴びながら
恋の闇は満たされもせず満ちもせず
あなたと一途に
結ばれました

※

６４９
何はどうとも
あいつらには
見付かりませんように
逢ってたなんて少しも
何も言わないで下さい
私も何も言いませんよ
名だけは立てますまい

６５０
名取川の瀬瀬の埋もれ木も露わと
名をあれこれ取り沙汰されたら
さてどう切り抜ける積もりで
逢い始めたんでしたっけね

６５１

何れにしたって
吉野川の流れかとも
あなたへ思いは逸ろうと
滝のような音は立てますまい

６５２
私を恋しく思って下さるなら
紫草の根摺りで染めたような
色を表に出して下さいますな
顔の下に隠していて下さいよ

６５３
幾ら　恋しくても名を惜しみ
思いは　花薄の穂と出るのを
固く塞ぎ　戒めるばかりでは
腰の紐かと　結ぼれる心です

６５４

忍ぶ仲では
どちらかの焦がれ死んだのを
残った人は
誰を悼むと喪に服せましょう

６５５（返し）
それなら　こうしましょうよ
袖を濡らした衣を着替えがてらに
夜だけこっそり藤衣を纏うんです

６５６
現ならさもありましょう
けれど
それより侘しいのは
夢でさえもあなたは
何処か
人目を避けておられる事

657
私なら
限りない思いのままにも
夜には逢いに来ましょうとも
夢なら
その通い路へまでも
咎めに来よう人なんて
居ませんでしょうものね

658
でもそうやって
夢路には
足も休めず通っても
現での
一目とも逢えたようには
その
あなたの姿は見えて来なくて

６５９
　忍ぶ思いを包んで
人目の堤は高くては
　川とは見えながらも
渡れはしませんよ

６６０
心なら
早瀬と
滾ってるのに
どうしてかな
人目の堤が堰き止めてしまうのか

６６１
紅と目に立つ色は
出すもんか
隠れ沼の水は
下へと潜るように

思いは密かに通わせて
たとえ恋い死にしようとも

６６２
そうして
冬の池に棲む鳰鳥の
独り素知らぬげに
水底へ潜るかに
そちらへ通ってるなんて事
そこは誰にも黙ってて下さいね

６６３
初霜の置く夜は凍みたって
笹の葉は色付かないように
あなたへの思いは心に沁みても
表に出す事などありましょうか

６６４

山科の音羽の
山の音はかと
人に知られてしまう
まさかそんな恋など
この私がしましょうものか

６６５
満ち潮の流れて
干る昼間には
逢えそうになくては
海松布は浦に寄る　ミルメ
逢える目も有る
夜を待ってますから

６６６
もう知らないなんて
言うのは已めよう
（出来るかな？）

白川の底は澄んで流れるように
ずっとあなたに身を添わせ
生きて行くって決めて
世に住むだけの事

６６７
　忍んで恋しても苦しくて
ならば玉の緒を断って
いっそ乱れてしまおうか
誰も咎めてくれるなよ

６６８
恋を忍びかねては
私の思いは
山橘の色に
出てしまう

６６９

ままよ　どうともなれ
どうせ立ってる名だもの
海辺に海松布は少ないなら
港から漕ぎ出して行くだけさ
世を憂いてみてもどうなろうか
ずっともう何時逢えるか知れずに

６７０
人前なのに
泣いてしまった
もう　おしまいだ！
隠せずに漏れてしまった
枕にしか知れてなかった涙なのに

６７１
岸辺の松の私では
風に吹かれ
根を波に洗われる度に

声音に表れ
心根も顕わに泣くしかないか

６７２
池に棲む鴛鴦なら
　名を惜しもうよ
　　心を合わせて
だけどそれが
水は浅くては
隠れようにも
身も顕わなまま
仲を知られるんだ

６７３
玉の緒かと
逢瀬は束の間で
吉野川の瀬なのかと
私の名は滾って拡がって

６７４
鳥の群れ飛ぶように数知れず
私の名は立ってしまっては
今更どんな顔しようとも
見向きもされないんだ
そんな人達ばかりだ

６７５
春霞ならきっと花を隠そうに
その野に山に満ちるように
私の名は立ってしまった
もやもやとも顕わにも
あなたとの事ばかり

６７６
寝るのに枕さえも外してた
だって恋を知られてしまう

なのにどうして名は立って
広まるのは空事ばかりって
空に立つ塵でもなかろうに

巻第十四　恋歌四

677

もう
遥か陸奥の
安積の沼かとも　アサカ
遠く花を眺めてるんじゃないんだよ
こうして
逢えてるのに
抱けば抱いただけ
また君を恋しくて堪らなくて
どうかなってしまいそうなんだよね

６７８
お噂に胸をときめかすままだったら
こうも恋しくはなかったでしょうよ
今　何時でも逢えて抱き合えるのに
独り身より辛く遣り切れないなんて

６７９
知り合えてから時は経たけど
まだまだ逢わずに居られないよ
なまじっか抱いてなかったら
これ程恋しいって思ったろうか

６８０
何時もの富士の嶺と同じに
逢ってようも逢わないも
君と言ったら君ばかり
ずっと燃えてる恋さ

６８１
どうかしら　私
あなたには　夢で姿を見られるのさえも
怖い　のよね
朝な　朝な
鏡を見る度　恥じてしまう
あぁもっと　若かったらな

６８２
流れは　石にぶつかって
立ち返る　白波のように
こうして幾らでも君を抱きたい
逆巻く波とも
抱き合おう
でも　まだまだ満ち足りないよ

６８３
ミルメ

伊勢の海人は海松布採りに
朝な夕な潜ってるけど
朝な夕な抱いても
満たされないって
ならどうやったら
満たされるんだろ

６８４
春霞の棚引く山の
桜の花の姿には
飽きた事はないよ
君を抱くのにも
厭きる事はないよ

６８５
抱いてるんで　それで
恋しいなんて
こんなのって

知らなかった
心ってまるで
分からないもんなんだな
って

６８６
夏草は
今を盛りと深く生い繁って
枯れるなんて思いも寄らず
盛る恋だって衰え知らずと
思いは深く刻まれてるんだ

６８７
飛鳥川の淵も瀬になるって
世にはそんな恋もあるのかな
私はあなたを思い初めたからは
心に刻んだその姿は変わるもんか

６８８
でも
同じ葉でも　思うって言の葉のみ
秋を経ても　色を変えないのって
どうして？

６８９
さむしろの上に衣を敷いて
今宵も私を待ってようか
独り寝の宇治の橋姫は

６９０
おいで下さいましょうよね
それとも出向こうかしら
十六夜の月を眺めては
どっちとも迷う内に
戸締まりも忘れて
うっかり寝てしまいました

６９１
では直ぐにも出向きますよ
って
そう仰いましたよね
んで
あれからずっと私は
秋の夜長を待ち倦ね
もう空には月を残し
今宵も明けてしまいますよ

６９２
とっても良い夜ですよ
こんなに良い月も出て
なんてお便りをすれば
おいで下さいな　って
誘ってるようなものね
なんて待ってないって

事でもないんですけど

６９３
こうなったら
おいで下さるまで
閨へも入りませんとも
濃紫の元結いに霜は降りようと
コムラサキ
あなたのお姿を見ない内にはね

６９４
でも下葉の揃わない小萩の私は
露は頭にばかり置いて重くって
どうか振り払って下さいましな
宮城野まで吹き渡る風になって

６９５
そんな事を仰るあなたのお姿を
遠い山の垣根の側に咲いていた

大和撫子のように恋しく思えて
なら直ぐにもう逢いたくなって

６９６
エン
永遠にあなたと居たい
津の国難波から山城鳥羽なんて　エン゛
一っ飛び！
何はと思うもなしにね

６９７
唐衣は着ないんだけど
敷島の大和から唐国までだって
一っ飛びに
頃も経ずに逢い続けるには
どうしたら良いのかな

６９８

恋しくて死にそうなんだよ
なら恋しいなんて要らない
　　　　　　　　　　誰だよ
ただ恋しい　なんて言うのは
ただもう死ぬだけだってば

６９９
…って→
まさかこんな事
吉野川の淵に咲く
藤波の　並の恋なら
思ったりしただろうか

７００
そうさ
この恋だけは違うんだ
予め　分かってたけどね
そう思ってた通りなだけさ

７０１
空を荒らし
踏み鳴らし
雷は幾ら轟いたって
思い合ってる仲を裂けるもんか

７０２
だけど　日置野（ヒキノ）に繋る
葛なら先を伸ばすかの　ツヅラ
そんな先先を思い遣るなら
私の思いを懸ける人は
遂にはこの仲を言繁く
囁かれてしまうのかなって

７０３
いえ　何の！

それより夏は
麻を手引いては糸を繰るかに
言繁く囁き返されようとも
お心遣いの余り　よもや
二人の仲はこれっ切り
なんて仰いますなよ

７０４
里人の言繁き
夏野を突っ切って
繁る草も枯れようかに
繁くともやがて枯れる噂に
別れて行こうとするあなたへと
逢いに行かずには居られましょうか

７０５
：：えっと
土砂降り　でもですか？

いえ　色色考えてしまうんです
あなたの真心を巧く聞き出せないのなら
雨を突っ切っておいで頂けるお姿こそ
私の身の上を知らせてくれそうかな
なんて思えば涙はまた雨と降って

７０６
どうやら所定めずお歩きとか
大祓の大幣かに　　ｵｵﾊﾗｴ　ｵｵﾇｻ
引く手あまたのあなたではね
私一人思っても
何の頼みにもなりませんもの

７０７（返し）
いえいえ
そんな名も立ってましょうとも
大幣は祓えも済めば川へ流され
遂には必ず瀬に寄ってそうして

あなたへ辿り着きましょうとも
でしょ？

７０８
なんて仰って
須磨の海人の塩を焼く煙なんて
風も酷ければ
さて　どちらへ向かいますやら

７０９
それにあちこち葛（さづら）の這う
木木の数も増すようなお心では
絶えず忘れず通って来られても
嬉しくもないんですけど

７１０
ほらっ　時鳥さんが！

今宵もどなたの里へは
通わずじまいかしらね
ここを恋人のねぐらと
鳴いてる声がしてる
っ聞こえるでしょ
ほら　ほら

７１１
…ぇ？
ほんと
仰りようだけならその通りよね
でも露草の移し染めかって
そんな移ろうお心ですもの
はっきり違う色に出てますって
もうね

７１２
この世に嘘のなかったら

そのお言葉は
どれ程に嬉しいでしょう

７１３
でも
嘘と分かってても
今更どなたの真心を
頼みと出来ましょうか

７１４
秋風に
山の木の葉は
色を変えて行くけれど
ならば
あなたの心も
移ろって行くかなって

７１５

蝉の声を聞くのだって
今は悲しいんですから
きっと夏の衣のように
あなたの心にしても
薄くなるのかなって
思えてしまうのでは

７１６
世の人の言繁く
蝉の虚ろに鳴くかのよう
なので草も枯れようかと
別れようかとも
足は向かなくなるのかな
あなたを忘れた訳でなく

７１７
恋の何とか続いてる内に
別れるなんてどうかしらね

まだ飽きずにいて睦まじい
忘れ難い仲を忘れ形見に
うーん
それも良いかも

７１８
じゃ忘れよう
よしっ
そう思う内からも
うわっ
前より恋しくなってる

７１９
いや　忘れよっと
でも　恨まないでよね
時鳥さんにしたって
人に飽きる秋には
逢おうとしないものね

厭きに逢いたくないよ　ｱｷ
私だって

７２０
飛鳥川の　絶える筈のない流れが
それでも　もしも淀んだとしたら
水に心が有ると思われましょうか
私の心変わりを疑われましょうか

７２１
淀の川は淀むと見えようけれども
深くには流れて絶えない水の
そんな涙も流す私の心なんですよ

７２２
底深い淵の水は騒ぐでしょうか
そんな私の
あなたへと窮まる心なんですよ

山川の浅瀬こそ
要らぬ波音を立てましょうけど

７２３
初花染めの紅と深くに
あなたを恋い初めた
その心に染めた色を
何で忘れられましょう

７２４
陸奥は信夫の
忍ぶ草を摺り染めた
捩れ捩れ返る図柄かに
その誰ゆえにか？なんて
ただあなたばかりの他には
心を乱す私ではないのですよ

７２５

なのに
この思いの他に　どうしろと言う
秋風に靡く浅茅かの
心変わりなんでしょうか
このままに色を失うばかりで
厭きられるしかない私でしょうか

７２６
あぁ　分からない！
　　　　あの人の心は
秋の紅葉葉の色でもないなら
千千の色にも移ろうものなのか
そんな厭きの色なんて見えようか

７２７
さっきからあなた
恨みますってばかり
そんなの言われたって

今更私に何を求めるの？
そんなに浦見たいのならね
海人の里へでも居らっしゃい
ご案内なんて致しませんけどね

７２８
そうまで仰られては
私は曇りの日の影です
目には映らないでしょう
でも離れられるもんですか
ずっとあなたに寄り添います

７２９
何の色さえ無かった私の心でした
それをあなたの色に染めました
あなたに染められたんですよ
そのあなたの色が移ろうなんて
そうして私の色も移ろうなら

私の心の色はどうなりましょうか

※註　やや時を経て…

７３０
え？　逢えるとしたら
もう随分経ってしまってるけど
解こうとしない下紐が
こうして解けてばかりって事は
えぇ？　ひょっとして

７３１
儚い陽炎なのか
そうでさえ無いのか
だって春の雨の降る中の
あの懐かしいお姿は
袖を濡らす涙の
古い思い出

としか

７３２
難波の堀江を
渡っては返り
漕いでは戻る
棚なし小舟か
今日も同じに
恋しく思い続けるしかない私は

７３３
　今更に　　　荒海のような
あの人の姿の　無い
寝床の塵を払う袖は　深い
　　憂いの　涙に
　　　　　泡と浮くだけ

７３４

今も尚
あの頃へと
どうにも心は立ち返ってしまう
あの恋しさばかりはそのままに
忘れようもなく消せも出来ずに

７３５
そんな思いは噴き出して
どうにも遣り切れずに
初雁は鳴き渡るかと
恋しくて泣いては
嘗て通った辺りまで
彷徨いてしまってるよ
今更そんな私の事なんて
あの人には何を知れようか

７３６
頼みとなってくれた言の葉たち

あなたからのお便りも今はもう
お返しすると致しましょう
この老いの身と同じように
置き処も有りませんからね

７３７（返し）
もう今は戻って来た言の葉たち
私の筆ではありますが
拾い置いては見返して
あなたを偲ぶと致しましょうか

７３８
余所へ通われるのも　その度に
あなたは道に迷えば良いのにな
そうしてうっかり
私を訪なわれたら
あら始めから私に
逢いたかったのね　って

思っちゃおうかな
とか…

７３９
「ねぇ待ってよ」って言ったら
出て行くにしても
私を抱いてからにして欲しいな
そんな私を振り払って出て行くなら
そこの棚橋は馬の脚を折っちまえ！
とか…

７４０
…そんな
まだ付き合ってるつもりで
あれこれ頭ん中で絡んだって　独り。
鳥になって逢坂の関で鳴くなら
あの人の通う姿も見られたろうに
泣くにしても家に籠もる切りではね

７４１
どうしてなのかな？
見捨てられた古い里でもあるまいに
荒れ里かとも私には
別れたあの人の心が
荒んで見えてしまう

７４２
どうしてなのかな？　　　　アオツヅラ
山に住まう私の家の垣根の青葛なら
繰れば手繰って繰れように　クレ
そんなようには　あの人は
来る事もなし　言伝を呉れるもなし

７４３
どうしてなのかな？
大空って

恋しい人の形見なのか
　ものを
　あれこれ思い耽っては
　その度に
眺めてしまうのって

７４４
形見など何になるってんだよ
当てにならない望みを繋いで
次また逢えるまでは　なんて
そんな事でそれを見てたって
少しも心は慰められないって

７４５
あの人の脱ぎ置いて行った裳(も)だけど
何時か逢えるまでの形見って
せめてと手元に置いて

だけどそんなの
涙に浮かぶ藻屑だよ　逢えなけりゃ
７４６
それがアダで今じゃ
形見は仇みたいだな　ｶﾀｷ
これさえ無かったら
時には忘れられても居られたろうに

巻第十五　恋歌五

７４７
　　あの満ちる月は何処へ行っちまったんだ
　　　あの真盛る梅は何処へ行っちまったんだ
　　　　この花じゃない　俺の身だけは動けずに
　　この月じゃない　俺の年だけは巡らずに
俺独りだけ　あの時のままの俺なのかよ
　（泣ける　泣くしかない）
　　（梅の香に…っ噎せって）
　　　（月の傾くまで泣いてる）
もう再びあの人とまみえる春の夜はない

７４８
花薄の穂かに
むざむざと　あからさまに人に取られた
あの人を
慕う思いは
　隠したまま
何処へも行けず
　消えもせず
　身の底を

７４９
私には知らぬ事と
音は遠くから聞くだけで居たものを
音羽川なら音だけで
渡って水に慣れるまでもなかろうに
見馴れ初めて瀬を渡り
どうして深い仲になってしまったか

いや

音には聞こえた　あの人を　そんな
噂に聞き捨てて　済ませられたか
見知らぬままに　過ごせたのか
そんな事だけで　良かったか
なんて考えても　もう今更
どうなるもなく

７５０

こうして人を思ってるみたいに
誰かに思われてみたいよ
そうしてそれでさえ
こんなに辛いなら
そんなものかと
知ってみたいんだ

７５１

空の彼方に住んでるって
そんな訳ないのに
もう
私の事はそんなんだって
見られてるようだ

７５２
目も合わせてくれない
それとなく身構えられ
終わってるんだけど
それはそれで馴れて
また何となく口を利くのも
あの人はきっぱり厭うんだ

７５３
雲も風もないと　晴れた空を
眺めてなくちゃいけなくなる
そんな朝がとっても怖いんだ

その何もない空の果てに
私の姿が見えてるようで
そうしてこの先もずっと
あの人に厭われたまま虚しく
生きて行かなくちゃいけない
それが辛くて堪らないんだよ

７５４
花筐の網目のように
数多の女に囲まれて
そんなじゃ
私の事なんて
数にも入らなくて
忘れられてようね

７５５
ﾜｷﾒ
浮和布ばかり生えて流れてる

だってそりゃ憂き目に遭って来たから
そんな浦は海人の寄るのも一通り
泣いてばかりの暗い私だもの
何時もほんの仮初めだね
男が顔を見せたって

７５６
あ　私とそっくりって
見合っちゃったよ
思い詰めて泣いてたら
涙の袖に映り込む
月の姿さえ濡れた顔してるんだもの

７５７
秋でもなく
置く白露は
寝覚めては
辛い涙の

枕の雫
とは
ね

７５８
須磨の海人の着る塩焼き衣
その織り目の粗いみたいに
彼との間もスカスカなのか
そんなじゃ来ては頂けない

…そんな事だったかな

７５９
彼って　ちゃんと
山城の　淀の若菰を刈りに行く
なのに
仮にも　来ない人を頼りにする
私って　情けない

７６０
逢えずに今も　恋しさは募って行くよ
つれない人に　何を求めて　近付いて
水無瀬川かに　心を潜らせ　深めては
思い初めたり　してしまったんだっけ

７６１
夜は明けてしまう
鴫の羽掻きを数えて　ｼｷﾞ
また夜は明けてしまう
百まで数えた
また夜は明ける
鴫は百回羽搏いた
百羽群れて羽搏いた
そんなの幾ら数えたところで
あの人は来ないんだから来ない
羽掻き羽搏く数だけ悩み悶えては

夜の数だけ藻掻き苦しむしかなくて

７６２

絶えない筈の葛（ｶｽﾞﾗ）も絶えよう
そんなで
二人の仲は絶えたって事で
それで吹く風の音とさえも
あの人が今どうしてるとか
そんなの
何も聞こえて来ないのかな

７６３

まだそんな頃でもなかったろうに
袖に時雨の降ったのは…
私を泣かす
あの人の心に厭（ｱｷ）きが来てたのかな

７６４
浅い山の井かの心で私は
思ってるのでもないのに
どうして水面の影としか
あの人の姿は見えて来ないのかな

７６５
忘れられないんだよ
どうしても
忘れ草の種を取って置いたのにな
逢うのがこんなに難しいんだって
初めっから
分かっていたんなら

７６６
でも
恋しいなら夢で逢えように

そんな夜も無いって事は
忘れ草は夢路にさえも
生い繋ってるのかな

７６７
夢でさえ
逢い難いって
やっぱり
眠れないからかな
それとも
あの人はもう私なんて
忘れたか

７６８
唐土も　モロコシ
夢に見たなら近いのに
思いの通わないって
遥かに

それよりも隔たってる
そんな仲なんだよな

７６９
降る長雨を眺めては　時ばかり経れば
古屋に一人　この古い妻なので
軒の端に忍ぶ草も生えて
あの人を偲んでる

７７０
家は
遂には
何処だか
道も無いまで
荒れてしまったよ
…
つれない人なんて

待ってたりしてるもんだから

７７１
またお伺いしますよなんて
そう仰ってましたでしょ
あのお別れした朝から
それを思い暮らして
蜩のように日日泣いてます

７７２
来ては下さるまい
そう分かってますよ
でも蜩の鳴く夕暮れは
何となくあなたを待って
立ち上がったりしてみたり

７７３
もう無い！って辛いばかりでも

衣に蜘蛛を見付けたりすると
これって逢える兆しだって
また望みを繋いでしまう

７７４
もう来ては下さるまい
そう思ってたのを忘れて
ついまた待ってしまうって
何時まで已められないんだろ
こんな事

７７５
月夜は嫌だな
来ない人を
待ってしまうものね
かき曇り
雨だって降ってくれないかな
そしたら

さっさと寝ちまえる
独り切りで
侘しくたって

７７６
苗を植えて
去ったままで
秋の田を刈りに
あの人は戻らない
初雁の鳴き声を
聞いたら私も
今朝は独り
声を上げ
泣いた
んだ
ぁ

７７７

来ない人を待つ
夕暮れの秋風は
どうやって吹いたのなら
こうも侘しくなるのかな
松ならば厭きの風とでも

７７８
住の江の松にしろ
久しく何を待つのかな
人を待つって苦しいもんだ

７７９
住の江の松ほど久しく待てば
鶴（タズ）の音かと泣かない日はないよ

７８０
私の事を恋しいなら

三輪山の麓まで
　いらっしゃいませよ（９８２）
そんな歌を誰やら詠ってた
その三輪山に住んだところで
どうして逢えましょうかね
訪ねてくれる人は居ないって
私　もう分かってますとも

７８１
野を吹き迷ってる風に
寒さを覚えては
秋萩の色と共に
移ろっても行くのかな
そんなあなたの
心変わりなんだ

７８２
（確か　あの時）

もう
これでお別れなのかなって…
だってこの身は時雨に降られ
秋も果てるなら私は古い女で
それであなたは心変わりして
さも木の葉かに言の葉さえも
色褪せ移ろい過ぎるようでは

（そしたらあの人　何て言ったんだっけ←）

７８３（返し）
何を仰っておられるのですか
もしあなたを思う私の心の
そんな秋の木の葉かなら
風のまにまに散り乱れ
どうなってましょう

（…だっけ→　それとも←）

７８３
そんな私の心で
秋の木の葉かと
風に散り乱れようなら
こうして歌のお返しの
言の葉を差し上げるのも叶いませんよ
今も私の心は他の女に乱れたりせずに
秋は果てたってあなたのものですって
お分かり頂けるでしょ

（…だっけ→　でもホントは←）

７８３
言の葉さえに　移ろった？
なるほどな　そんな事か
だけども　人を思う心の

そんな　木の葉だったら
俺は今頃　風のままに
散って　乱れてようかな
ヘッ　どうって事ないさ
　新しい風に乗り換えるぜ
もう厭き果てたって事さ
お前みたいな古い女には

（…って言ってたような→　だったら酷い）

784
（確か　あの時）

空の雲のように
またもあなたは
ずっと何処へやらとも
離れて行くんですよね
姿こそ私には見えてますけど

私だけのあなたなんですもの

（そしたらあの人　何て言ったんだっけ←）

７８５（返し）

いえね
私が上の空で
そんな行き帰りを
繰り返してしまうのは
あなたの吹かす山の風では
雲は吹き払われてしまうのです
私の居なくちゃいけないのは
山のあなたなんですけどね

（…だっけ→　それとも←）

７８５
ですからそのぉ

帰ってはまた直ぐ
落ち着かず上の空で
出て行ってしまうのは
雲の私が居るべき山なら
それはあなたなんですけど
速い風に吹かされては
仕方ないでしょう
どーしろと？

（…だっけ→　でもホントは←）

785
あのな俺が直ぐに帰って
どっかへ行っちまうのはな
お前が雲を遠ざける山の風を
ビュンビュン吹かせてるからさ
その姿を上の空の雲と見えてても
そんな事さえ未だに分からんとはな

そんな鈍い女なんかと遣ってられるか
って事なのさ！
（…って言ってたような→　だったら酷過ぎる）

７８６
唐衣ならその内に着慣れよう
掛けっぱなしでなかったらだけど
それがまさか恋しい切りに　あんな→
あの人を心に掛けっぱなしとはね
こんなの思いもしなかったたな

７８７
幾ら秋の風だってね
人の身を切り分けて
吹き込むなんて無い
なのに思い出の中の
あの人の心ったらさ

何でまるで空っぽで
私の中をバラバラに
ひゅーって通り抜けて
逃げ去るのかなって

７８８
つれない人だったな
あの人の言の葉なんて
秋より先に私に厭きてた
色移ろう紅葉葉だったんだ

７８９
っ死のうと思った
山の麓まで行った
でも死ねなかった
山だけ見て帰った
だ・れ・が・っ
あいつより先に死ぬもんか！

→私を辛い目に遭わせただけの奴

７９０
あの人の離れて行った
あの日から時は過ぎて
浅茅生う小野は枯れて焼かれて
今も私は思いの火を燃やしてる

７９１
野火を見たんだ
男と別れたこの身を
冬枯れの野辺と思えたら
あの野火！って
思いを火とも燃やし
また春を待ってるんだけど

７９２
水の泡なら消えてようか

それとも
消えないだけの泡の私か
そんな憂き身で浮いてる
とか言いながら流れては
それでも
あの人を頼みに永らえて

７９３

水無瀬川の私だけど
その行く水でさえも
無くすなんて事なら
その時こそは遂には
この身を絶えたって
思うしかなさそうで

７９４
よしや酷い人だって
もう分かってたって

付き合い始めた頃に
掛けてくれた言葉は
今も忘れられないな

７９５
好きな人の
心の色こそ
花で染めたように
移ろい易いものですよね

７９６
染まる心なんて
うんざりですよ
どうにもならずに憎らしい
染まらないなら
移ろう人の心に
振り回されたりしないのに

797

花なら移ろう色は見えてようにな　でも
そんな色なんて見えてたっけ
と
見えても見えなくても
映えたのかなとも
褪せてしまう
好きな人の
心に咲いた
その花の色

798

私独り
恋の鶯か
憂う涙は乾かずに
悔いて侘しく泣くんだよ
好きな人の心は花と散るのなら

７９９

別れて独りでこっちで
思ったって
離れて行く人なのでは
どうしよう
……
花ならまだ
咲いてて欲しかったな
でも花なら
散るさって見てようか

８００

もう来ない　別れたもの
それ切りさ
離れて行く　人だものね
そしたらさ
ウチの花を　眺めてよう
そうやって

別れた人を　独り偲ぼう

８０１
私を忘れてしまう
忘れ草なんて
枯れて欲しいよな
つれないあの人の心に
そんな霜は置かないものか

８０２
先ず
忘れ草の種は何なのかって
そこから考えてみないとね
と　そしたらさ
私を忘れちゃう
つれない人の心だったとは！
どうにもならん恋って事さ
それ

８０３
秋は田の稲を刈って架けとくけど
「往ね」なんて言葉は掛けてない　イネ
「もう厭きた」とかも言ってない　アキ
なのに私の何を嫌になったのかな
もうすっかり遠ざかったあの人は

８０４
初雁も
鳴いては
渡って行く
好きな人には
心の秋なのかと
厭きられては
辛いなって
泣くしか
ないさ

うぅ

８０５

あぁ
まだ好きなんだなと
引き摺ってても
うぅ
もう嫌いなんだけど
引き摺ってても
また
同じ涙が止まらない
何故なんだろう

８０６

嫌われた憂き身だからと
幾らそれを嫌だ　と思っても
消えて終われる　訳でなし
なのでこうして　何もなしに

世を生きてるだけなんだ

８０７
海人の刈る藻に棲んでる
ワレカラ虫なのかな
我から恋を捨てて
それで私独りだもの
それは声を上げて
泣いてしまうけれど
誰を恨むも已めておこう

８０８
逢えないも辛いも
この憂き身からの事だよ
それを今更下紐の解けるのって
その私の思いを知らないのかな

８０９

つれなくされたんだろ
もう断ち切るんだぞ　って
そう思ったろうに！
けど心が弱いんだよ　また
涙は流れてしまうのは

８１０

人に知られないまま
ひっそり終わってたら
それはそれで悲しいけど
でも　そしたらさ
ええっ　私の浮き名？って
そんなの違います　って
何も無いですから　って
言えたのにな　それが…
人に知れまくってたよ
トホホ

８１１
お願い
私の為だって思って　一つだけ
ウチへ来てたなんて　せめて
言わずにおいてよね　また
人に聞かれるからさ　ん
もぉぉぉ沢山でしょ

８１２
どうしたって逢えない！
そんな今になってって
人恋しいって
何なのかを
知れたよ

８１３
もう諦めたんだろ
その辛さも窮まり

それでも悲しみが
込み上げるのって
今更何に向かって
涙が出るんだろう

８１４
何を恨んでみても
幾ら泣いてみても
話を聞いてくれる
誰も居ないんだな
鏡の中の私の他に

８１５
夕方になる度
誰も来ないのに
床の塵を払うのって
ただ嘆こうとして
そうしてるみたいな

そんな私になってないか

８１６
この身を攫う涙の海の
大波が寄せては返す
海人の住む浦見て
幾度も繰り返し
あなたの事を
恨んでるよ
そんな私

８１７
荒っぽくたって今更なので
新たに拓いた田をとことん
また鋤き返すみたいにしてて
あの人の心根をほじくって　で
思いは必ず終わりにするぞ

８１８
恋する思いだったら
荒磯海の浜の真砂さ　アラソウミ
数え切れないんだな　って
てっきりその積もりで居たけど
それって
あれこれ忘れなくちゃいけない
数だったのって　何？

８１９
　葦の水辺から高い空へと
　雁は飛び立って行くよ
その遠ざかるのを眺める
この独り身の悲しさったら

８２０
時雨に時雨れた
紅葉葉を見るよりも

あの人の言の葉の
心の厭きに遭うのを
悲しかったよな

８２１
秋風も
吹きに吹いて
あの武蔵野の
どの草の葉も
色を変えたさ
厭きられては

８２２
吹き募る秋風に遭って
実りを頼みと出来ないて
田の実なんて悲しいね
この身こそ厭きられて
虚しいなって思うから

８２３
また秋風は吹きに吹いて
葛の葉を裏返してるけど　クズ
その葉裏見ては恨んでも
尚も裏見て恨み続けてる
あの厭きを吹かした風を

８２４
前は秋って
ただ秋だね。
だったんだ
なのに今は
あの浮気男の
私を古い女扱いした
厭きって名なんだって事！

８２５

仲は絶えて
途絶えては渡れない
壊れた宇治の橋かと
忘られた憂し身に
誰も通って来ぬまま
時は経って

826
逢えなくて
古びるまま壊れない
長柄の橋を渡るかと
ただ生き永らえては
ずっと恋い慕う間に
時は経って

827
憂えては浮いたまま
儚く泡と消えたいな

どう永らえようとも
流れて行くしかない
頼みにならぬ身なら

８２８

妹背の山の吉野川か
よしや永らえようと
動かぬ山に挟まれて
何も残さず流れ落ち
それとも私はまるで
流れに仲を割かれて
泣いてばかりで居た
動けぬ山だったかな　でも
どっちをどっちとも
生きたよって言える
そんな世を過ぎて
それで良しって
そうだよねっ

前を見よう
生きるよ
またね

恋
は
一つ
お
し
ま
い

巻第十六　哀傷歌

８２９
止まらぬ
俺の涙は
雨に降るんだぞ　川を増し
そっちへ渡れぬ　お前なら
まだ
戻って帰って
来られるだろうに

８３０
真っ赤に染まっては

あなたの生きた時の
名でしかなくなった
野辺を送る
落ちる涙の血と滾る
ここ白川は

８３１
亡骸は葬られ
これでもう
お姿もない
慰めはせめて
煙だに立て
深草の山に

８３２
そして
野辺の
心有る

桜なら
せめて
今年は
墨染めに咲けよ

８３３
亡きお姿は
寝ても夢に見
寝ずとも幻に見
寝ても寝てまいも
またも見えて来るよ
この世に在るのも大方
そんな儚い夢なんだろう

８３４
ただ夢と言うしかないんだよ
この世なんて
それを

夢じゃないなんて思ってただけで

８３５
眠って見るのだけが夢じゃない
儚いこの世だって
夢としか見えないじゃないか

８３６
早瀬なら
堰けば淀む淵ともなろうものを
人の別れは
止めようとも
止めようもない
止めようなんてないんだ

８３７
幾度と悔いた事やら
先に逝けなかった

悲しさ　辛さは
還らぬ水かに
止め処ない

８３８
明日をも知れぬ
この身とは思うけど
まだ陽の残る今日の内は
亡き人を悲しくてならないよ

８３９
よもや
生きて会える人とさえ
別れるのは恋しい秋に
逝って仕舞われるなんて
時だって有るでしょうよ
ねぇ　友則さんったら

８４０
この時雨れる神無月に
濡れる紅葉葉かに
赤く染まるのは
母を亡くした私の
嘆きの血の涙の袂です

８４１
藤衣の解れ糸は
父を亡くした私の
嘆きの涙の玉の緒です

８４２
オクテ
晩稲を刈る山田に置く
朝露かに
親を失った
この憂き世は

仮初めなのだと
思えてなりません

８４３（弔問先にて）
あなた様の墨染めの袂は
きっと
雲なのでしょうね
だって
絶えない私の涙を
雨と降らせるのですから

８４４（弔問への返事）
喪に服して
山辺に住み始めた私の
墨染めの衣の袖にしても
乾く時さえ有りませんから

８４５

花を映す水底も澄むなら
水の面かとさえ清かにも
亡き君の面影は目に心に
今また浮かんで参ります

８４６
日を数えれば正に
草深く霞む谷へと
お隠れになられて
照る日の暮れたのは
今日ではなかったか
日の君が偲ばれるよ

８４７
忌み明けと皆は
衣は花の色を纏おうなら
比叡の山に登り
独り頭を下ろした身とて

苔の衣にしても
せめて袂は乾いてくれよ

８４８
あれから　また打ち付けに
寂しくなったものですね
主を亡くして紅葉葉は
深まる筈の秋の色も
無いんでしょうね

８４９
時鳥の鳴く声に
驚き目を覚ました
正にこの時でしたよ
あなたにお別れをした
その夏の朝だったのです
この一年を経て

８５０
咲き初める頃
その桜を植えた人の
もうこの世には居ないとは
花とあなたと
どちらを恋しいかと
まさか思う事になろうとは
花の散るより
あなたの儚さをこそ
思い惜しむべきだったとは

８５１
花こそ
昔のままに
色も香も濃く匂おうとも
あなたの梅を植えるお姿は
恋しく慕われてしまうのです

８５２（河原院にて）
もう何処にも
お姿のない
煙も絶えては
うら寂しい
塩釜の浦のお庭の造りを
眺め渡す事になろうとは

８５３
あなた様の植えられた
一むらの薄でしたよね　それさえ
お庭のすっかり荒れて
虫は鳴き繁くばかりに
野辺の眺めとなってしまいました

８５４
いっそ
歌に残した言の葉さえも

消えてくれないものかと
亡き父の手を見ただけで
涙は滝とも溢れて来ます

８５５
時鳥さんは
亡き人の住まう処へも
通って行けるんでしょ
そしたらね
私
あなたをずっと心に懸けては
何時も泣いてばかりですって
あの人に伝えてくれないかな

８５６
花は咲いてるけど
誰に見て欲しいのかな
疾うに白雲の立つばかりの

広広と何もない野の眺めなのに
人は遠くへ去って

８５７（逝った妻の帳の帷子に残した書き付け）
あれもこれもと私の事を
忘れずに居て下さるなら
山の霞を私の儚い姿よと
お心の限り情けを込めて
眺め返して下さいませね

８５８（独りで逝った女の遠国の男に残した歌）
隔たるままに
お声も聞けずに
逝く悲しさよりも
私の失せた床に伏す
あなたの御身の労しく

８５９（秋に患う）

風に任せて散る紅葉葉よりも
それを見ているこの命こそ
もうずっと儚いんだとは

８６０（もう死ぬって時に）
露をなど
儚いものよと
思い侘びていたとは
今にも逝くと知れぬ
草に置かないだけの
この身でしかなくて

８６１
何をも去り行く
この道の限りに
消え散る身とは
聞いてはいたさ
昨日でないなら

それの今日とは
思いも寄らずに

８６２（甲斐への道中にて病み）
遠くに待つ母へ
仮のお別れかとの
行き交いの筈なのに
この道こそ今を限りと
よもやもう永の門出です

巻第十七　雑歌上

８６３
衣に露か
小雨なら
七夕の瀬戸を渡る
彦星の櫂の雫かな

８６４
集まれば直ぐ
話しが合うもんな私ら
ずっと楽しみたい夜さら
席立つなんて惜しいよ

二つない時さ

８６５
楽しかったよ
もっとゆったり
服着て来てたなら
嬉しいままを包めて
持って帰れたんだよね

８６６
こちらは
得も言われぬ
優れたあなた様に
折った花なんですもの
時も忘れて咲きましょうよ

８６７
武蔵野に見付けた

紫草のひともと故に
馴染めなかった他の草
皆を
愛おしく思わされるとはね

８６８
そうですとも　目に遙遙と
紫草の色も　濃くなれば
芽を張る　野の草木の
どれを　どれともと
もう　隔てもなく
に　愛おしくて

８６９（出世祝いに染めてない綾絹を贈って）
これは　何の色にとも
染まっていないと見えましょうか
でも心はあなたへの見えない程に
深い思いに染まっているのですよ

それは　ずっと昔から

８７０（同郷の友人が五位に任ぜられた祝い）
藪に埋もれてるようでもね
陽は深く差してるんですよ
分け隔てなくね
なのであなたも
長らく古い里に住まおうと
今や石の上にも花と咲いて

８７１（后が氏神に詣でた日に詠む）
大原の野に　東宮の御息所の詣でるなら
小塩の山は　昔を思い出しましょうね
今日こそは　あの神世の頃の事をも

８７２（五節の舞楽を見て）
天つ風よ
お前なら

乙女らの
天女かに舞う姿を
雲の通う道も吹き閉ざし
暫しの間
留めて置けよう
さぁ　そうしてくれようね！

８７３（五節の翌朝）
おや
これは？
白玉の
簪を拾いましたけどね
誰の落としたものやら
答えてくれないものでら
ならばいっそ昨夜観た
どの舞姫をもなべて
愛おしみましょうかな

８７４
大御酒のお下がりを　との
小瓶は　　　　　ｺｶﾞﾒ
何処へ行ってしまったやら
子亀は
こよろぎの磯の波を分けて
沖へ出たかに
返って来ずに

８７５（女共に姿を嗤われて）
形ならば可笑しくも
さも深山に隠れた　ほらっ
朽ち木と見えて
でも華やぐ心にも　ほらぁ
為せば為れますとも

８７６（方違えで）
昨夜お借りした

蝉の羽かと薄い
夏の衣に　さて
濃くも匂うのは
どなたの移り香なのでしょうか

８７７
こんなに遅い月って
きっと山の向こうで
月を惜しんでた人に
引き留められてたね

８７８
こっちは
更級姥捨山だよ
照る月など見てるんで
それで悲しい心は
慰めようにも慰め切れずに

８７９
まあ概ねは
月なんてね　滅多に
賞めるもんじゃないって
この月またこんな月って
そうしては　老いも
積もるって

８８０
それにしてもさ
良い月ってだね
見ようによって
疎ましいのはね
何処へ行っても
良い月だからさ

８８１
二つない筈でも

ほら　もう一つ
池の水の底にも
月が出ているよ
山の端でもなく

８８２

でも　ほら
天の川を過ぎる
雲の水が速くて
月の光りまでも
流してしまうよ

８８３

もっとずっと見て居たかろうに
直に月は隠れてしまう
山向こうの麓では
こっちが裏で
あっちが表か

こっちなんて
もう月は沈んで
あっちが恋しいよ
とか言ってそうだね

８８４
あぁ
折角の良い月でしょうに
こんなにも早く
隠れてしまわれようとは
山の端は逃げて
あなた様を入れずにいて
欲しいものです

８８５
大空を
照り行く
月は清ければ

雲は隠そうとも
光りは消せようものか

８８６
古い頃から
枯れ野に生う
冬まで落ちずに
葉を残した柏かに
元から変わらぬ心は
忘れられましょうか

８８７
この昔から湧いてる
野中の清水ですけど
今はもう温くたって
忘れずに訪れる人は
元からの心までをも
汲んでくれるんです

８８８
そんな賤の身にしたって
貴いお方と変わらずに
盛りの時は　そりゃ
有ったんですよね

８８９
　　昔は　盛りの
　男山　ってね
　　今は　こんなでも
　　　若く　楽しい頃を
　　坂を　登りながら
　私は　私なりにも
生きて来たんです

８９０
まあ　とは言え

こうして長らく
世を渡る身では
この古びた姿を
壊れては直してる
津の国の長柄の橋と
思い比べてしまうかな

８９１
盛りの身も今では
　積もる雪の重くて
　　撓む笹の茎かとも
　　　元から衰えて行く
もうそんな私だね

８９２
殯の森の
下草の年も闌け
馬にも嫌われて

モガリ
タケ

刈る人もいない　そんな
寂しく老いてる　私だね

８９３
数えれば　数は
疾く止まらない
そんなで　年も
疾しって今年は
疾く年老いたな

８９４
難波の御津で
焼く塩だって
辛かったけど　ｶﾗ
歳を取るのは
また辛（ﾂﾗ）いんだ

８９５
老いなんて奴が来るなんて
知ってたんなら
門など閉ざして
居留守を使って遣ったのに

（→右の三首は　昔　三人の翁が詠んだんだってさ）

８９６
年が後戻りしないかな
そしたらさ
どうにも出来ず
過ぎて行った齢も
また取り戻せるのにな

８９７
止めようにもどうにも
年月は止められなくて

あぁ
嫌だなぁ哀しいなって
過ごして来ただけだよ
うぅ

８９８
そうして　留められずに
疾く過ぎる年は　疾し
って言われるんだね
なるほど　そりゃ
知らない内にも
齢は重なるよ
つれなくも

８９９
おっと
ここ鏡山だってさ
ならば立ち寄って

年を経たこの身が
どんなに老いたか
映してみようかと

９００
齢を重ねれば
その先の別れは
避けられないもの
なので愈愈また
お顔を見せて
頂きたくて
取り急ぎ
母より

９０１（返し）
避けられない別れなんて事
どうでも来て欲しくないって
嘆く息子の為にもどうかずっと

きっと長生きして下さらなければ

９０２
帰る山も白雪は降り頻くか
年は返ろうものか積もって
幾年も返り重なりする度に
返せぬ老いを重ねた身だね

９０３
あの
皆さんね
あれやこれや
仰ってますけども
お互い長生き出来たんで
こうして旨い酒も飲んんで
楽しく遣ってられるんで
何で今更に老いた身なんど
責めたりするんでしょう

９０４
でもねぇ　あぁ
長い年を経て来たなって
古びた宇治の橋を
ずうっと
守ってる
人の事も
この身と引き比べ
声も掛けたくなるんです
今となってはね

９０５
　　あの住の江の岸の姫松もさ
　初めて目にしてからだって
もう　どれ程経ってるかな
小っちゃな松なのに
私なんかより

ずっと長く
どれ程の世を
生き抜いたのやらね

９０６
そう尋ねてみますか
何か
答えてくれますかね
あの姫松は
もし人なら

９０７
あの磯辺の小松を見ても
さぁどなたの由縁でしょ
よろず代の先まで望んで
何時頃種を撒かれたやら

９０８

ならば私も
こうして独り
老いながらでも
高砂の尾根に立つ
あの松じゃないけど
命の限り生きて行くか

９０９
なんて言ってはみても
今更　誰と親しく交われよう
高砂に独り立つ松にしても
私には旧い友とも言えず

９１０
皆居なくなってしまった
潮の会う遥か沖にでも
泡など立ってようか
消えはしなくても

寄る辺は無くて
そんな私かな

９１１
そんな海原を見晴るかせば
あぁあれは　淡路島山だよ
白妙の波を結い巡らしては
わたつみの挿す簪のようだ

９１２
その海原の先は玉津島だよ
寄せ来る波の絶えぬように
幾度とも眺め返したいよね

９１３
難波潟は潮が満ちてるよね
だってほら
海人の衣の

雨衣は蓑と
田蓑の島へ
鶴は鳴き渡って行くものね

アマゴロモ
タヅ

９１４
興津の浜の鶴でもないけど
君を尋ねたく思い置きつつ
会いに来て良かったよ　ま
相変わらずなのを知れてね

９１５（返し）
高師の浜の松でもないけど
沖つ波を鶴の渡るようにも
ずっと君を待つ身だったよ

９１６
難波潟に来てるんだけどね

つい
玉藻も初めて刈れるかなぁ
って
仮初めに
海人になっちゃいそうだよ

９１７
住吉は住み良いぜ
とか海人に言われて
長居するのは駄目だよ
人忘れ草の生えてる処さ

９１８
雨に降られて
田蓑の島へ駆け込んだって
名には蓑でも　ずぶ濡れさ

９１９

川風に吹かれ寄せはしても
返ろうともしない波かとも
蘆洲に鶴（タヅ）は白く立つ姿です

９２０（庭の池の舟遊びの後に）

池の
　水の上に
浮かぶ舟の
法皇様でしたら
　どうかこちらを
今宵の泊まりにと
　申し上げまして
お引き留めも
出来たでしょう
にね

９２１

唐琴って処に来てるんだけど
成る程ね
波の弦を風が弾くのかな
それで都まで
調べは響き通うんだ
（清行さんの事が思い出されるよ　４５６）

９２２（布引の滝を詠む）
扱いて散らされたかの
滝の飛沫を
白玉と拾って置いて
悲しい時の
涙にと借りるのさ

９２３（布引の滝を詠む）
うわー　何だろ　この滝は
そっちでひっきりなしに
どなたか緒を抜いては

白玉を乱れ散らして
おられましょうか
この狭い袖には
溢れるばかり
こんなでは
どう受けられましょうかね

９２４（吉野の滝を詠む）
どなたに着て貰おうと
張り晒した布でしょう
久しく眺めて来たけど
取り込む人も居なくて

９２５
早瀬の滝の清らな白を
糸に繰って置こうかな
それで衣を織り上げて
山に入って着たいよね

修行を積む身としては

９２６（龍門寺の滝を詠む）
龍門の仙人は去って
裁ち縫わぬ天衣など
誰の着よう筈もなく
山の姫は今何を思い
布を晒すのでしょう

９２７（布引の滝を七月七日に詠む）
晒そうと誰も着ない
布ですよ　ならばと
今日は七夕　織姫に
私の心尽くしにもと
お供えしましょうか

９２８（比叡山の音羽の滝を詠む）
眺めれば滝の水上は

年もろうならば
みな髪は真っ白かに
黒い筋も失せ果てて
老いてしまったかな

９２９（同じ滝）
吹く風にも
払われずに
処を定めて
　去らない
　白雲って
　　世を経ようと
　　　ずっと落ちてる水だったよ

９３０（屏風絵の滝を詠めと言われて詠む）
心の内で幾ら泣いても
お慕いする思いは堰き
その溢れ出すしかない

滝だからなのでしょう
　落ちるのは涙ばかりで
　　声は立てずに　音もなく

９３１（屏風絵の花を詠む）
咲き初めてより
この花の色の
変わらず褪せず
映えるままに
この世はずっと
春なのですか
ね

９３２（屏風絵に詠んで書く）
刈り干した
山田の稲穂を
扱き落とすかに
涙は零れてしまい

鳴いて渡る雁かとも
悲しく泣けて来る
愁いの秋ではね

巻第十八　雑歌　下

９３３
流れ定まらぬ飛鳥川をご覧よ
常なるものって何だろうね
世の全ては変わって行く
昨日まで淵だったのに
今日はもう瀬だもの

９３４
幾程も生きられないのに
また
海人に刈られる藻みたいに

何で
思い乱れたりしてしまうのか

９３５
雁の来る
峰の朝霧は
まだ晴れない
この世の憂さに
思いも尽きず

９３６
…にしたってさ
厭わしかろうと
それに背を向けて
世を捨てられもせず
事有るごとに煩わされ
あぁ嫌だなって　その度に
世の憂さを嘆くしかないのさ…

９３７（甲斐守任官中に）
あいつ　どうしてた？
　　って
都の人らに
尋ねられたら
高い山に囲まれ
雲も晴れない処で
くさくさ腐ってたわ
って　言っといてくれ

９３８（一緒に三河国へ行こうと誘われ）
こんな侘しい憂き身の
浮き草の根を断つかに
誰か誘ってくれるなら
そのまま水に流されて
何処へとも行こうかな
とは思ってますけども

ま　已めておきますか
今回は

９３９
あぁって思いは揺さぶられ
あぁそのせいでまたも
困った事なんだけど
あれこれ何かと
心を縛られては
どうにもならず
こんな世は見切って
捨てて仕舞いたくとも
また引き戻されてしまうよ

９４０
あぁって嘆けば
その事ごとの
言の葉ごとに

それと置く露は
昔を恋しい涙なのさ

９４１
世の憂きも辛きも
まだ誰にも何も
告げてないのに
それを先に知れた
涙は流れてしまうよ

９４２
世の中は
夢か現か知れないって？
有って無いって事なのさ

じゃ
有るって何？
無いって何？

何も知れないなら
有って無いって何？
これも何も知れない

じゃ
何も知れないって何？
それも知れないのなら
知ってるも知れないも
知れて知れないんだよ
何が夢で何が現かにしてもね
と
そんなで世を生きてられるのさ
有って無いって事でね

９４３
この世を生きてようにも
この身はどう遣って
有って無いのか

…
そんな事を
あぁそうだと思い耽るか
憂えて嘆いてみるか
どう言おうとも
？
何なのかな

９４４
何かと侘しい山里住まいも
憂き事に係わらずに済んで
世に身を置くより増しかな

９４５
都を離れ
白雲の棚引くばかりの
峰にでも
住めば住める世だって

知れたよ

９４６
知ってたよね
またそれを聞かそう
この世なんて厭うべきだよ
騒ぐ波に風の吹き頻る処だものね

９４７
世を厭うにしても
何処へ身を隠そうかな
先に
心ばかり
野へと山へと
彷徨き回ってしまうよ

９４８
昔から

誰もがどうにもこれ程に
酷い目に遭ってたのか
そうでもないんなら
じゃ何でこんなに
この身ばかりは
独り辛いのか
うぅ

９４９
世を厭う
この身なんてもう
そんな山辺の草か木って事かよ
だって　それって
卯の花の憂き色に出てるじゃないか
ぅ

９５０
遠く吉野の山深くに

宿を欲しいんだけど
憂き目を見て
辛いなって時の為の
隠れ処にしたいんで

９５１
こんな世だもの
ただ生きてるだけで
生きる憂さの増すのなら
崖また崖の道を踏み均すまで
吉野の山奥へ身を捨てたいんだよ

９５２
でもそんな事をしてみたって
どんな巌の中に籠もったら
憂えていたあれこれから
耳を塞げるのかなって

９５３

　　ならばもう
　　山また山へと
足に任せて逃げて遣るさ
山には峡なら有るからね　さ
　憂き世の中を生きる
　　甲斐は無くても

９５４
生きる憂さなら
嫌という程分かったよ
こんな世なんて飽き飽きだよ
山奥の奥まで行き果てて
木の葉に降る雪かと
身を消し去ろう

９５５（同じ文字のない歌）
うきめをみ

よにそむけって
やまへゆくころね
ぁ
なぜ
おりしも
わすられぬひとは
たちふさがるの？
え！

９５６
翻意しな！
だって山へ入ったって
その山だってやっぱり
世と同じに辛かったら
何処へ逃げる積もり？

９５７
m

憂き節の重なる竹の子だよ
小っちゃい君ぃ！
今更に　何で
生まれて来ちゃったのかな
そんな世だよ
知らなかったぁ？
折節憂うばかりだって事を

９５８
世に住めば　折節に
嫌な奴には　嫌な事を言われ
憂えては　泣くだけなら
竹の節毎に　止まっては鳴く
鶯さんだろ　まるで

９５９
私ったら
空っぽで

木でもありはしない
草でもありはしない
竹の節の端っこって　ョ
そんな身にしか
なれないのかな
あーあ

９６０
憂き世の中って私から名付けては
そんな嘆きを重ねて
生きてて辛いのはその私のせいと
私に言い聞かせては来たんだけど
あの人の事でもまた
悲しい思いをしなくちゃいけない

９６１（隠岐国にて）
思いもしなかったぜ
いや　何がってさ

俺　一応貴族で　この間まで
都をプラプラしてたんだけど
島流しにされて　今は
漁師になってるとはね
何で？
（もう　へとへと）

９６２
いや　まぁ
こっちなんて
須磨の浦だもの
無いと思うけどさ
ひょっとして誰かに
俺の事を尋ねられたら
せっせと藻に潮を垂らし
塩造りに励んでたよって
侘びしげに遣ってたって
言っといてくれな（泣き

９６３
いきなり　クビですもん！
お見舞いを頂きましても
山彦のようには　今直ぐには
お伺い出来そうもないんです
すっかり我を失ってしまって

９６４（解任中に）
憂き世にしろ
門は閉じているとも見えず
なら家からは出られるけど
世の外へまでは出難いって
どうしてかな

９６５
勤め上げる事も叶わないで
もう命尽きる時も迫るなら

それを待つ間程は　せめて
何も思い出さずに居たいよ

９６６（解任中に）
クビになっても
伝手を頼っては身を寄せ
やっと雨風を凌ぎながら
慈しみ深き春宮様の元へ
またお仕え出来ればなと
願うばかりです

９６７（急に落ち目の人を見て）
谷間に住めば
陽も差さず
春も来ず
咲かせた花は何時散るのかと
心悩まさずにも済む訳ですよ
散る程のもの思う心もなくね

９６８（桂の地に居て、お見舞いを下さった中宮への返事）
月に生う桂の里に住まって
ひたすら光りに身を寄せるかに
お后様を頼りとするのです

９６９（友への餞別の約束の夜）
送る宴をしようって
ずっと待ってるのに
すっかり夜は更けて
いやね今更にやっと
君に思い知らされたよ
待たされる身の辛さをね
同じ目に遭わせてたのなら
無沙汰な女の処へもちゃんと
通って置くべきだったかなって
今の君でも見倣って

９７０（惟喬親王を庵室に訪ねて後）
何の咎もあろう筈も無くて
こんな事になられるまでを忘れては
夢ではないかと思います
思いも致しませんでした
こんな雪深い里へまでも
あなた様をお訪ねせねばならぬとは
有ってはならぬ事なのです
（怒

９７１（里から京へ去る男より）
あなたとは共に
年経て身を寄せて来た
私だけ後にする深草の里なら
またも草深くに
野ともなりましょうか
独り残されるそのお心さえも

９７２（返し）
里は
そうして
草深く繁るなら年経るまま憂うも辛く
鶉となって私は野に鳴いてましょう　ウヅラ
そしたら
狩りにあなたが訪れないなんて
仮にだって無いでしょうもの

９７３
私を何はとも思って下さらないので
憂き目を見つつ尼となり果てました
難波の浦の浮海布（ウキメ）を三津の海人は　と

９７４（返し）
な　何を仰ってるんですかっ
難波潟の何を恨む浦ですって

ちゃんと通ってましたでしょ
私の何を見てたんでしょうか
恨まれるような事も　それで
あなたが尼になるような事も
何もしてませんよ　ええぇ？

９７５
もう誰も来ないし
蔓草は生え放題で
門も閉ざしてるよ
って言っといてるよ
って誰も居ないわ

９７６
どうやら嫌われたらしい
水の面に生えてる皐月の
浮き草の根の絶えるかに
君には私の顔を見るのも

きっと憂き事なんだろう

９７７
いやぁ　確かに久しく
顔は見せてないけどさ
でも
行こうとは思ってたさ　どうやら
こっちに居る身を離れ
心ばかりで知らぬ間に
君んちへ行ってたかな？
おかしいなぁ　あれぇ
思うようにならないよね　心って

９７８（あなたへの思いは雪の様に積もってます、と言われて）
雪と積もる思いですかぁ？
ほー　なら春を過ぎては
頼りにはなりませんかな

９７９（返し）
いえいえ
ただあなたを思って
越えて来た
越の白山の
雪は何時
消えたりしましょう

９８０
その思いを致す
越の白山ですけど
どう行くか知らないけど
あなたを思い慕っては
夢で越えない夜は
無いんですよ

９８１
よし　ここにずっと

腰を据えるってもう決めたぞ
菅原の伏見の里の荒れるのは
見過ごせないもんな

９８２
私の事を恋しいなら
三輪山の麓まで
いらっしゃいませよ
その庵の門なら
杉の立ってる処です

９８３
私なんて都の辰巳に
世を憂しともなく
庵を結んでるよ
宇治山は憂しって
人は言うらしいけど
で鹿も鳴いてそうかな

ま　そんな事なのさ

９８４
あれー　荒れてるなぁ
誰か住んでたのは
ずっと昔の事で
その人ももう
来ないよね
何時から空き家かなぁ

９８５
お見受けすれば
こちらのお住まいは
私のような世捨て人にも
持って来いかなって
この心の通りに
それをまた嘆くかに
琴の音も届いて参ります

９８６
私を古いもの扱いする
京の里を嫌って
出ては来たけど
ここ奈良の都も
名を古い里って
嫌な感じだわね

９８７
何処に根を下ろそうか
いや世渡りなんてね
行き着いた処なら
そこをねぐらと
定めるだけさ

９８８
逢坂は嵐だな

行くも戻るも
当ては無いし
寒い風を避け
侘しく寝るよ
今夜は独りで

989
家は定まらず
吹く風に舞う
塵の身だもの
孰れ何処とも
行方知れずで
消えてようさ

990
淵は瀬になる
飛鳥川だけど
家は売ったら

た

銭になったよ　ざい

９９１（筑紫から京へ帰って）
戻って見れば
馴染んだ里は
様変わりだよ
そっちに居て
碁を楽しんだ
君を恋しいな
斧の柄の朽ちるまで居るみたいに
時さえ忘れて

９９２（友達と語り合った後に）
ああ楽しかったぁ
お喋りって
ほんと飽きないわよね
楽し過ぎたんで
今は　ぼーっとしちゃって

家へ帰って来てても
心はまだあなたの袖の中かしら
そんな玉かと魂をなくし
ダグ

９９３（遣唐使に召されて）
山
なよ竹の節に
初霜の置く頃
長い夜の間中
起きたままで
我が身の上を案じては
ものを思うばかりです

９９４
風吹く
沖には
白波の

立田山を
あなたは独り切りで
こんな夜更けに
越えてましょうか

９９５
何か祓い清めたいって
ほら誰かさんの為の
木綿つけ鳥の声かな　頻りに
唐衣を断つ立田山を
鳴き渡ってますけれど

９９６
忘れられそうな時には
偲んでも貰えようかと
千鳥は
浜に足跡だけを残して
何処へか飛び去るかに

私も
筆を執って文字を残し
留めて置きますからね

９９７（万葉集は何時出来た？　と尋ねられ）
あの古き言かとなら
神無月は時雨に映える
楢の葉の名に負う宮へと
よろずの葉に取り集められ

９９８
独り後れて
鶴と蘆辺に鳴く声とても　タズ
雲の上まで
聞き届けられますように

９９９
人知れず

思う心とても
立ち出でる春霞と
お目に止まりますように

１０００
今は
その有様は山川の流れの
遠く音にしか知られない
大宮の水脈は速いのなら
身を早く嘗てのままにと
お仕えも叶いますように

巻第十九　雑体

短歌

1001

何時　逢えるのか逢えないのか
そんな人を思い初めたこの身は
晴れる時もなくて雲に閉ざされ
富士の峰の燃えて已まないかに
窮まりなく熱く思い続けても
逢うのが難しいのは難しいまま
そんな恨むも恨めない人は私を
沖の海の奥底の何処だか深みへ

沈ませ　思いを巡らすも虚しい
行く水の絶えないのは何故だ！
絶えて欲しい　そうして　ただ
降る雪のように消えたい　でも
人の世に在る身ではやるせなく
人を深く思い求め乱れてしまう
山の木木の下を流れる水と隠し
滾る心を誰に打ち明けられよう
うつかりとも誰にも知られまい
日暮れ時は薄暗い中に独り座って
あぁぁぁと嘆くもどうにも為らず
庭へ出ても　足の向きも定まらず
なら露のように消えたいにしても
ただ徒に嘆き続けるしかないのは
遠くても小さくても霞んでいても
あのお姿をまた目に映したいから
逢いたい

１００２（古歌を奉って）
歌は神世の頃より　何時の世も絶えず
音羽山の春霞には思い乱され
降り頻る五月雨は空を轟かせ
山時鳥の夜更けに鳴けば　誰も眠りを醒まされ
龍田山の紅葉葉を見ては　賞め遊んで楽しんで
神無月は時雨れに時雨れ　冬の夜には
庭のそちこちに降った雪もまた　消え返るかに
年毎のその時時に付け　心に沁む事を言い出し
あなたの幸を千代にと寿ぎ
燃えても尽きない恋の思い
早過ぎる別れを惜しむ涙や
藤衣を織って喪に服した悲しみを
世の人は八千草の言の葉に詠い込めば
帝の仰せを拝して　それらを巻巻に収め尽くそうと
伊勢の海の潮貝を拾うかに採り集めは致しましたが
才も短く心も足らない私共のようでは
思うに任せず　尚年を経て

宮中に昼夜を分かたず励みましたとて
帰らないままの私の家に忍ぶ草の生え
板敷きは破れ　降る春雨の漏れるかに
採るべき歌も見過ごしてしまったかと
心に懸かるばかりなのです

１００３（古歌を奉って）
世世の古い言の葉のなかったら
どうして思う心を述べられよう
嬉しくも人麿と言う歌詠みは昔　位は低くとも
帝の前までもその言の葉を届け
後の世までの手本とされたのを　今また
帝の仰せを拝しその後を継げと　私ごとき塵の身に
歌の事をお尋ねになられようか　喩えに浮かぶのは
その昔妙薬を飲んで空へ昇って　吠えた獣の心地で
他のあれこれを顧みず誇らかに
心を歌一つに向けて励むばかり　にしても
帝をお側にお守りしていたのを

1004

私を西の方へ就けたのは誰やら
御門より外を守る身となっても
重い務めを担えるとも思われず　お側近くなら
嵐の風も聞かなかったのに今は
野や山も近くに望んで春は霞の
棚引くかに心塞がれ夏は空蝉の　鳴くかに住み
秋は時雨に袖を濡らし冬は霜に
責められる侘びしい身ながらに
積もる務めも数えれば早三十年
出仕前まで加えればもう随分で
卑しい身分に齢を重ねるばかり
こんな苦しみの内にも長らえて　顔などは波立つ
難波の浦に溺れるかに皺だらけ
とは言え流石に命は惜しいもの　越の国の白山か
白髪頭の私でも老いず死なずの　薬を得るなら
帝の八千代をもも若い身となって　寿げましょう

有り難い
帝の御代に
生まれ合わせ
木陰に埋もれる
石清水の身かとも
思われました私さえ
こうした誉れを賜って

１００５

もう神無月なのでは今朝は
曇るかとも直ぐに時雨れる
古い里はと紅葉の降り落ち
山颪も吉野山から日毎寒く
玉の緒の解けて扱かれるか
霰は散り乱れて霜と凍れば
凍て付く庭に生う冬の草に
白雪の敷き積もる幾年月を
ひたぶる遣り過ごして来た

私

１００６

温子様　伊勢です
お別れの時からはもう
どれ程過ぎましたでしょう
年経て暮らし慣れた宮の内も
日日に人は去り荒れたばかりです
荒く波立つ沖へ舟を流されたかに
最早寄る辺もなく悲しい身です

そんな私共の涙の
心の色を紅に染める時雨と降れば
秋は紅葉を落とすかに
皆は散り散りにと
別れ別れとなるしかなくては
この先は何を頼みの蔭と出来ましょう
目に留まるものと言えばただ花薄
お姿のない寂しい庭に群れ立って

風に靡いて空を向く　招く様にも
鳴き渡る初雁は過ぎ　御魂を
何処へと運び去るのでしょうか
遠くからも　あなた様を偲んでは
私はずっと　見守って参りましょう

旋頭歌

１００７
見渡す先の
遠いそちらに
居られる方よ
さてと尋ねるのはこの私ですよ
そのそこに
白く咲くのは

何と言う花？

１００８（返し）
何よそれ
春ともなれば
野辺に先ず咲いて
見飽きたりしない花よ
手ぶらのあんたなんぞにね
軽く名乗れたりするもんですか

１００９
初瀬川と布留川の
合わさる辺りの
ふたもとの杉
何時かまた
相見よう
相生と
ふたもとのあの杉

１０１０
あなたが御笠を差す三笠山の
紅葉葉に差す色はね
神無月の時雨に染まったんだ

誹諧歌

１０１１
梅の花見と来てみれば
ひと来る
ひと来る　って
鶯さんには嫌われたよ
アハハハハ

１０１２
衣の花の色にね　尋ねたよ
山吹さん
あなたの主は　どなたかな
でも　答えてくれないのは
クチナシで染めたからだね
アハハハハ

１０１３
時鳥さん
田んぼ　どんだけ作ったの
朝な朝な
シデノタヲサ！　って
田の長を　呼び付けてるよ
偉そうに
アハハハ

１０１４

七夕なら　明日だよ
逸る心に　気は焦り
脛までも　捲り上げ
彦星はね　天の河を
今日から　渡るんだ
アハハハ　ハ

１０１５
秋でしょ　なのに
長いって夜は何処へ行ったの？
まだまだ　私らは
しっぽり語らい尽きないのにな
アハハハ　ハァー

１０１６
秋は　艶めき立っては
野に　咲き競う女郎花
あぁ　かしましい者ら

ｵﾐﾅｴｼ

でも　花なんて一時さ
とか　言っときますか
アハ　ハハハ

１０１７
秋の野に
婀娜っぽく戯れる女郎花
誰が
摘まずに
指咥えて見てられるかな
アハハハ

１０１８
秋の霧は
晴れたり
曇ったり
花の姿も
見え隠れ　ほら　チラッでも

も少し見せてよ　女郎花さん
アハハハ

１０１９
折ろうとするのは
花を愛でるだけだよ
女郎花なんて言うから
色事にのめり込むみたいじゃないか
アハハハハ

１０２０
つづりさせ
　つづりさせ
って　鳴くのは
蟋蟀さんの藤袴は
綻びてしまったかな
きっと秋風のせいだね
アハハハハ

１０２１（明日は立春なのに）
春は近いよ
隣まで来てるよ
だって　垣根を越え
花は舞い散って来るもの
風で吹き込む雪なんだけどね
アハハハハ

１０２２
もう古い恋なのに
頭の中で神神しく
脹らんで崇るんだ
悶悶としちゃって
寝るに寝られんよ
アハハハハ

１０２３

ああ恋心ったら
頭から足から攻めて来るんだもの
挟み撃ちされて
為す術なしだよ
寝床の真ん中で
縮こまってる私
アハハハハ

１０２４

恋したなら
あれやこれやと
手立ては有るって？
どっちへ心を向けようか
どうにも身を保ちようもなく
さっぱり　訳分からんじゃないか
アハハハハ

１０２５

試みがてら
逢わないでも
遣ってられるか
逢わないで居たら
とてもじゃないけど
駄目だって分かったよ
恋に戯れは通じないって
アハハハ

１０２６
思いは熱い緋の色なんだ　で
その下染めに耳なし山の
クチナシが欲しいんだよ　そしたら
それで思いも秘めたまま
ってね
アハハハハ

１０２７

足を引き摺る山田の案山子め！
おのれがごとき
助平心丸出しで
高嶺の花の私に
手を出そうって
チッ疎ましい奴
キャハキャハハ

１０２８
火と燃えるなら燃えろぉ
思いは遙か高嶺を極め
神様だって消せないぞ
成らぬ恋は富士の煙だぁ
ガハガハハハハ

１０２９
付き合って欲しい心は
星の数かに限りないよ

でもどうすりゃいいの
月さえ出ない夜ではね
伝手を探そうったって
闇を彷徨き回るばかり
アハハ

１０３０
月のない悲しい夜
逢おうにも伝手は無く
でも胸は熱く闇を駆けて
熾から撥ねる火の走るかに　オキ
起き居る思いに焦がれる心は
：アア

１０３１
春霞の棚引く野辺の
若菜にでもなってみたいな
そしたらさ

ねえぇ摘んでくれるかしら
若い肌も抓ってよね
アハハハーン

１０３２
好きになる程　嫌になるの
今も　何処の女と何してるの
春霞は何処の山にも懸かるもの
アハハ　ウーン

１０３３
草の葉の濃く繁るかに
恋の情けも濃くなって
春の野に飛び立つ雉の
ホロホロと鳴くように
妻を思うと泣けて来て
ア　ハ

１０３４
秋の野に
妻を持てない鹿も
カヒョーと鳴くよ
どうしてなのかな？
恋しても恋しても
年の経つばかりで
甲斐有ったのかよ
女ひでりも辛いね
て事かな
イヒヒヒヒヒョー

１０３５
蝉の羽みたいな　ひとえの
夏の衣も　着慣れてれば
薄くて　よれて来るよね
人の薄い付き合いだって
いずれ　よれて近付ける

ひとえに　馴れ親しめばね
ウフフフ

1036
隠れ沼の下から生える根蓴（ネヌナ）と
人目を避けて寝たとか何とか
まだ何も無い内から　そんな
寝ぬ名は立てません　なので
私の通って行くのを　どうか
厭わないで下さいね　宜しく
エヘヘ

1037
いっその事
何とも思ってないって
はっきり言って貰いたいんだけど
どうせあなたは　あの女よね

なんで何時もこうなるの
ハッハッ　クッ

１０３８
好きだなんて巧い事は言うけれど
どうなんだかね
こっそりあの人の心に立ち入って
どうなのよって
その隅まで裏を覗けないものかな
アハハ　ハァー

１０３９
こっちはね　思ってるのにさ
向こうがね
何とも思ってないんだってさ
じゃ已めた
もう何も思ったりするもんか
幾ら独りで

思ったって　仕方ないもんね
ハハハハー　ダ

１０４０
俺の思ってるのはお前だけさ
って言われたらまぁ安心かな
でもどうだかなぁ
あちこち　何時も
目移りしてるんじゃないの？
だって大幣かよ！
あの人ったら
皆に好かれてるし
フッー

１０４１
思われても
まさかその報いなのかなぁ
思ってても　思われなかった

アハハハハ

１０４２
あーあ　あの時
思ってくれて居たらしい人と
ちゃんと向き合って
思い合えるようにしてたらな
そりゃ　その報いの
なかったなんて事はないよな
今は　こんなで
トホホホ

１０４３
こっちは
行ってしまう人を
どう引き留めたら良いか分からず
困って　切羽詰まってるんだから
お隣さんくらいは

くしゃみでもしてくれないかなぁ
アァ　トホホ

１０４４
紅に染めたからって
灰汁で落とせるんだよ　アァ
思い染める心も褪せれば
厭くまま余所へ移って行く　アァ
当てになんてならないんだよ
アハハハ　アーァ

１０４５
厭われる身って
春の馬なのか？
遠ざけたいんだよね
野に飼われるようで
そのまま放たれ
捨てられてるし

アハハハ　ハァ？

１０４６
私は鶯さんの古巣かよ
古びた女に見られて
そっぽ向かれたよ
フン

１０４７
賢ぶって人真似で
夏は涼んで独り寝も
笹もざわめく冬までも
霜夜に独り凍えて寝てる
ブルッ　ブルッ　ァハ

１０４８
今では
逢う夜も

僅かな上に
二十日ともなれば　もう
夜も深くなくては月も無く
寄り付きも伝手も無く
夜更けてからしか
逢えないよね
ハハ

１０４９
遠く唐土の吉野山に籠もられようとも　ｷﾛﾛｼﾞ
こっちに残ったままに居ようだなんて
そんなヤワな恋する私じゃないからな
ハッハッハッ

１０５０
雲晴れぬ
浅間山のようでも
浅ましい

あなたの心なんて
はっきり
見えちゃったんだ
さっさと
終わりにするわね
ハハハハ

１０５１
老いた身を
長持ちしてた
長柄の橋に
喩えてたのも
橋を建て替えられたんじゃ
これからは
何に喩えよう
困るわよね
ならば何はと
ウーン　ハハ

１０５２
真面目って
それで何の
取り柄やら
遣りまくってる奴の勝ちさ
それで誰も困らせてないし
ケッ

１０５３
ケッ　ってさ
恋の噂を立てられたからって
それで何を困るって言うの
私に限った事じゃなしさ
どうせそう分かってて
ジタバタするんだし
そんだけじゃんか
ハッハーッ

1054

身に覚えのない
噂では従兄弟に
言い寄られてるって
そんなの偽りだよって
言い通すしかないもんね
縫る糸なら針に通すとかね
アハハハハ

1055

あのお社の神様は　お参りの願い事を
何でもハイハイって聞いちゃうけどさ
そうは　おいそれと叶う筈もないなら
果ては　嘆きの木の森になりそうだね
アハハハハ

1056

ハァーって重い溜め息が
凝り固まれば嘆きの木で
それを伐って投げてたら
なんと山と積み上がって
杖でもついて登ろうにも
すっかり疲れちゃってさ
先ずは頬杖つかせてよね
ハァー　アハハ

１０５７
そんな嘆きの木を
伐っては積み伐っては積み
遂に山の峡を埋め尽くしては　さて
溜め息吐いて嘆く甲斐も無いよ
ハ

１０５８
人恋するって重荷だよ

それを朸に担いでも　オケゴ
逢う事も出来ずに
虚しい限りだね
ハー

１０５９
私の心は
宵の間に
西の空に　直ぐに隠れる三日月か
あれって　満月の割れたのだよね
この頃は　そんな辛い思いばかり
ハハ　ァ

１０６０
そうだとしてもそうだとすれば
そんなでそれをこうともすれば
どうともこうとも言えもせずに
そんなでもそれがそうでなくも

そのないのがないでなくっても
どうともこうともならなくって
アアアアアアアアアアアアアア

１０６１
ハアアアアアアアアアアアアア
こんなどうもこうもならなくて
嫌になってその度に身投げして
そしたら深い谷も浅くなるわな
アハハハハハハハハハハハハア

１０６２
‥っ、何だよ　ったく
こんなイカれた奴らに恨まれる
こんな世の中をこんな世の中は
どれ程嫌だと思ってるのかなぁ
アアアアッアッハハハハッハッ

１０６３
何してたんだろう
何してたんだっけ
アホみたいに歳取ってるって
虚しく過ごされた年にしたら
こんな私って何？
どんな奴って思われてるのか
ほんと恥ずかしい
アーア　ハハハ

１０６４
こんなアホな身は捨てたよ
でも心は放ったりしないよ
だって捨てられたその身が
それから先どうなったかを
見てみたいじゃないですか
アーーア　ハハ

１０６５
降る雪と共に
私も古い身となりはしても
その降るようには
心は消えないものなんだな
ワッハッハッ

１０６６
梅も私の身はね
咲く花じゃなくて
その後に結ぶ実だよ
酸いは粋なら好き者で
ウフフフフ

１０６７
こら　峡の猿め！　ｷｲ
法王様をお迎えの
今日だと言うのに

山峡に　鳴くなよ　ｻﾝｷｮｳ
楽しまざる声だな
効ある良き日とは　ｶｲ
ちぐはぐに
侘しそうに
アハハハハ

１０６８
厭う世を離れ
木陰へ立ち寄っては
うつ伏して雨露を凌ぎます
空五倍子染めの墨の　ｳﾂﾌﾞｼ
麻の衣を纏い
ウフフー

巻第二十　大歌所御歌

１０６９（大直日の歌）
年の初めはこうして皆で
千歳も尽きぬ幸を見通し
新しき御竈木を重ねては　ミカマギ
この楽しきを窮め積もう

１０７０（古い大和舞の歌）
葛城山に雪降り已まず
時も失せ間も失せて
君を思う心は束ね

１０７１（近江ぶり）
近江を早くに立つのなら
うねの野に来て鶴の鳴く　タズ
今やっと夜は明け初める

１０７２（水茎ぶり）
草生い繁る岡の仮屋に
肌を重ね二人で寝てた
その明け方と来たらさ
また何って寒かったんだ
外はすっかり霜は降り

１０７３（四極山ぶり）　シハツヤマ
四極山を越えて
ずっと行ったら
見えて来るのは
笠縫いの島へと
漕いで隠れ行く

棚なし小舟だよ

神遊びの歌

採物の歌

１０７４
神垣に取り囲まれ
三室の山に榊葉は
神の御前に繁って
重なり合ってます

１０７５
霜は幾度置こうとも
枯れない榊葉かとも

神と共に立ち栄える
巫女さん達ですよね

1076
巻向(マキモク)の穴師(アナシ)の山に住む人かって
人から見間違われる程にも
山葛(カヅラ)を頭に飾るんだよ

1077
深山にはもう霰も降ってよう
里に近い山にしても
まさきの葛(カヅラ)は色付いてるもの

1078
真弓を引くなら　　どうしても

末を引き招きましょうよ
そうお誘いする
そんな私に
行く末までさえ
寄って来て下さいませね
忍びに忍んでは　　こっそりと

１０７９
ウチの門の処の
板囲いの井戸の
清水ですけども
里から遠いって
誰も汲まない内に
水草生えてますけど
（神様なら汲んで下さいましょうか）

１０８０（天照大神を祭る）
ﾋﾉｸﾏｶﾞﾜ

檜隈川に駒を止め
暫し水を遣って下さいましよ
あなたの
お姿だけなりとも
その間に拝んでましょうから

１０８１（催馬楽の転調の歌？）
青柳を縒った片糸で
鶯さんの縫うという
それは梅の花笠だね

１０８２
鉄を吹く
吉備の中山を帯と巡らす
谷川の細い流れの水音の
その清かさったらないね
（承和の大嘗会に吉備国が奉った）

１０８３
美作は久米の皿山
さらさら浮かれた
名など立てまいよ
万代までだってね
（水尾の大嘗会に美作国が奉った）

１０８４
流れ途絶えぬ
美濃の国は関の藤川とも
絶える事なく
君にお仕え致しましょう
万代までとて
（元慶の大嘗会に美濃国が奉った）

１０８５
御代は
限りもなく続きましょう

長浜の真砂を一粒一粒と
　数え尽くしましょうとも
（仁和の大嘗会に伊勢国が奉った）

１０８６
こちら近江はもう
鏡山を立てまして
君の千歳はそこに
御即位の初めから
　映ってをりますよ
（今上の大嘗会に近江国が奉った）

東歌

１０８７（陸奥歌　以下七首）
霧の立ち曇り

阿武隈は明けようとも
あなたをお帰しするもんですか
ただ待つ身となってては
もうどうにもなりませんものね

１０８８
何処って
陸奥なら何処を行くにしろ
塩釜の浦なら
漕ぐ舟の綱に曳かれる
岸辺の眺めなんて
侘しくて沁みるよな

１０８９
ウチの人を都へ遣っては
塩釜の籬の島の松とも
帰りを待つばかりの
その恋しさったら

1090
小黒崎は
みつの小島さぁ〜ん
もしあなたが人なら
都への土産に包んで
持ち帰っちゃおうか
なんて言っちゃうよ

1091
そちらの御随う人よ〃
「さぁ御笠を！」と〃
申し上げなさいませ
何しろ　宮城野では
木の下露は雨よりも
濡れてしまうんです

1092

最上川を上れば下る稲舟の
「いな」とは申しませんよ
でも　ただこの月ばかりは
先に延ばして頂きませんと
（註：何か日取りで揉めてるらしい）

１０９３
あなたを措いて　まさかね
別の人になんて
もしも心を寄せたらきっと
末の松山だって
波は越えてしまいますって

１０９４（相模歌）
こよろぎの磯に
磯菜を摘んでは
　立ち回る童を
　　濡らすなよ

沖に居れよ
波よ！

１０９５（常陸歌　二首）
筑波嶺はこなたかなたに
蔭は差しましょうけれど
あなた様に増す蔭なんて
何処にも御座いませんよ

１０９６
その筑波嶺に峰の紅葉は
落ちて積もって
知るも知らぬも
民ならば皆を
愛おしいよな

１０９７（甲斐歌　二首）
甲斐の嶺嶺を

清けく眺めたいんだ
それを　つれなくも
横様に臥してやがる
小夜の中山め

１０９８
甲斐の嶺嶺を
嶺越し山越し
吹くその風を
人だったらなって思ってしまうよ
そしたら言伝を頼めもしようにな

１０９９（伊勢歌）
麻生の浦に　オフ
差し拡がる片枝ばかりを覆って
生うのは梨だけれど
この恋は無しなのか　さて
成るのか成らないか

先ずは床を共にして語らおうよ

１１００（冬の賀茂の祭りの歌）
だって賀茂の社の
姫小松ですからね
万代を経ようとも
色は変わりません

墨滅歌

（家家に証本と称する本に書き入れながら墨を以ちて滅ちたる歌）

巻第十　物名部

１１０１（４２３の次）　ヒグラシ

杣人達の
宮の大木を
切り出すのに
呼び声を重ねて
響くらしいね
あの山彦は
山奥から

１１０２（４３１の次）　ラガダマノキ
天翔ったところで
そんなの何をか魂の
来たと見えようか
骸は炎と燃やされて

１１０３（４４６の次）　クレノオモ
あなたが来てくれた
あの夕暮れの思い出に
今も恋しいその同じ時に
あなたの面影を追えば
その姿は消えないよ

１１０４（４５６の次）　オキノイ　ミヤコジマ
消えぬ思いの火かとも
私の心に熾の居座り　オキ
身を焼かれるより

どうにもならず
悲しかったな
あなたの向かうのは都
島から送るのは私
あんな別れは

1105（463の次）　ﾘﾒﾄﾞﾉ　ｱﾙﾀ

目は見も知れぬ色に染め
どの世とも余所の眺めか
と見渡すなら　憂き世も
畔は田を過ぎ　谷を抜け　ｱ
棚引く雲の湧き立つ山の
麓までは逃れて遣ろうに

巻第十一

1106（551の次）

人を恋う今日の心は
大井川を流れる水にだって
劣ったりしないんだ

１１０７（右の歌の次）
あの子に逢いたくてどうしよう
逢坂山の篠薄じゃ　穂は出ない　シノススキ
そんなで　好きって言えなくて
ずっと恋しいばかりなんだよな

巻第十三

１１０８（６５２の次）
イヌガミトコ
犬上の鳥籠の山なら名取川
そんなで　名を取ったら拙いでしょ
二人の仲なら「さあ？」って答えて

私の事は漏らさないでよね

（諸本）
犬上の鳥籠の山ならいさら川
そんなで　二人の仲なら
「いや、ないさ」って答えて
私の事は漏らさないでよ

１１０９（返し）
山科の音羽の滝の音かとも
そんなで　人に知られる恋なんて
この私はしたりしませんよ

巻第十四
１１１０（６８８の次）
そっか

きっと今宵の筈だよ
愛しい人の訪れなら
だって
蜘蛛の振る舞いから
はっきりしてるって

１１１１（６９８の次）
住の江の岸の辺りに
生えてるんだよね
恋の忘れ草だよ
恋なんてもの
忘れたくて
摘みにも
行ける
よね
道さえ知れたならね

※参考書

香川景樹著 瀧澤貞夫校訂「古今和歌集正義」勉誠社
佐伯梅友校注「古今和歌集」岩波書店
窪田章一郎校注「古今和歌集」角川書店
奥村恆哉校注「古今和歌集」新潮社
久曾神昇訳注「古今和歌集」講談社
片桐洋一訳注「古今和歌集」創英社
小町谷照彦訳注「古今和歌集」旺文社
高田祐彦訳注「古今和歌集」KADOKAWA

久曽神昇編「伊達本 古今和歌集 藤原定家筆」笠間書院

田中喜美春 平沢竜介 菊地靖彦共著「貫之集／躬恒集／友則集／忠岑集」明治書院

室城英之 高野晴代 鈴木宏子共著「小町集／業平集／遍昭集／素性集／伊勢集／猿丸集」明治書院

大塚英子著「古今集小町歌生成原論」笠間書院

※

紀貫之作 鈴木知太郎校注「土左日記」岩波書店

大津有一校注「伊勢物語」岩波書店

石塚龍磨稿 田林義信編「校證古今歌六帖」有精堂

新編国歌大観第二巻私撰集編「新撰和歌」角川書店

古今和歌集

著者　u_

© 2021 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published